長崎県文化財調査報告書　第199集

魚洗川Ｂ遺跡Ⅱ

－百花台公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２００８

長崎県教育委員会

雲仙普賢岳をのぞむ

発刊にあたって

本書は，百花台公園整備工事に伴い実施した魚洗川（いわれご）Ｂ遺跡の発掘調査報告書です。

魚洗川Ｂ遺跡は，島原半島の北部雲仙市国見町に所在する百花台遺跡群の中の一つで，これまで８回の発掘調査が行われ，旧石器時代から縄文時代にかけての遺構や遺物が発見されています。

今回の調査では主に縄文時代晩期の土器が出土しておりますが，調査を実施した地点がこの時期に土石流や火砕流の災害を受けていたことも明らかとなりました。当時の自然環境を知る上でも貴重な成果であると考えられます。このような調査成果の積み重ねが，本県の歴史を正しく認識するための一助となっていくものと思います。

最後になりましたが，この報告書が学術資料や地域の歴史教材として活用され，文化財への理解が一層深まることを祈念いたしますとともに，今回の調査に際しご理解とご協力をいただきました地元の方々をはじめ，関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成20年３月31日

長崎県教育委員会教育長

横田修一郎

例　　言

1．本書は，百花台公園整備工事に伴う魚洗川（いわれご）Ｂ遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は長崎県教育委員会によって，平成19年６月11日から同年10月12日にかけて実施した。

3．調査関係者は以下の通りである。
調査担当　長崎県教育庁学芸文化課　文化財保護主事　山下　英明
文化財調査員　大谷　育恵

4．調査区の航空写真は㈱埋蔵文化財サポートシステムに業務委託した。

5．調査区のグリッド杭設定は㈱扇精光に業務委託した。

6．遺物，図面等の整理は，一瀬裕子・今里陽子・氏福恭子・小川博美・奥村清美・頭島直美・津田由紀・中村千春・成田万里・中里明美・野島愛子・浜崎美加・藤田良子・福山留美・古川都志子・前田文江・松尾咲江・松尾陽子・溝口恵子・山村きよみ・山本幸子・横田愛子・和田美加が行った。

7．土壌と出土土器の放射性炭素年代測定（AMS 測定）は㈱加速器分析研究所に委託した。

8．本書に掲載した遺物・写真・図面は長崎県教育庁学芸文化課資料整理室で保管している。

9．発掘調査から報告書製作に至る過程で，以下の方々にはご助言とご協力を賜った。
川道寛（文化施設整備室），辻田直人（雲仙市教育委員会），山口勝也（㈱埋蔵文化財サポートシステム），村子晴奈（別府大学大学院生）

10．本書の編集は福田の協力を得て大谷が行った。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯（山下）……1
　第１節　経　　過……1
　第２節　調査組織……1

第２章　遺跡の立地と環境（山下）……2
　第１節　地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……4
　第３節　調査履歴……5

第３章　調　　査（山下）……8
　第１節　調査の方法……8
　第２節　層　　位……8
　第３節　調査区の概要……16

第４章　遺　　物……18
　第１節　遺物の分布（大谷）……18
　第２節　土　　器（大谷）……20
　第３節　石　　器（福田）……27

第５章　ま　と　め（山下）……39

附篇　放射性炭素年代測定結果報告書（AMS 測定）魚洗川Ｂ遺跡 ……40

挿　図　目　次

第１図　百花台周辺遺跡……3
第２図　調査区配置図……7
第３図　トレンチＡ土層断面図……9
第４図　トレンチＢ土層断面図……10
第５図　トレンチＣ土層断面図……11
第６図　トレンチＤ土層断面図……12～13
第７図　トレンチＥ・調査区北壁 SR１部分土層断面図 ……14
第８図　トレンチＦ・Ｇ土層断面図……15
第９図　SR１平面図 ……16
第10図　３層および５層上面コンターライン……17
第11図　出土土器①……18
第12図　出土遺物ドットマップ……19
第13図　出土土器②……20
第14図　出土土器③……21
第15図　出土土器④……22
第16図　出土土器⑤……23
第17図　出土土器⑥……24
第18図　出土土器⑦……26
第19図　年代測定資料……26
第20図　出土石器①……28
第21図　出土石器②……29
第22図　出土石器③……30
第23図　出土石器④……31
第24図　出土石器⑤……33

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……2
第２表　百花台遺跡調査履歴表……5
第３表　土器観察表①～③……34～36
第４表　石器観察表①・②……37～38

図　版　目　次

図版１　調査区遠景……51
図版２　調査区全景……51
図版３　Ｆ区調査風景……52
図版４　Ｅ９－４トレンチＤ３層上面検出状況……52
図版５　Ｅ８－４・Ｅ８－３トレンチＤ３層上面検出状況……53
図版６　Ｅ８－４トレンチＤ，Ｅ８－４区４層上面検出状況……53
図版７　Ｅ８－３区 SR１検出状況 ……54
図版８　Ｅ10－３，Ｅ10－４区４層上面検出状況……54
図版９　Ｅ10－４区４層遺物出土状況……55
図版10　トレンチＥ５層以下試掘坑……55
図版11　トレンチＦ……56
図版12　トレンチＧ……56
図版13　出土土器①……57
図版14　出土土器②……57
図版15　出土土器③……58
図版16　出土土器④……58
図版17　出土土器⑤……59
図版18　出土土器⑥……59
図版19　出土土器⑦……60
図版20　出土石器①……60
図版21　出土石器②……61
図版22　出土石器③……61
図版23　出土石器④……62
図版24　出土石器⑤……62

第１章　調査に至る経緯

第１節　経　　過

百花台遺跡群は，島原半島北部の雲仙市国見町に所在し，標高200～280ｍを測る火山性山麓扇状地の扇頂にあたる緩傾斜面に展開している。この遺跡群は百花台Ａ～Ｆ遺跡および魚洗川Ａ～Ｃ遺跡からなり，魚洗川Ｂ遺跡は，この遺跡群中最南端に立地する。百花台遺跡群の調査は，1963（昭和38）年の和島誠一・麻生優による学術調査にはじまり，1982～1993（昭和57～平成５）年には長崎県教育委員会により百花台広域公園建設，県道国見雲仙線改良工事，全国植樹祭会場整備事業などに伴う調査が行われている。また，これとほぼ同時期に同志社大学・県立国見高校からなる百花台遺跡発掘調査団による学術調査が実施されている。これらの調査によって，縄文時代の遺物包含層のほか，旧石器時代の文化層が層位的に検出されており，この時代の石器組成や構造を解明する上で貴重な成果が上がっている。

今回の調査は，長崎県の事業である百花台公園整備工事に伴うもので，遺跡内に工事が及ぶ計画であったため，2003（平成15）年度より範囲確認調査を実施した。その結果，2,400㎡について調査が必要となり，島原振興局と協議の結果，２カ年に分け本調査を実施することとなった。本書は2007（平成19）年度に実施した本調査（1,500㎡）の報告である。

第２節　調 査 組 織

範囲確認調査から報告書刊行に至るまでの組織は以下のとおりである。

○範囲確認調査　2004（平成16）年10月25日～11月12日

学芸文化課	課　　長	樋口　聰	総括課長補佐	北島康孝
	文化財指導監	高野晋司	課 長 補 佐	宮崎貴夫
	係　　長	川道　寛		
	調査担当	文化財保護主事　山下英明	文化財調査員	山田英明

○範囲確認調査　2005（平成17）年度11月30日～12月22日

学芸文化課	課　　長	樋口　聰	総括課長補佐	嶋田孝弘
	文化財指導監	高野晋司	課 長 補 佐	宮崎貴夫
	係　　長	古門雅高		
	調査担当	文化財保護主事　山下英明	文化財調査員	平田賢明

○本調査　2007（平成19）年６月11日～10月12日及び報告書整理

学芸文化課	課　　長	唐沢裕之	総括課長補佐	松元栄治郎
	課 長 補 佐	古門雅高	係　　長	原田和幸
	主任文化財保護主事　福田一志			
	調査担当	文化財保護主事　山下英明	文化財調査員	大谷育恵

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

長崎県雲仙市国見町は島原半島の北部に位置し，南北12km，東西６km，面積37.59㎡の町域を持つ。西は同市瑞穂町，東は栗谷川を隔て島原市有明町に接している。また，南は普賢岳，国見岳，妙見岳などの雲仙火山群に接し，北は有明海に面している。町の東寄りを流れる土黒川は国見岳北麓に源を発し，途中土黒西川と合流し有明海に注いでいる。この河口付近に多比良港があり，ここから熊本県長洲港まで海上直線距離で約14kmである。

魚洗川Ｂ遺跡を含む百花台遺跡群は，土黒川を河口から約7.5kmさかのぼった火山性山麓扇状地の扇頂部付近に分布し，土黒川が形成した段丘崖上に立地する。標高は約200～280mである。この山麓扇状地は，雲仙火山活動の初期に堆積した雲仙基底火山砕屑岩で構成され，竜石層とも呼ばれる角閃石安山岩の亜角礫～円礫を含む砂礫層よりなる。この扇状地は遺跡付近で３～４度の緩やかな角度で北に傾斜し，西の土黒川と東の栗谷川との間に平坦な山麓地形をつくり出している。

今回，調査を行った魚洗川Ｂ遺跡は，百花台遺跡群中最も標高の高い南端に位置する。調査地点は公園化に伴い公有化されているが，それ以前は畑地として利用されていたところである。

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所　在　地	種　別	立　地	時　代
1	水口田遺跡	雲仙市国見町土黒下八斗木	遺物包含地	丘陵	縄文
2	泥渕遺跡	〃　八斗木名字泥渕	〃	台地	旧石器
3	小ケ倉Ａ遺跡	〃　金山名字堀囲	〃	丘陵	旧石器・縄文
4	小ケ倉Ｂ遺跡	〃　金山名字堀囲	〃	丘陵	旧石器・縄文
5	小ケ倉Ｃ遺跡	〃　金山名字堀囲	〃	台地	旧石器・縄文
6	栗山遺跡	〃　八斗木名字葉山	〃	台地	縄文
7	泥谷遺跡	〃　金山字名泥谷	〃	台地	縄文・弥生
8	森岡遺跡	島原市有明町戸田名字横道	〃	台地	縄文
9	百花台Ａ遺跡	雲仙市国見町金山名字堀囲	〃	台地	旧石器・縄文
10	百花台Ｂ遺跡	〃　金山名字堀囲	〃	台地	旧石器・縄文
11	百花台Ｃ遺跡	〃　金山名字堀囲	〃	台地	旧石器・縄文
12	百花台Ｄ遺跡	〃　金山名字堀囲	〃	台地	旧石器・縄文
13	百花台Ｅ遺跡	〃　金山名字堀囲	〃	丘陵	旧石器・縄文
14	百花台Ｆ遺跡	〃　金山名字堀囲	〃	台地	旧石器・縄文
15	魚洗川Ａ遺跡	〃　金山名字横道上	〃	丘陵	旧石器・縄文
16	魚洗川Ｂ遺跡	〃　金山名字横道上	〃	台地	旧石器・縄文
17	魚洗川Ｃ遺跡	〃　八斗木名字上原	〃	丘陵	旧石器
18	魚洗川Ｄ遺跡	〃　金山名字横道上	〃	丘陵	旧石器・縄文
19	魚洗川Ｅ遺跡	〃　矢筈75林班３－31	〃	丘陵	旧石器・縄文
20	二ツ石遺跡	島原市有明町戸田名字地蔵辻	〃	丘陵	縄文
21	東鷹野遺跡	〃　大三東字東鷹野	〃	丘陵	縄文
22	一本松遺跡	〃　大野名一本松高野	〃	台地	縄文
23	上油堀遺跡	〃　三会油堀町上油堀	〃	河岸段丘	縄文
24	礫石原遺跡	〃　有明町大野名一本松高野 〃　三会礫石原町	〃	台地	縄文
25	礫石原古墓	島原市三会礫石原町	墳墓	丘陵	平安
26	大タブ沢遺跡	〃　三会広高野町大タブ沢	遺物包含地	台地	縄文・中世
27	馬渡遺跡	〃　立野町馬渡	〃	丘陵	縄文
28	平の山Ａ遺跡	〃　杉谷千本木町平の山	〃	丘陵	縄文
29	肥賀太郎遺跡	〃　杉谷千本木町肥賀太郎	〃	丘陵	縄文

高下名
植松
多比良
戸田名
平山
桂山
久原名
戸切
森岡
金山名
百花名
黒木名
有明町
大野名
百花台公園
国見町
油堀町
広高野町
礫石原町
国立大学研修センター
森岡牧場

第１図　百花台周辺遺跡

第２節　歴史的環境

ここでは，百花台遺跡周辺の歴史的環境について述べることとするが，標高150m以上の百花台山麓地における遺跡の傾向として，弥生時代以降の遺跡が希薄でほとんど周知されていない。また，今回の調査においては縄文時代の遺構・遺物が主体をなすため，この時期に重点を置いた記述を行うこととする。

旧石器時代の遺跡としては，百花台遺跡群の他に３小ヶ倉Ａ遺跡，４小ヶ倉Ｂ遺跡，18魚洗川Ｄ遺跡がある。小ヶ倉Ａ・Ｂ遺跡は，百花台Ｂ遺跡の北500～700mに位置し細石器や剥片が出土している。魚洗川Ｄ遺跡は，魚洗川Ｂ遺跡の南500mに位置し，剥片尖頭器・細石器が出土している。いずれも百花台遺跡群に隣接することから関連の深い遺跡として捉えられよう。また，百花台遺跡群においては，Ⅲ～Ⅶ層の各層から遺物の出土認められ，この地域に継続的な人々の営みがあったことがわかる。

縄文時代は草創期以降，各時期の遺物の出土が知られる。百花台遺跡群の細石器石器群の編年を行った川道寛氏によれば，18魚洗川Ｄ遺跡，10百花台Ｂ遺跡，12百花台Ｄ遺跡，３小ヶ倉Ａ遺跡などの細石器石器群が草創期に位置づけられるという（川道2004）。このうち小ヶ倉Ａ遺跡からは，細石器と押引文段階の土器が共伴して出土している。縄文早期でまとまった遺物が出土しているのは，百花台遺跡群で，炉穴遺構・集石遺構や押型文・撚糸文・塞ノ神式などの土器が出土している。この他に貝殻条痕系土器がまとまって出土した３小ヶ倉Ａ遺跡や押型文土器が採集された８森岡遺跡などがある。前期の遺跡は分布が希薄で，周辺では百花台遺跡群や魚洗川Ｄ遺跡に限られ，轟式・曽畑式などの土器や竪穴住居跡などが検出されている。また，中期・後期も同様で百花台遺跡群，魚洗川Ｄ遺跡から船元式・阿高式・西平式・三万田式の土器が確認されている程度で，周辺への拡がりを持たない。ただし，同じ国見町内で，標高８～12mの海岸部付近には，後期の良好な資料が出土した筏遺跡などがあり，この時期の代表的な遺跡である。晩期になると百花台山麓地域では，百花台遺跡群において晩期前半～中葉（黒川式）の土器が検出されている。また，１水口田遺跡，７泥谷遺跡において後期・晩期の土器が確認されている。栗谷川を隔てた，島原市有明町側には縄文晩期の大集落である24礫石原遺跡がある。この遺跡は1955（昭和30）年以来10数次にわたる調査が行われ，縄文晩期（黒川式）の土器をはじめ，住居跡・方形石組遺構・小児カメ棺墓・集石墓などの遺構や，勾玉・管玉・石刀・扁平打製石斧など多くの資料が出土し，縄文晩期におけるこの地域の核となる集落跡であると考えられている（宮崎・伴1990）。この他，晩期前半の小児カメ棺が出土した20二ツ石遺跡，晩期前半を主体とする21東鷹野遺跡，晩期中～後半の遺物が大量に出土した29肥賀太郎遺跡など，礫石原などを中心とした晩期遺跡の集中が標高200～300m付近に見られる。晩期後半以降になると，百花台周辺においては遺跡の分布が希薄となり，この状況は次の弥生時代以後も続いていくことになる。

第3節　調査履歴

百花台遺跡の発見は，1955（昭和30）年頃島原市在住の古田正隆によって遺物が採集されたことを契機とするが，その後，1960年代・1980年代の学術調査や開発に伴う発掘調査が数次にわたり実施されている。ここでは，百花台遺跡群のなかの魚洗川Ｂ遺跡の調査履歴について述べる。

1987（昭和62）年～1990（平成２）年には，県道雲仙国見線改良工事に伴う発掘調査が長崎県教育委員会により４次にわたって実施された。調査地は遺跡の西側で，現県道下にあたる。調査は年度ごとに北から順次行われた。この調査において，Ⅳ～Ⅵ層から旧石器時代の集石遺構・土壙・礫群などの遺構やナイフ形石器・台形石器・台形様石器・剥片尖頭器・掻器・石核などの遺物が出土している。また，Ⅱ～Ⅲ層から縄文早期の炉跡・落とし穴遺構・土壙などの遺構や塞ノ神式土器・楕円押型文土器・石斧・石鏃・石皿・たたき石・スクレーパー・石核，晩期の土器などが出土している。

1988（昭和63）年には全国植樹祭会場造成工事に伴う発掘調査が，同じく長崎県教育委員会によって実施された。調査地点は，遺跡の北西側で，現在「県民の森百花台森林公園」となっている所の中

第２表　百花台遺跡調査履歴表

番号	調査開始日	調査終了日	遺跡名	調査の原因	調査の種別	調査面積	調査主体	文献
1	1982/7/5	1982/8/30	百花台Ｄ遺跡	公園造成	範囲確認	176	長崎県教育委員会	長崎県－078集 長崎県－092集
2	1982/7/20	1982/8/8	百花台遺跡	学術調査	－		同志社大・国見高校 国見町教育委員会	『百花台1982第４次発掘調査概報』1983
3	1983/3/15	1983/3/30	百花台遺跡群	県道改良工事	範囲確認	80	長崎県教育委員会	長崎県－078集 長崎県－116集
4	1983/4/11	1983/6/4	百花台Ｄ遺跡	公園造成	範囲確認	188	長崎県教育委員会	長崎県－078集 長崎県－092集
5	1983/6/6	1983/10/4	百花台Ｄ遺跡	公園造成	本調査	1207	長崎県教育委員会	長崎県－078集 長崎県－092集
6	1983/8/13	1983/8/20	百花台東遺跡	学術調査	－	49.5	百花台遺跡発掘調査団	同志社－008集
7	1983/10/5	1984/1/25	百花台Ｄ遺跡	県道改良工事	本調査	921.95	長崎県教育委員会	長崎県－116集
8	1984/4/9	1984/7/18	百花台Ｃ遺跡	県道改良工事	本調査	100	長崎県教育委員会	長崎県－116集
9	1984/4/9	1984/7/18	百花台Ｄ遺跡	県道改良工事	本調査	730	長崎県教育委員会	長崎県－116集
10	1984/7/9	1984/11/16	百花台Ｄ遺跡	公園造成	本調査	1290	長崎県教育委員会	長崎県－078集 長崎県－092集
11	1984/7/24	1984/8/5	百花台東遺跡	学術調査	－	57.5	百花台遺跡発掘調査団	同志社－008集
12	1985/3/18	1985/3/30	百花台東遺跡	学術調査	－	68.25	百花台遺跡発掘調査団	同志社－008集
13	1985/4/8	1985/8/30	百花台Ｂ遺跡	県道改良工事	本調査	810.4	長崎県教育委員会	長崎県－116集
14	1985/4/8	1985/8/30	百花台Ｃ遺跡	県道改良工事	本調査	246.4	長崎県教育委員会	長崎県－116集
15	1985/7/1	1985/11/9	百花台Ｄ遺跡	公園造成	本調査	1100	長崎県教育委員会	長崎県－092集
16	1986/4/14	1986/7/19	百花台Ｂ遺跡	県道改良工事	本調査	1090	長崎県教育委員会	長崎県－116集
17	1987/3/15	1987/4/1	百花台東遺跡	学術調査	－	116.75	百花台遺跡発掘調査団	同志社－008集
18	1987/4/6	1987/11/7	百花台Ｂ遺跡	県道改良工事	本調査	2200	長崎県教育委員会	長崎県－116集
19	1987/11/9	1987/11/13	魚洗川Ａ遺跡	県道改良工事	試掘	24	長崎県教育委員会	長崎県－116集
20	1988/2/1	1988/2/13	魚洗川Ｂ遺跡	植樹祭会場造成	範囲確認	84	長崎県教育委員会	長崎県－095集
21	1988/3/7	1988/3/31	魚洗川Ａ遺跡	県道改良工事	本調査	400	長崎県教育委員会	長崎県－116集
22	1988/4/6	1988/5/24	魚洗川Ｂ遺跡	植樹祭会場造成	本調査	550	長崎県教育委員会	長崎県－095集
23	1988/6/6	1988/8/10	魚洗川Ａ遺跡	県道改良工事	本調査	800	長崎県教育委員会	長崎県－116集
24	1988/8/17	1988/9/9	百花台遺跡群	県道改良工事	本調査		長崎県教育委員会	
25	1988/9/30	1988/10/6	魚洗川Ａ・Ｂ遺跡	県道改良工事	試掘	39.5	長崎県教育委員会	長崎県－116集
26	1989/5/8	1989/8/25	魚洗川Ａ・Ｂ遺跡	県道改良工事	本調査	1470	長崎県教育委員会	長崎県－116集
27	1990/4/9	1990/4/20	魚洗川Ｂ遺跡	県道改良工事	試掘	56	長崎県教育委員会	長崎県－116集
28	1990/6/18	1990/8/18	魚洗川Ｂ遺跡	県道改良工事	本調査	700	長崎県教育委員会	長崎県－116集
29	2003/1/20	2003/2/4	百花台遺跡群	保存目的	範囲確認	88	長崎県教育委員会	長崎県－176集
30	2004/10/25	2004/11/12	魚洗川Ｂ遺跡	保存目的	範囲確認	78	長崎県教育委員会	長崎県－188集
31	2005/11/30	2005/12/22	魚洗川Ａ・Ｂ遺跡	保存目的	範囲確認	90	長崎県教育委員会	
32	2007/6/11	2007/10/12	魚洗川Ｂ遺跡	公園整備工事	本調査	1500	長崎県教育委員会	本報告書

心部分である。基本土層は百花台遺跡群と同様の堆積状況であるが，Ⅱ層は全面的に削平され，Ⅲ層も部分的に残存しているにすぎない。調査の結果，旧石器時代のナイフ形石器・台形様石器・削器・石核などがⅣ～Ⅵ層から出土した。縄文時代の遺物は包含層が残っておらず，表土や表採品にとどまるが石鏃や石斧などが確認されている。また，遺物を伴わない落とし穴状の土壙が検出されており，掘り込まれた層や覆土から縄文時代早期の可能性が指摘されている（副島・伴1989)。

2003（平成15）年には，百花台広域公園の拡張計画に伴う範囲確認調査を長崎県教育委員会が実施した。工事予定地内に，31箇所の試掘壙を設置し調査を行ったが，Ⅳ層上面まで削平されており，縄文時代の包含層は確認されていない。また，Ⅳ層以下は百花台遺跡群の基本層序が確認されたが，遺構・遺物ともに検出されなかった（和田2005)。2004（平成16）～2005（平成17）年にも百花台公園整備工事に伴う範囲確認調査を実施し，縄文晩期の包含層や台形様石器の石核などを検出し，今回の調査契機となった。

これまでの調査で，旧石器から縄文晩期までの遺物が確認されているが，ナイフ形石器を主体とする後期旧石器時代の石器群が魚洗川Ｂ遺跡を代表する文化層であろう。しかし，これまで削平され確認されることが少なかった縄文時代の包含層が部分的にではあるが残存していたことが今回判明した。今後，縄文時代の文化層についても更に留意していく必要があろう。

【引用・参考文献】

川道寛編　2004「第Ⅰ部　百花台遺跡群」『地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅰ』長崎県文化財調査報告書 第176集　長崎県教育委員会

副島和明・伴耕一朗編　1989『魚洗川Ｂ遺跡』長崎県文化財調査報告書 第95集　長崎県教育委員会

副島和明・町田利幸編　1991『礫石原遺跡』長崎県文化財調査報告書第 100集　長崎県教育委員会

田川肇・副島和明・伴耕一朗編　1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第92集　長崎県教育委員会

田川肇編　1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 第116集　長崎県教育委員会

辻田直人・竹中哲朗　2003「長崎県国見町における縄文時代草創期遺跡の調査」『西海考古』第５号　西海考古同人会

寺田正剛編　1994「筏遺跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅱ』長崎県文化財調査報告書 第114集　長崎県教育委員会

長崎県教育委員会　1997『原始・古代の長崎県』資料編Ⅱ

長崎県土地対策室編　1977『土地分類基本調査　島原・荒尾』長崎県

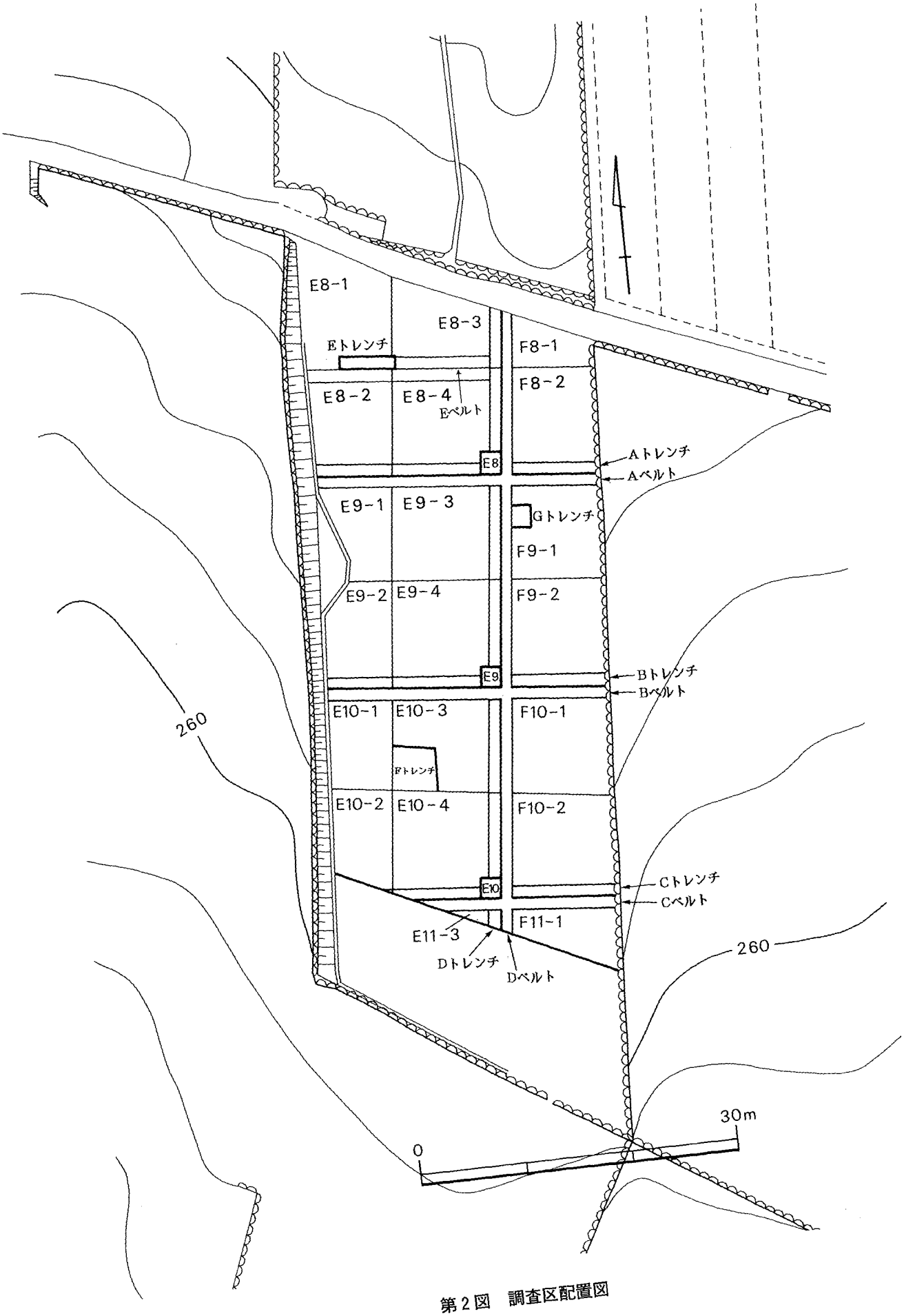
古門雅高編　2001『東鷹野遺跡』有明町文化財調査報告書 第13集　有明町教育委員会

松藤和人編　1994『百花台東遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告第８冊　同志社大学文学部文化学科

宮崎貴夫・伴耕一郎編　1990「Ⅰ．肥賀太郎遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報ⅩⅢ』長崎県文化財調査報告書 第97集　長崎県教育委員会

山下英明編　2006『地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅲ』長崎県文化財調査報告書 第188集　長崎県教育委員会

和田政則編　2005『長崎県埋蔵文化財調査年報12』長崎県文化財調査報告書 第182集　長崎県教育委員会


E8-1
E8-3
Eトレンチ
F8-1
E8-2
E8-4
Eベルト
F8-2
E8
Aトレンチ
Aベルト
E9-1
E9-3
Gトレンチ
F9-1
E9-2
E9-4
F9-2
E9
Bトレンチ
Bベルト
E10-1
E10-3
F10-1
260
Fトレンチ
E10-2
E10-4
F10-2
E10
Cトレンチ
Cベルト
F11-1
E11-3
Dトレンチ
Dベルト
260
30m
0

第2図　調査区配置図

第3章　調　　査

第1節　調査の方法

(1) 範囲確認調査

百花台公園拡幅工事予定地内に，19箇所の試掘壙を地形に応じ任意に設定した。試掘壙の呼称は，2003（平成15）年度の範囲確認調査で設定された公共座標による20m方眼（北から１・２・３・・・，西からＡ・Ｂ・Ｃ・・・と呼称）を利用した。試掘壙の内訳は２×２ｍの試掘壙を18箇所，２×３ｍを１箇所で，調査面積は78㎡である。

19箇所の試掘壙のうち，遺物を検出したのが10箇所（Ｅ８・Ｅ９・Ｅ10・Ｃ13－１・Ｃ13－２・Ｄ11・Ｆ14・Ｆ15－１・Ｆ16・Ｈ12），遺構を検出したのが２箇所（Ｅ８・Ｆ14）である。遺物はＥ８に集中しており，他の試掘壙は土器片や黒曜石が２～３点出土したのみである。遺物の時期は，縄文晩期が主体であった。

(2) 本　調　査

本調査を実施した地区は，2004（平成16）年度の範囲確認調査において縄文時代の遺物包含層を確認した試掘壙（Ｅ８・Ｅ９・Ｅ10）周辺の1,500㎡である。

重機による表土除去の後，10m×10mのグリッドを設定し，人力による全面掘り下げを実施した。グリッドは，範囲確認調査で設定したものを踏襲した。また，縄文時代の遺物包含層掘り下げを完了した後，１ｍ×５ｍ，４ｍ×４ｍ，２ｍ×２ｍの試掘坑（Ｅ・Ｆ・Ｇトレンチ）を設定し，旧石器時代の包含層の確認を行った。

第2節　層　　位

土層は調査区により若干の相違はあるが，３層以下は概ね百花台遺跡群の基本層序と同様である。

表土　耕作土である。

１層　色調により２層に分層した。縄文晩期・弥生時代・中世の遺物を含む。

　１ａ層・・・灰褐色土層　　締まりがある。

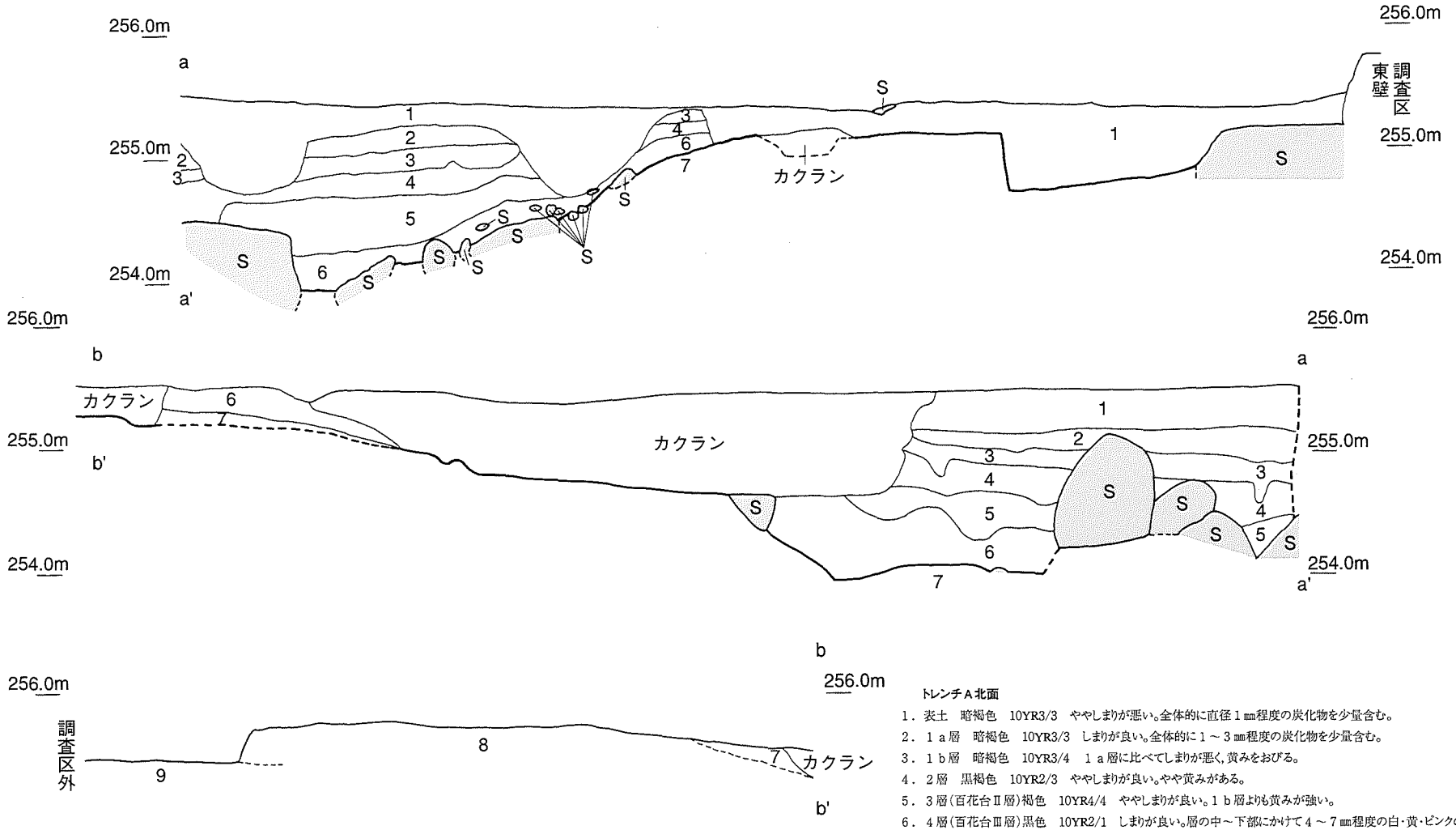
　１ｂ層・・・灰黄褐色土層　１ａ層より明るくフカフカしている。

２層　黒色火山灰土層　締まりがなく，フカフカしている。中位～下部に縄文晩期の遺物を多く含む。礫石原遺跡Ⅱ層であると思われる。

３層　黄褐色火山灰土層　締まりがあまりない。一部に暗褐色土が混じり，まだらになる部分もある。縄文時代の遺物包含層である。百花台Ⅱ層に相当。

４層　黒色火山灰土層　締まりがなく，ぼそぼそしている。いわゆる第１黒色土帯で，百花台Ⅲ層に相当。

５層　黒褐色土層　非常に締まっている。灰・橙・ピンク・白色などの２㎜～１㎝大のパミスを多く含む。いわゆるカシノミ層である。百花台Ⅳ層（礫石原火砕流堆積物）に相当。なお，Ｅ10区には灰黄色～灰白色の非常に締まった砂質土層があり，1986（昭和62）年度魚洗川Ｂ遺跡調査（副島・伴1989）の第Ⅳｂ層（黄灰色砂質土層）に相当するものであろう。

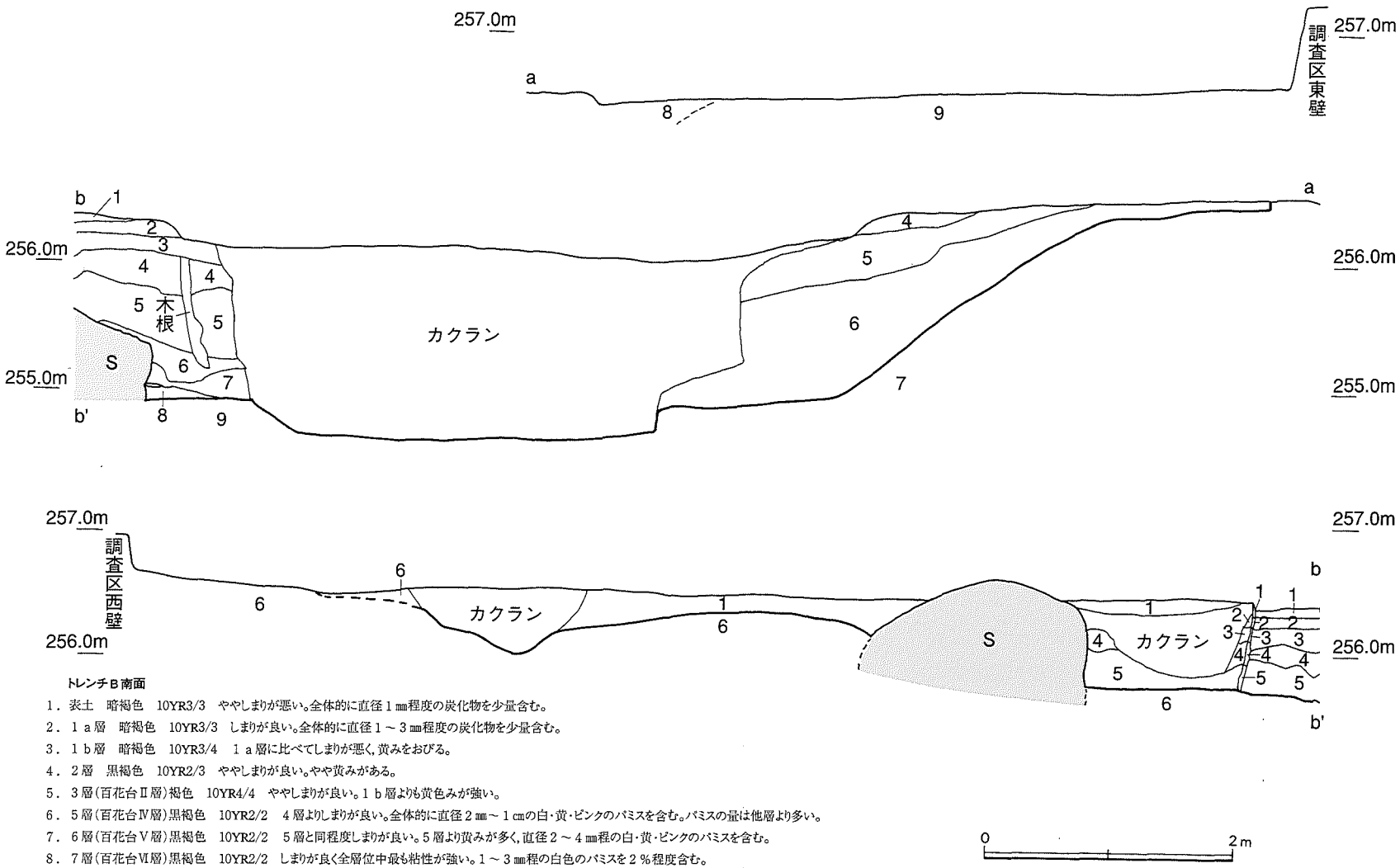


トレンチA北面

1．表土　暗褐色　10YR3/3　ややしまりが悪い。全体的に直径1㎜程度の炭化物を少量含む。
2．1a層　暗褐色　10YR3/3　しまりが良い。全体的に1～3㎜程度の炭化物を少量含む。
3．1b層　暗褐色　10YR3/4　1a層に比べてしまりが悪く，黄みをおびる。
4．2層　黒褐色　10YR2/3　ややしまりが良い。やや黄みがある。
5．3層(百花台Ⅱ層)褐色　10YR4/4　ややしまりが良い。1b層よりも黄みが強い。
6．4層(百花台Ⅲ層)黒色　10YR2/1　しまりが良い。層の中～下部にかけて4～7㎜程度の白・黄・ピンクのパミスを含む。
7．5層(百花台Ⅳ層)黒褐色　10YR2/2　4層よりもしまりが良い。全体的に直径2㎜～1㎝の白・黄・ピンクのパミスを含む。パミスの量は他層より多い。

0　2m

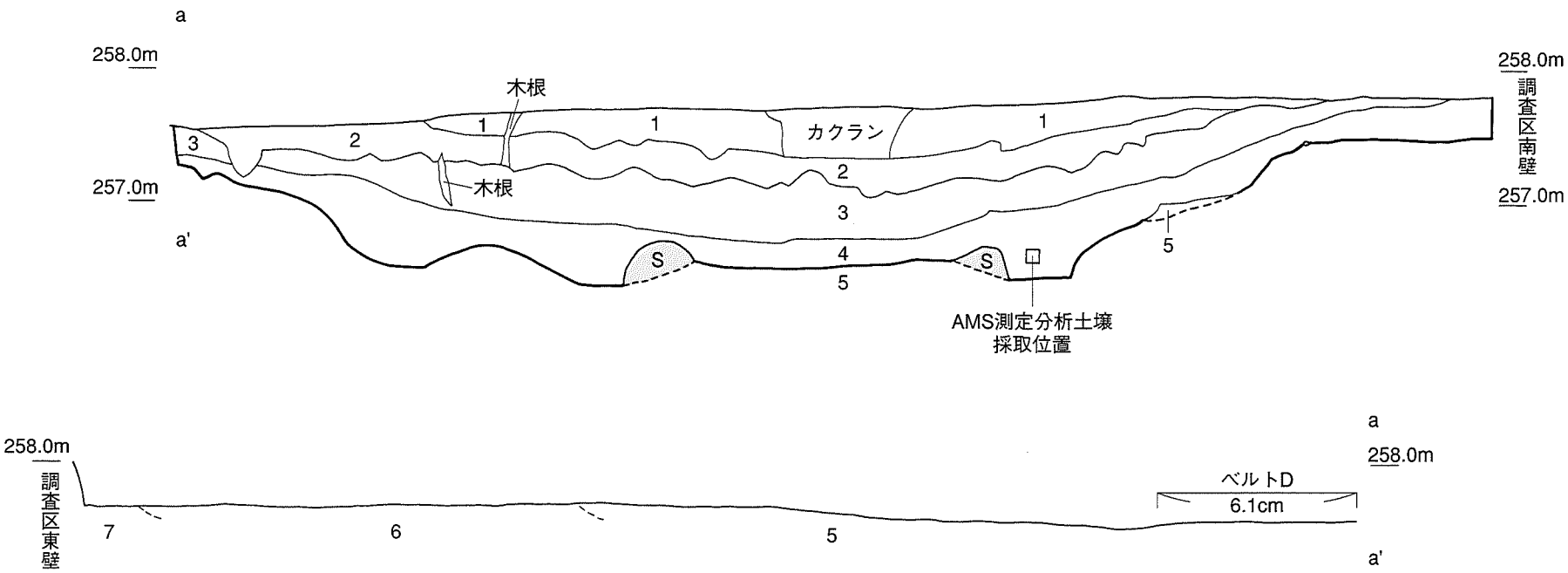
第3図　トレンチA土層断面図



トレンチB南面

1．表土　暗褐色　10YR3/3　ややしまりが悪い。全体的に直径1㎜程度の炭化物を少量含む。
2．1a層　暗褐色　10YR3/3　しまりが良い。全体的に直径1～3㎜程度の炭化物を少量含む。
3．1b層　暗褐色　10YR3/4　1a層に比べてしまりが悪く，黄みをおびる。
4．2層　黒褐色　10YR2/3　ややしまりが良い。やや黄みがある。
5．3層(百花台Ⅱ層)褐色　10YR4/4　ややしまりが良い。1b層よりも黄色みが強い。
6．5層(百花台Ⅳ層)黒褐色　10YR2/2　4層よりしまりが良い。全体的に直径2㎜～1㎝の白・黄・ピンクのパミスを含む。パミスの量は他層より多い。
7．6層(百花台Ⅴ層)黒褐色　10YR2/2　5層と同程度しまりが良い。5層より黄みが多く，直径2～4㎜程の白・黄・ピンクのパミスを含む。
8．7層(百花台Ⅵ層)黒褐色　10YR2/2　しまりが良く全層位中最も粘性が強い。1～3㎜程の白色のパミスを2％程度含む。
9．8層(百花台Ⅶ層)黒褐色　7.5YR2/2　ややしまりが悪い。パミスをほとんど含まない。

第4図　トレンチB土層断面図

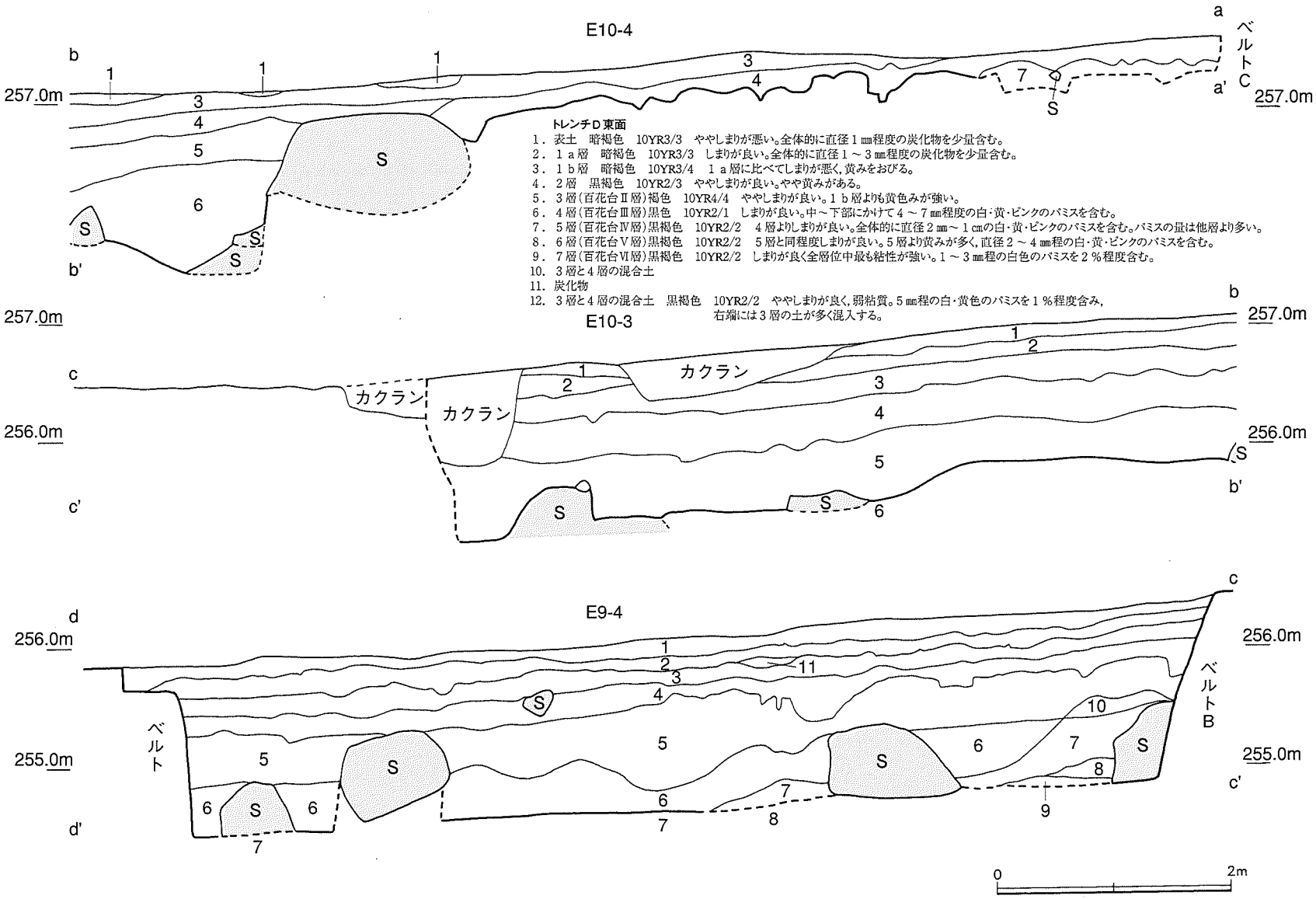


トレンチC南面

1．1ｂ層　暗褐色　10YR3/4　1ａ層に比べてしまりが悪く，黄みをおびる。
2．2層　黒褐色　10YR2/3　ややしまりが良い。やや黄みがある。
3．3層（百花台Ⅱ層）褐色　10YR4/4　ややしまりが良い。1ｂ層よりも黄色みが強い。
4．4層（百花台Ⅲ層）黒色　10YR2/1　しまりが良い。中～下部にかけて4～7㎜程度の白・黄・ピンクのパミスを含む。
5．5層（百花台Ⅳ層）黒褐色　10YR2/2　4層よりしまりが良い。全体的に直径2㎜～1㎝の白・黄・ピンクのパミスを含む。パミスの量は他層より多い。
6．8層（百花台Ⅶ層）黒褐色　7.5YR2/2　ややしまりが悪い。パミスをほとんど含まない。
7．9層（百花台Ⅷ層）黄褐色　10YR5/6　2㎜～2㎝程度の白・黄・赤・灰色のパミスに加えて，拳大～人頭大の石を多く含む。百花台Ⅶ層に比べてややしまりが良く粘性も強い。

0　2m

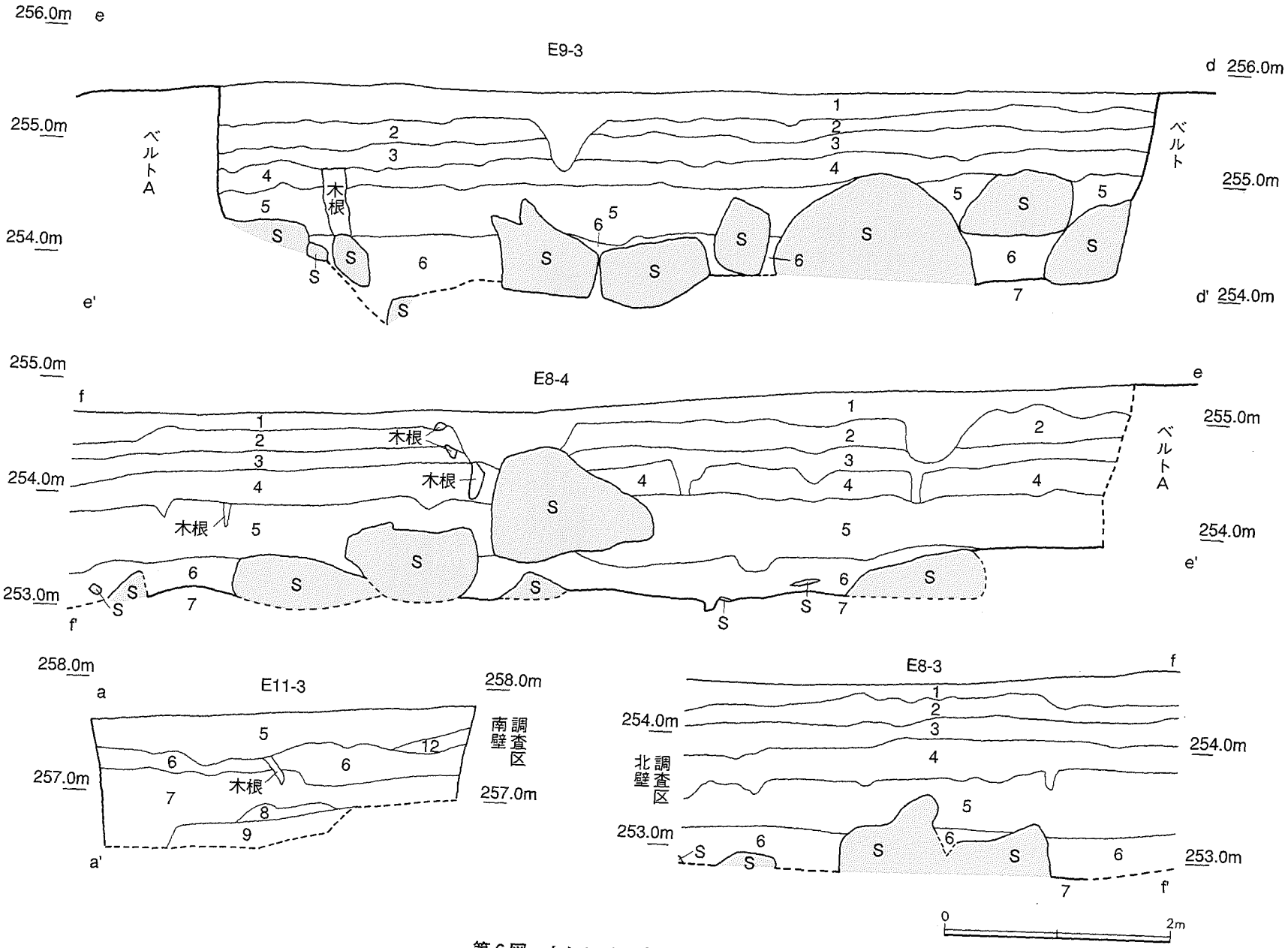
第5図　トレンチC土層断面図



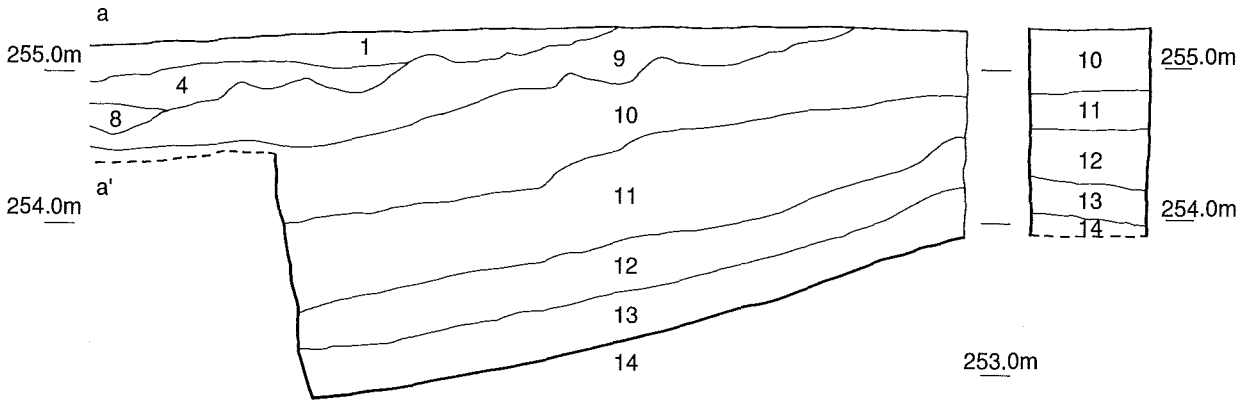
トレンチD東面

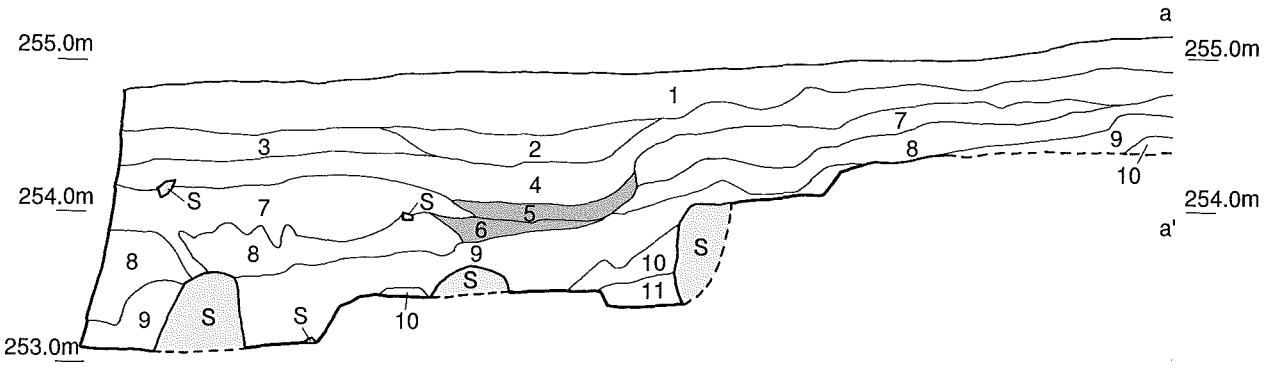
1．表土　暗褐色　10YR3/3　ややしまりが悪い。全体的に直径1㎜程度の炭化物を少量含む。
2．1a層　暗褐色　10YR3/3　しまりが良い。全体的に直径1～3㎜程度の炭化物を少量含む。
3．1b層　暗褐色　10YR3/4　1a層に比べてしまりが悪く，黄みをおびる。
4．2層　黒褐色　10YR2/3　ややしまりが良い。やや黄みがある。
5．3層(百花台Ⅱ層)褐色　10YR4/4　ややしまりが良い。1b層よりも黄色みが強い。
6．4層(百花台Ⅲ層)黒色　10YR2/1　しまりが良い。中～下部にかけて4～7㎜程度の白・黄・ピンクのパミスを含む。
7．5層(百花台Ⅳ層)黒褐色　10YR2/2　4層よりしまりが良い。全体的に直径2㎜～1㎝の白・黄・ピンクのパミスを含む。パミスの量は他層より多い。
8．6層(百花台Ⅴ層)黒褐色　10YR2/2　5層と同程度しまりが良い。5層より黄みが多く，直径2～4㎜程の白・黄・ピンクのパミスを含む。
9．7層(百花台Ⅵ層)黒褐色　10YR2/2　しまりが良く全層位中最も粘性が強い。1～3㎜程の白色のパミスを2％程度含む。
10．3層と4層の混合土
11．炭化物
12．3層と4層の混合土　黒褐色　10YR2/2　ややしまりが良く，弱粘質。5㎜程の白・黄色のパミスを1％程度含み，右端には3層の土が多く混入する。

第6図　トレンチD①土層断面図



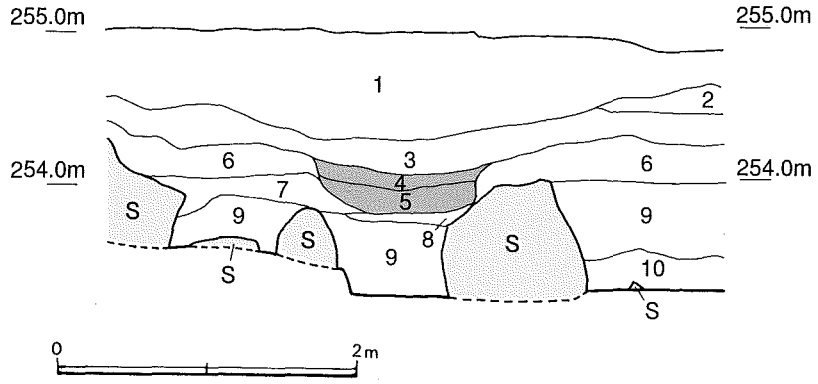
第6図　トレンチD②土層断面図





トレンチE南面

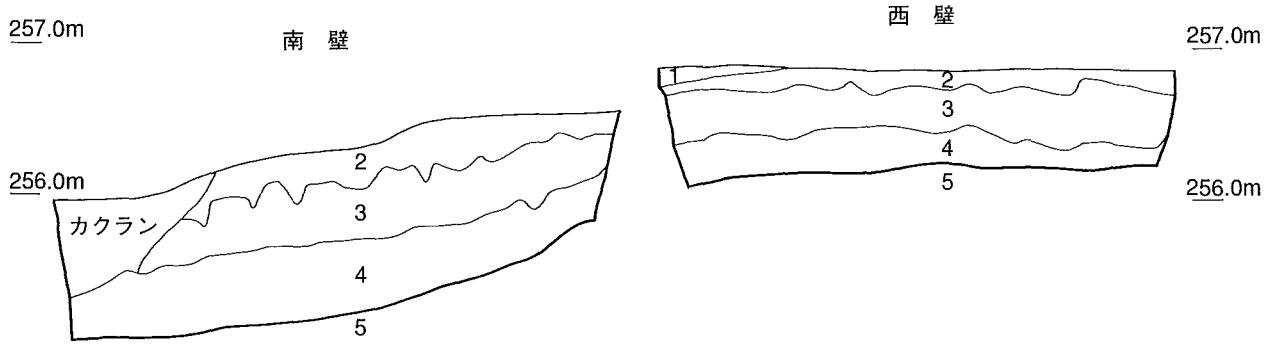
1．表土　黒褐色　10YR2/3　ややしまりが悪い。
2．黒褐色　10YR2/2　しまりが悪い。層の下部はややしまりが良い。
3．1a層　暗褐色　10YR3/3　ややしまりが良い。全体的に1～3㎜程度の炭化物を含む。
4．1b層　暗褐色　10YR3/4　ややしまりが悪い。全体的に直径1㎜程度の炭化物を含むが，1a層に比べて量は少なく黄みをおびる。
5．黒褐色　10YR2/2　しまりが良い。直径2～4㎜の炭化物が層の下部にみられ，全体的に直径3～6㎜程度の白・ピンクのパミスを含む。
6．黒色　10YR1.7/1　ややしまりが良い。全体的に直径4㎜程度の黄・ピンクのパミスを含む。
7．2層　黒褐色　10YR2/2　ややしまりが悪い。2よりもやや黒みを強くおびる。
8．3層(百花台Ⅱ層)暗褐色　10YR3/4　ややしまりが悪い。1b層よりも黄みが強い。
9．4層(百花台Ⅲ層)黒色　10YR2/1　しまりが良い。層の中～下部にかけて4～7㎜程度の黄・白・ピンクのパミスを含む。
10．5層(百花台Ⅳ層)黒褐色　10YR2/2　4層よりもしまりが良い。全体的に直径2㎜～1㎝の黄・ピンク・白のパミスを含む。パミスの量は他層よりも多い。
11．7a層(百花台Ⅵa層)黒褐色　10YR2/2　5層と同程度しまりが良い。5層に比べて黄みが強く，直径2～4㎜程度の白・ピンク・黄のパミスを含む。
12．7b層(百花台Ⅵb層)黒褐色　10YR2/2　しまりが良く全層位中で最も粘性が強い。1～.3㎜程の白色のパミスを2％程度含む。ATとみられる黄褐色火山灰を多く含む。
13．8層(百花台Ⅶ層)黒褐色　7.5YR2/2　ややしまりが悪い。パミスをほとんど含まない。
14．9層(百花台Ⅷ層)黄褐色　10YR5/6　2㎜～2㎝程度の赤・白・黄・灰色のパミスに加えて，拳大～人頭大の石を多く含む。百花台Ⅶ層に比べてややしまり良く，粘性も強い。



調査区北壁(SR1部分)

1．表土　黒褐色　10YR2/2　ややしまりが悪い。
2．1a層　黒褐色　10YR2/2　ややしまりが良い。全体的に1～3㎜程度の炭化物を含む。
3．1b層　暗褐色　10YR3/3　ややしまりが悪い。全体的に直径1㎜程度の炭化物を含むが1a層に比べて量は少なく土色も黄みをおびる。
4．灰黄褐色10YR4/2　ややしまりが良い。砂が混ざる。
5．灰黄褐色10YR4/2　ややしまりが良い。砂が4よりも多く混ざる。
6．2層　黒色　10YR2/1　しまりが悪い。
7．3層(百花台Ⅱ層)暗褐色　10YR3/4　ややしまりが悪い。1b層よりも黄みが強い。
8．5・7・9の混合土　暗褐色　10YR3/4　しまりが悪い。左端から中央にかけて3層の土が混入する。
9．4層(百花台Ⅲ層)黒色　10YR2/1　しまりが良い。
10．5層(百花台Ⅳ層)黒褐色　10YR2/2　4層よりもしまりが良い。全体的に直径2㎜～1㎝の白・黄・ピンクのパミスを含む。パミスの量は他層よりも多い。

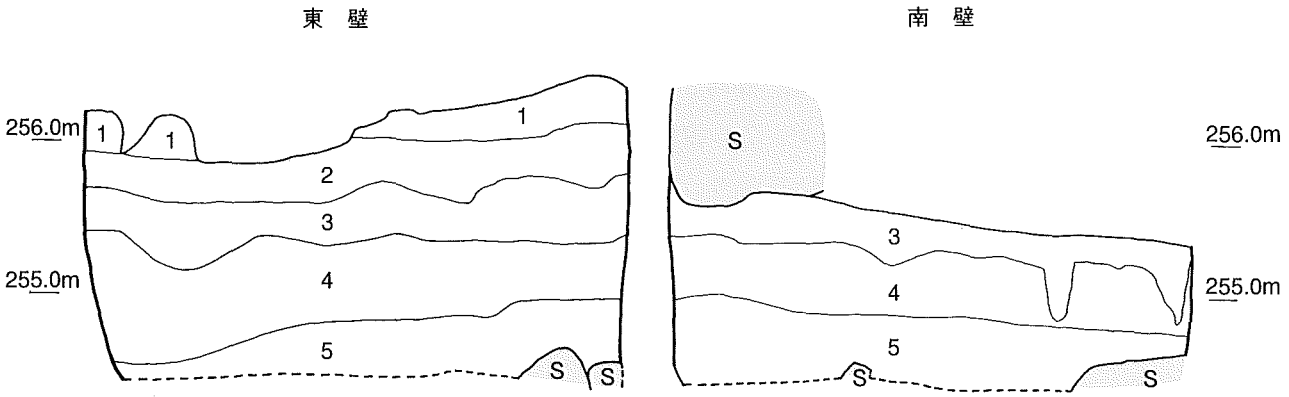
第7図　トレンチE・調査区北壁SR1部分土層断面図



トレンチＦ

トレンチＦ

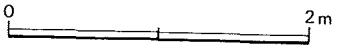
1．表土　暗褐色　10YR3/3　ややしまりが悪い。全体的に直径１㎜程度の炭化物を少量含む。
2．６層(百花台Ⅴ層)黒褐色　10YR2/2　５層と同程度しまりが良い。５層より黄みが多く，直径２～４㎜程の白・黄・ピンクのパミスを含む。
3．７層(百花台Ⅵ層)黒褐色　10YR2/2　しまりが良く全層位中最も粘性が強い。１～３㎜程の白色のパミスを２％程度含む。
4．８層(百花台Ⅶ層)黒褐色　7.5YR2/2　ややしまりが悪い。パミスをほとんど含まない。
5．９層(百花台Ⅷ層)黄褐色　10YR5/6　２㎜～２㎝程度の白・黄・赤・灰色のパミスに加えて，拳大～人頭大の石を多く含む。百花台Ⅶ層に比べてややしまりが良く，粘性も強い。



トレンチＧ

トレンチＧ

1．５層(百花台Ⅳ層)黒褐色　10YR2/2　４層よりもしまりが良い。全体的に直径２㎜～１㎝の黄・ピンク・白のパミスを含む。パミスの量は他層よりも多い。
2．６ａ層(百花台Ⅴ層)黒褐色　10YR2/2　５層と同程度しまりが良い。５層より黄みが多く，直径２～４㎜程の白・黄・ピンクのパミスを含む。
3．６ｂ層(百花台Ⅴ層)黒褐色　10YR2/2　６ａ層よりもしまりが良い。５層より黄みが多く，直径２～４㎜程の白・黄・ピンクのパミスを含む。
4．７ａ層(百花台Ⅵａ層)黒褐色　10YR2/2　しまりが良く全層位中最も粘性が強い。１～３㎜程の白色のパミスを２％程度含む。
5．７ｂ層(百花台Ⅵｂ層)黒褐色　10YR2/2　しまりが良く全層位中で最も粘性が強い。１～３㎜程の白色のパミスを２％程度含む。ATとみられる黄褐色火山灰を多く含む。



第８図　トレンチＦ・Ｇ土層断面図

6層　暗茶褐色土層　締まっている。パミスをわずかに含む。7層と見分けが難しいが，7層よりやや明るい。百花台Ⅴ層に相当。

7層　暗褐色土層　締まっている。白・橙・黄色などの1～5㎜大のパミスを含む。クラックが著しい。この層の下層にATと思われる黄褐色土層が見られる。百花台Ⅵ層に相当。

8層　黒色火山灰土層　締まりがあまり無く，ぼそぼそいている。第2黒色土帯で，百花台Ⅶ層に相当。

9層　明黄褐色土層　径2～3mの礫を含む。百花台Ⅷ層に相当。

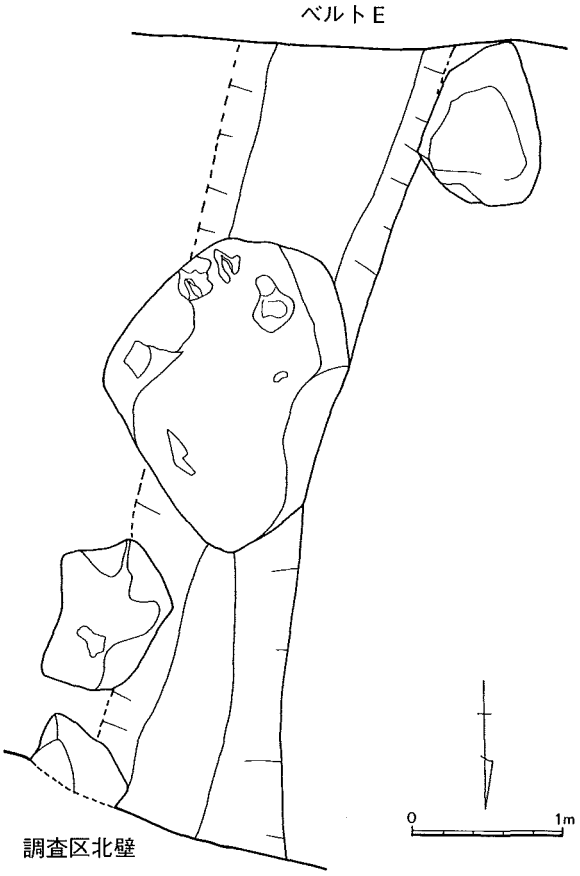
第3節　調査区の概要

遺物は，縄文時代早期～晩期の遺物が約4,500点出土した。出土した遺物は2層以下の縄文晩期土器・石器を主体とするが，接合する遺物は少なく，またローリングを受けており他所より流れ込んできた2次堆積物であろう。また，マイクロコアが4層（百花台Ⅲ層）より1点出土している。

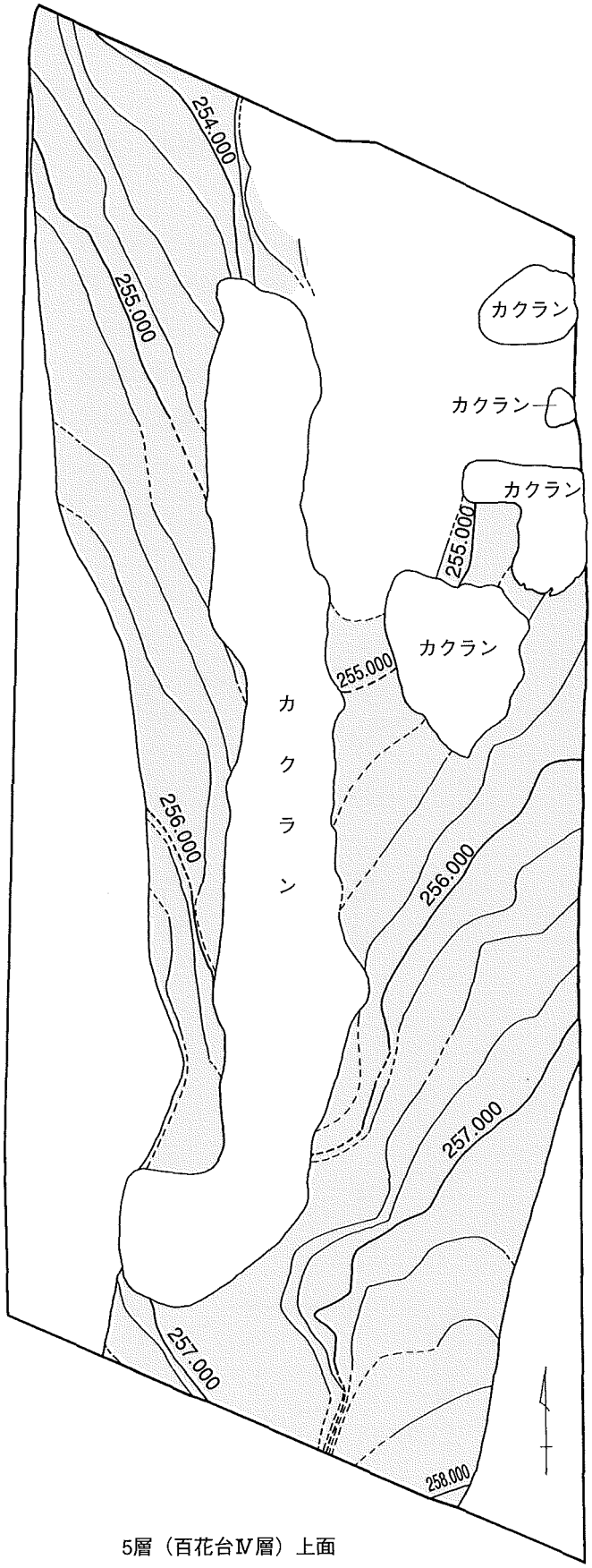
遺構は検出されなかったが，調査区中央部に南北方向にのびる谷筋を検出した。3層上面及び5層上面の等高線の状況（第10図）から，5層（百花台Ⅳ層）段階までは谷地形であったが，1～4層によりこの谷が埋没したことが判明した。したがって，今回出土した遺物は高所からこの谷筋に流れ込んできたものであると考えられる。調査区の東端及び西端は谷のせり上がり部分にあたるが，耕地整理により削平され，表土直下に9層（百花台Ⅷ層）が現れた部分もあった。

今回の調査区中央には，長さ約45m，幅約5m，深さ約1.8mの大きな攪乱が見られた。この攪乱の底には重機による爪痕が明確に残っており，土取によるものと考えられる。攪乱を免れた調査区北端では幅約1.2m，残存長約5m，深さ約25㎝の溝（SR1）を検出した（第9図）。溝は南から北へ傾斜しており，覆土には砂の堆積が見られた。溝の土層断面（第7図）を見ると4層（百花台Ⅲ層）により谷が埋没した後にできた溝で，3層（百花台Ⅱ層）に切り込む溝と2層に切り込む溝が見られ，異なる時期に溝が存在していたことが判る。溝の流路途中に径1.5mほどの巨大な石があり，雨水等が流れる自然流路であったと考えられる。

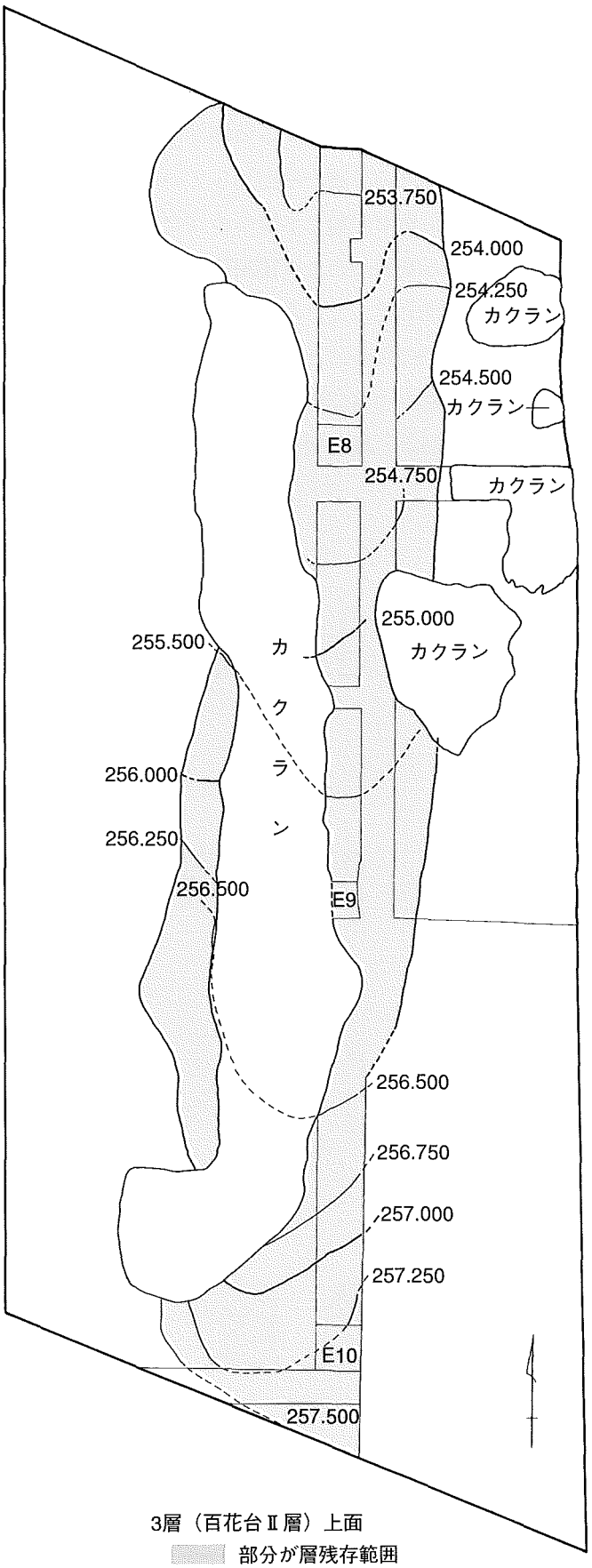
5層以下については，3箇所のトレンチ（E・F・Gトレンチ）を設定し遺物包含層の確認を行ったが，いずれのトレンチからも旧石器時代の遺物は出土しなかった。今回の調査区周辺の範囲確認調査でも旧石器時代の遺物は確認されておらず，当該期の遺物分布範囲は魚洗川B遺跡の中でも小地域に限定されるものと思われる。



第9図　SR1平面図



5層（百花台Ⅳ層）上面



3層（百花台Ⅱ層）上面

部分が層残存範囲

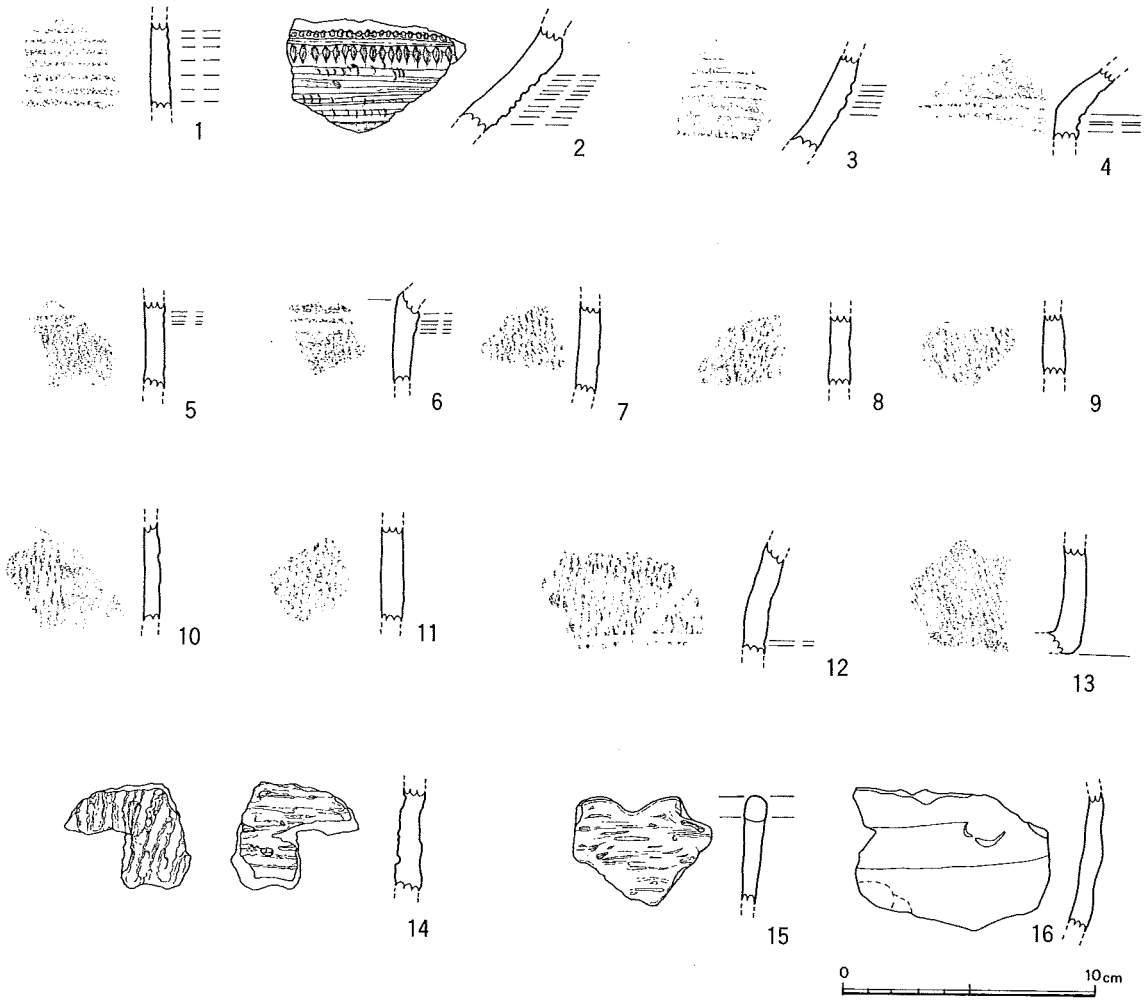
第10図　3層および5層上面コンターライン

第4章　遺　　物

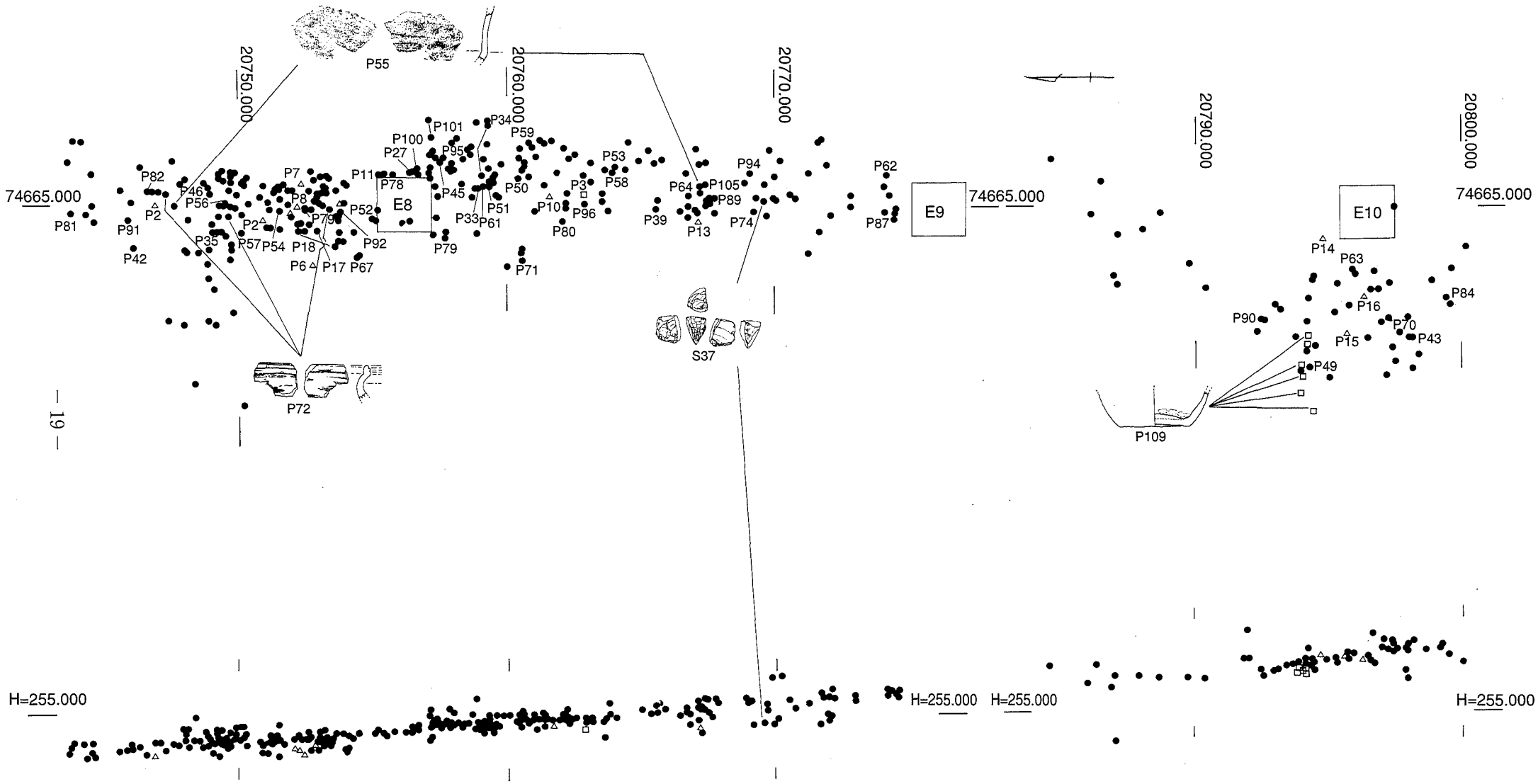
第1節　遺物の分布

今回の調査では，できる限り出土位置を記録して遺物を取り上げるように努めた（第12図）。遺物は4層以上の各層から出土している。

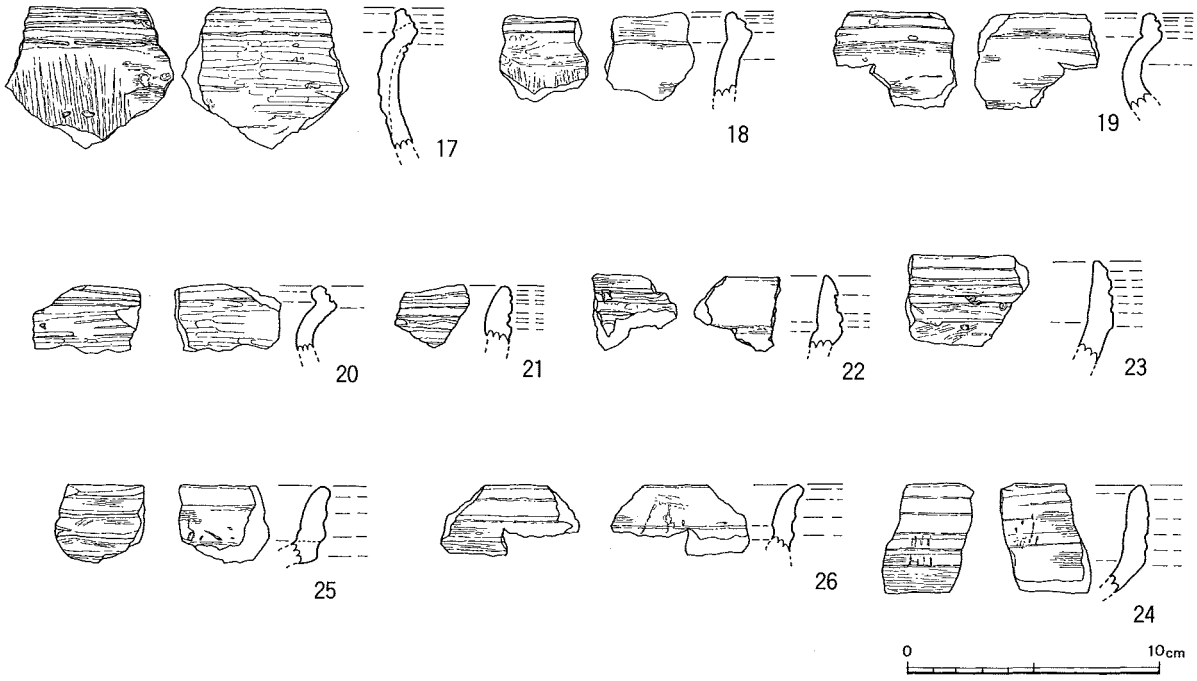
出土位置を記録して取り上げた土器の接合例は，3点間が1例，2点間が4例と多くない。接合関係にある資料の出土位置関係をみると，谷底において南北方向で接合する例と，谷深部に向かって両側から流れ込んだとみられる東西方向で接合する例がある。各層から出土した土器の接合状況は同一層位中での接合にとどまらず，1層から3層の間で接合関係がみられた。出土した土器の大半は縄文後～晩期の土器であるが，3層と4層からは早期，前期・中期の土器が出土している。石器については，4層から細石核が出土している。



第11図　出土土器①



第12図　出土遺物ドットマップ



第13図　出土土器②

第2節　土　　器

前述のとおり，今回の調査で出土した約3,500点の土器の大半は縄文後期～晩期に属する土器の胴部片である。この時期の遺物に関しては92点を図化した。また，縄文早期，前期，中期の土器と，縄文時代以降の土器も出土している。これらの土器に関しては，出土した21点全てを図化している。

(1)　**縄文早期，前期，中期の土器**（第11図，第16図68）

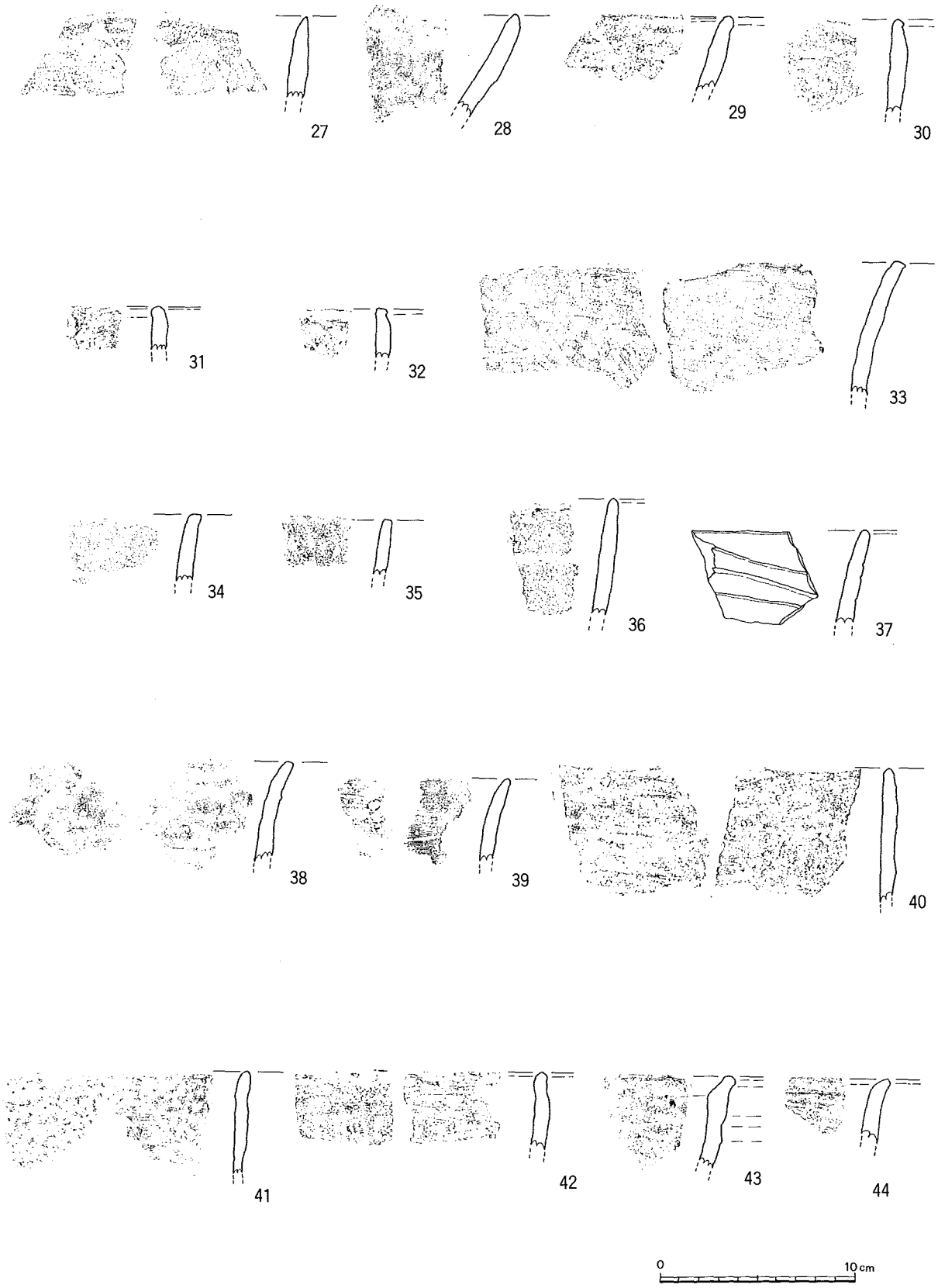
1～13の胎土はいずれもにぶい黄橙色を示し，器表は激しくローリングを受けている。**1**は外面に平行する条痕をもつ。**2～13**は塞ノ神・平栫式土器様式の土器である。**2**は石坂上式土器の口縁部である。大きく外反した後に内湾するキャリパー状の口縁とみられ，屈曲する部分には刻目文を入れる。凹線文帯の凸線上，凹線内には爪形圧痕がまばらについている。**3**・**4**も凹線文のある口縁部である。**5～13**は撚糸文が施された胴部片である。**14**の外面は縦方向の押引きによる太い条痕文，内面は横方向の条痕によって調整されている。**15**・**16**は滑石を混入した硬質の土器である。大きなものでは1㎜ほどある粒状の滑石を混ぜている。**15**は波状の口縁部で，口縁端部は面状に整えられ，器壁は口縁端部側で厚くなる。**16**は無文の胴部片で，粘土紐積み上げの凹凸が外壁に認められる。比較的薄手である。**68**は4層出土の深鉢底部である。谷中央に向かって流れ込むような状況で出土した5点のうち，3点が接合した（図12，図版9）。底部はやや上げ底となり，さらに底内面に粘土をたしていることから底部はより盛りあがった弧状を呈する。胎土は**1～13**と同様のにぶい黄橙色である。塞ノ神・平栫式土器の底部と推測される。

(2)　**縄文後～晩期の土器**（第12～16図）

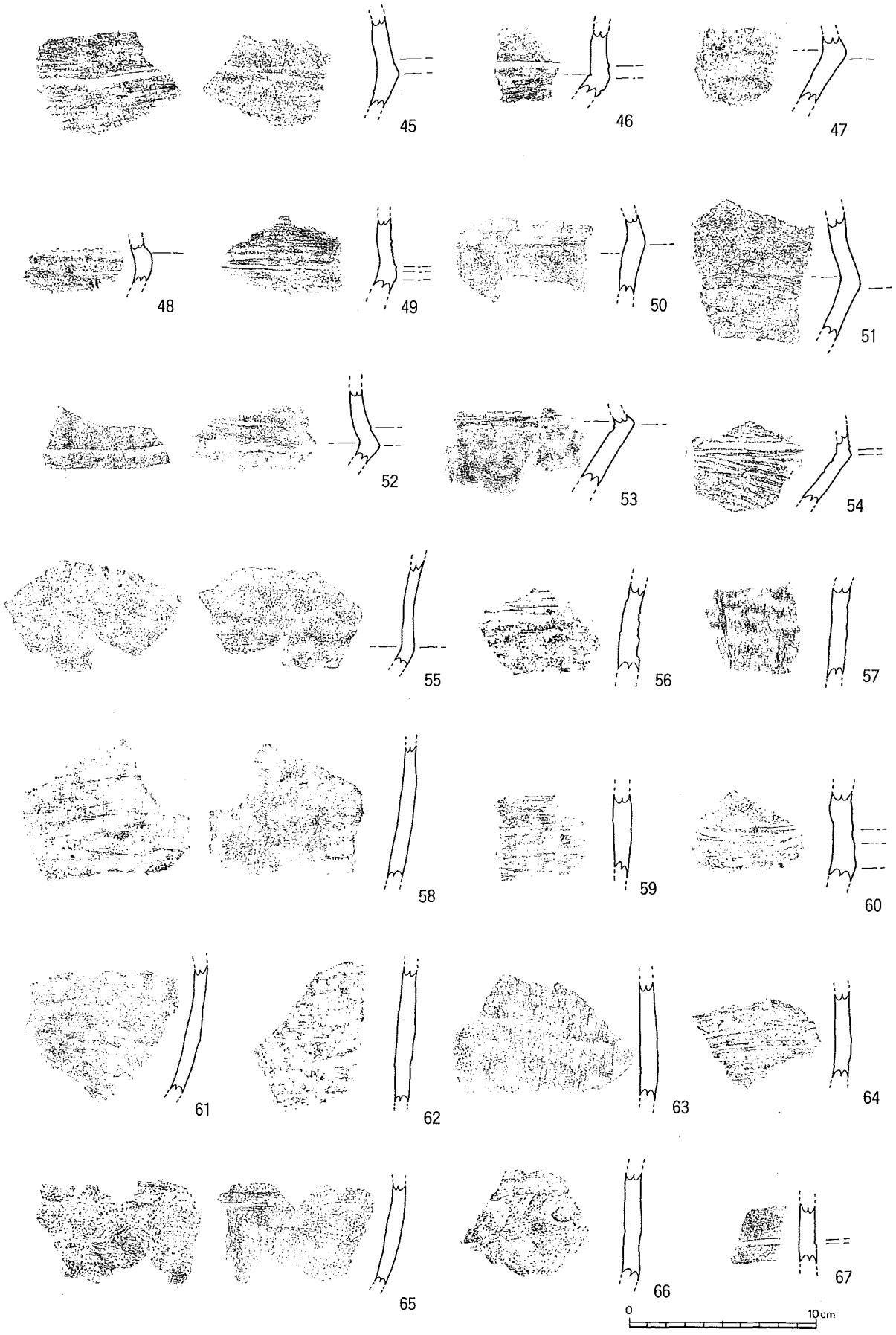
縄文後～晩期に属する土器の大半は小片である。深鉢と浅鉢に大別し，部位別にとりあげる。

深鉢口縁部（第13図）

17～20は強く内湾した頸部から内傾する短い口縁部がたち上がる。口縁には2条の凹線がめぐる。

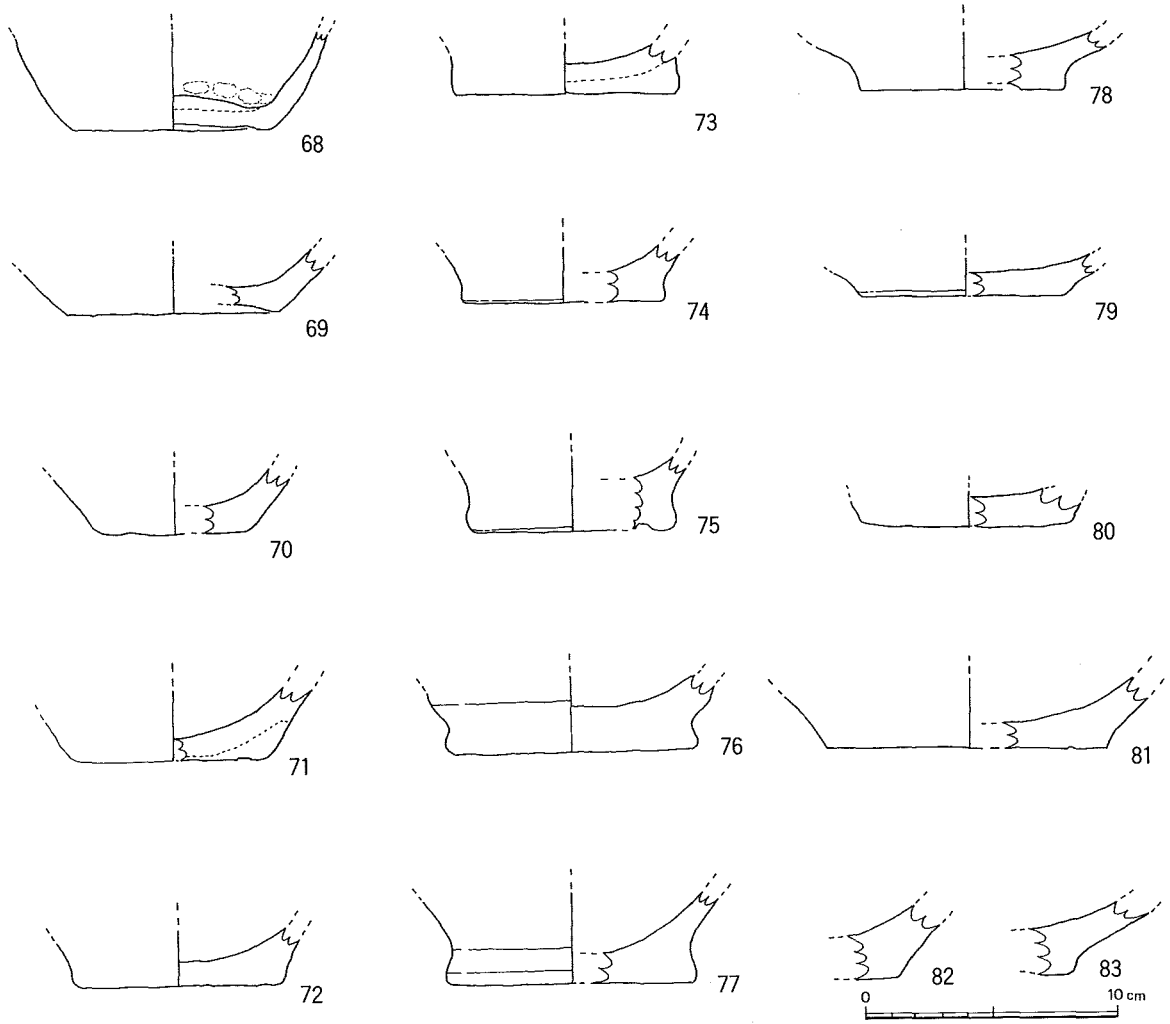


第14図　出土土器③

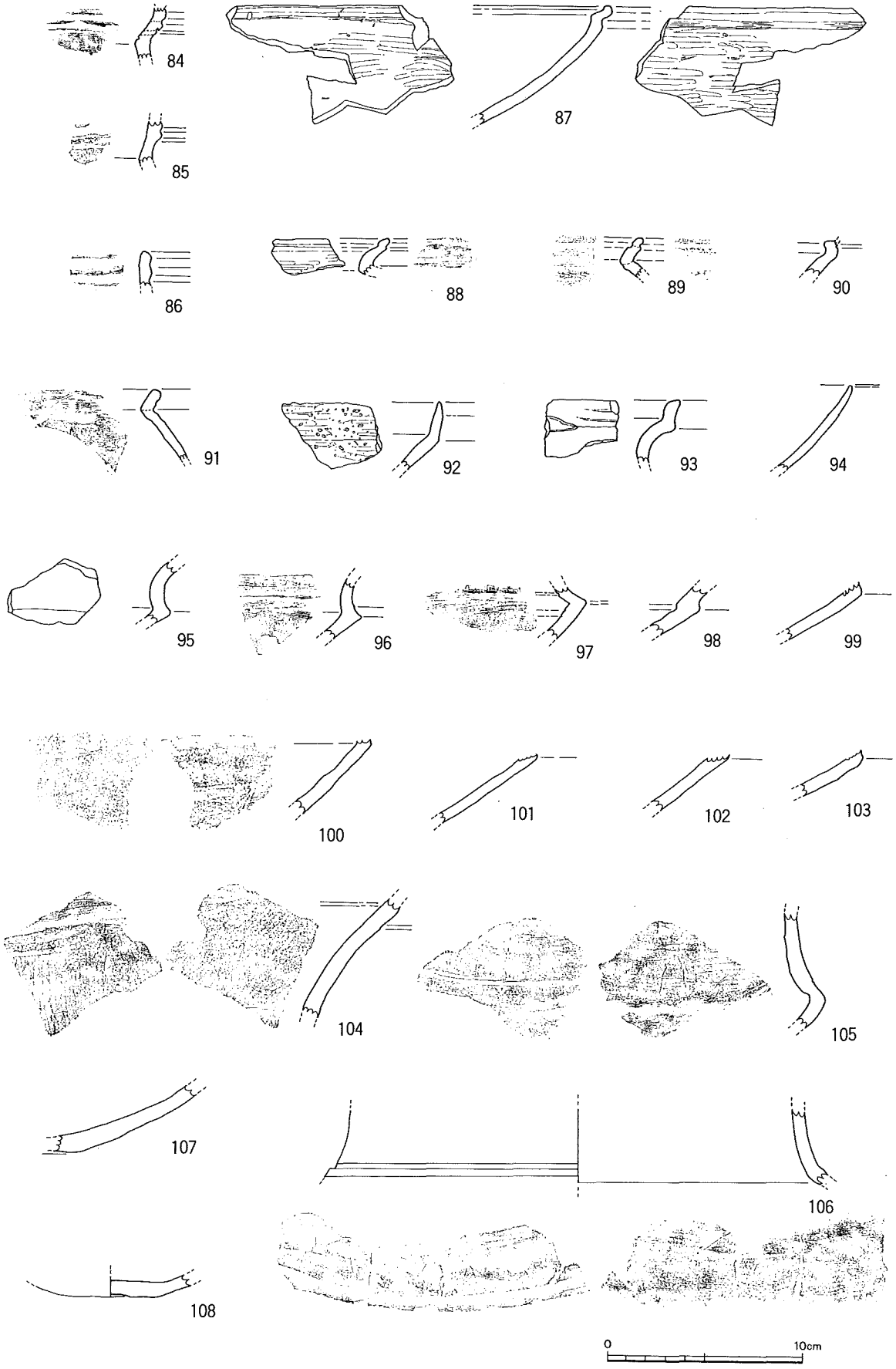

45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
0
10cm

第15図　出土土器④

17・18の外面は，頸部を縦方向にヘラケズリし，口縁部と口縁部直下の頸部は横方向になでている。19・20は内外面ともに十分なヘラミガキがほどこされている。20は口縁端部がゆるやかに上がり，2条の凹線の間隔が広がってゆくことから山形口縁の一部と推測される。21～26は，幅広の口縁を持つ。21～24は口縁部に凹線をめぐらし，口縁部以下の胴部はゆるやかに内傾する。21は5条の沈線が刻まれた山形突起の一部である。25・26の口縁部には，指もしくは幅広の工具でなでたことによってできた，緩やかな3段の凹みと凸線がめぐる。27・28は山形の口縁部である。器壁内面と外面が口縁端部であわさり，口縁端部で稜をつくる。器表には丁寧なナデが施される。28の外面には煤が付着している。29は28と同様に厚い器壁を持つが，外面は粗くなでたのみである。33～37は口縁端部上面が，直角に近い。37は外面に斜め上がりの凹線文を刻む。43・44は口縁端部の下で内面が外反する。33・34は内外面共に良くナデがほどこされ，均一な厚さの器壁をもつ口縁部である。口縁部でやや外反する。口縁端部も良く調整されており，器壁とほぼ直角の面になっている。37は左上がりの凹線を3条刻む。38～41は胎土に雲母を含む。43・44は内面に稜をつくるため，外面には表れないが口縁部付近で外反する。



第16図　出土土器⑤


84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
0
10cm

第17図　出土土器⑥

深鉢胴部（第15図）

45～55は深鉢の屈曲部である。**56～66**の胴部片については，出土位置をおさえている大きな破片をとりあげている。

深鉢底部（第16図）

深鉢の底部には，底面から直に胴部が立ち上がる外面に屈曲のない底部と，底と胴部の間に屈曲のある底部が出土している。**70・71**は浅い円形に形成した底と胴部がちょうど粘土の継ぎ目で破損しており，底部の形成が観察できる資料である。底部内面には粘土をたし，なでをほどこしている。**71**は底面より上の胴部外面に化粧土をほどこしている。

浅鉢（第17図）

84～86は口縁部外面に沈線がめぐる浅鉢口縁部である。いずれも明赤褐色を呈する。部分的に上方の凸部分から下の沈線部分に粘土がのりかかった痕跡が残っているものの，凸部分・沈線部分ともによくみがかれている。**84・85**は沈線帯のやや下の位置で外反する。**87**は口縁部が立ち上がる屈曲部分に胴部の最大径があるボール状の浅鉢である。**88・89**は一部遺存する屈曲の角度からみて，頸部は強い屈曲で外反するようである。**89**は明赤褐色，内外面ともにヘラミガキが施されている。**91**は外反する短い口縁をもつ土器である。内外面ともにヘラミガキが施されているが，短い口縁部の外面には化粧土のムラがみられる。**92・93**は“く”の字状に折れまがる口縁をもつ。**92**は胎土に雲母を含む。**93**は口縁部・頸部共に弧状に外反する。**94**は屈曲のない浅鉢口縁である。器壁は非常に薄く，口縁端部に向かって次第に厚みを減じる。内外面ともに十分に研磨されており，褐色を呈する。

95～103・105は浅鉢の屈曲部である。**95～97**は屈曲より上面が外反し，屈曲より下部が平面もしくはやや内弯しており，胴部から頸部の立ち上がる屈曲部分と思われる。**99～103**は屈曲部分の粘土継ぎ目で破損した例である。**104**は外面に緩やかにくぼむ沈線がめぐる。沈線より下の部分には縦方向のミガキがほどこされ，沈線に近い部分ではその上に横方向のミガキが入る。沈線内部と沈線の上方は横方向にみがかれている。**105**は屈曲部の上方に，ヘラ原体をやや深めに入れたことによってつけられた浅い沈線がある。105を参考にして上下関係を復元した。内外面共に横方向にみがかれている。**106**は105と胎土・焼成共に類似していることから，同一個体ではないかと推測される。105に比べて幅の広い沈線がめぐり，沈線内部も部分的にみがかれている。

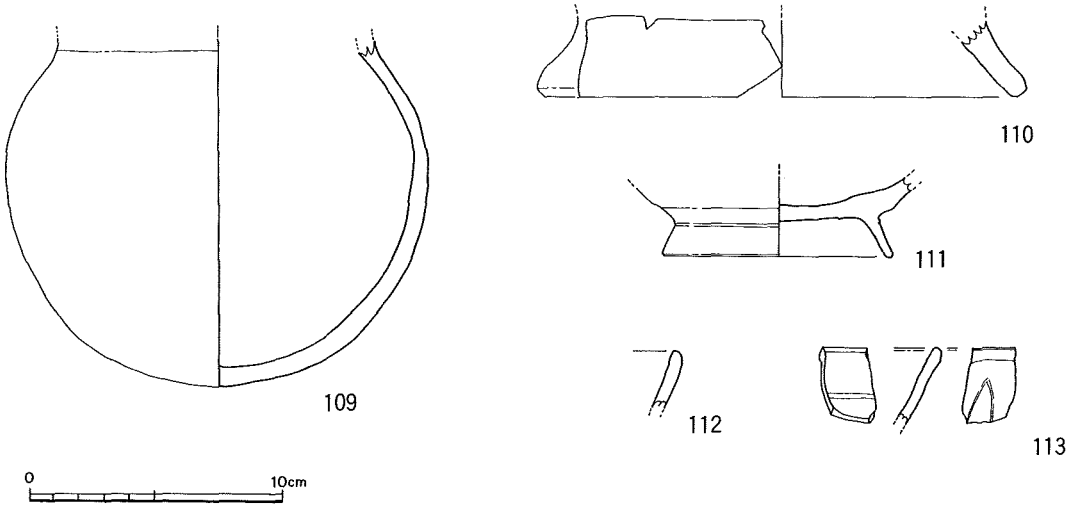
107・108共にやや上げ底となる底部である。**107**は内面，外面，底部ともに研磨されている。**108**はナデによってしあげられている。

(3) 縄文時代以降の遺物（第18図）

109は丸底の壺である。胎土には１㎜ほどの大きさの石英を多量に混入している。底部には黒斑がある。**110・111**は土師器碗の底部である。**110**は高台の一部が上がり，切れ込みがあったとみられる。**112・113**は青磁碗の口縁部である。**113**は蓮弁をもつ。

(4) 補足

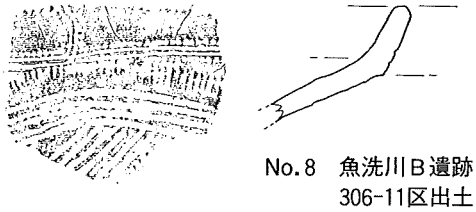
過去の調査で出土した魚洗川Ｂ遺跡出土の３点の土器についても併せてAMS分析を実施している。このうち２点が出土した地点の詳細な情報は未刊である。No. 8（IAAA-71439）は，幾何学的な凹線文が刻まれていることから石坂上式土器の一群である。No. 9（IAAA-71437）は深鉢口縁部である。



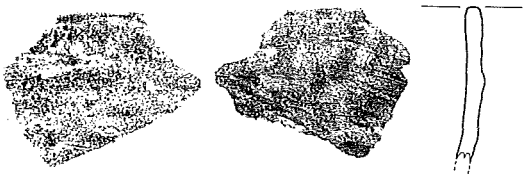
第18図　出土土器⑦

No.5　魚洗川Ｂ遺跡　Ｅ８出土
(IAAA-71440)

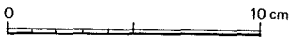
出典：長崎県文化財調査報告書第188集
『地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅲ』Ｐ45

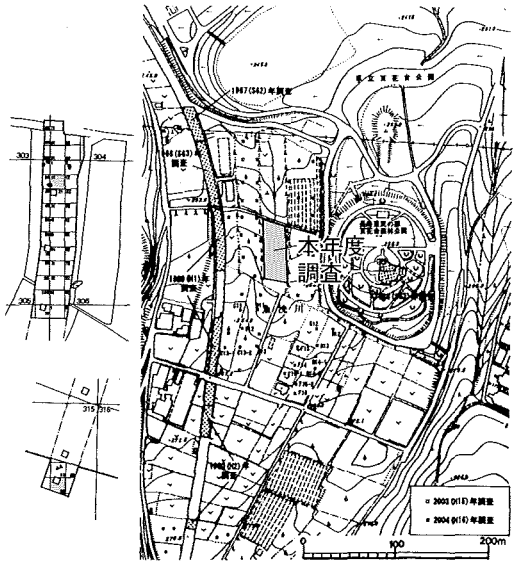


No.8　魚洗川Ｂ遺跡
306-11区出土
(IAAA-71439)



No.9　魚洗川Ｂ遺跡　315-58区出土
(IAAA-71437)





参考：長崎県文化財調査報告書第116集『県道国見雲仙線改良
工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』

第19図　年代測定資料

第3節　石　　器（第20図～第24図）

石器は表土から3層まで出土しているが，層位としてまとまった資料はなく，分析までには至っていない。出土土器は，早期と後期を主体とすることから，大方この2時期に包括される資料として捉えられる。全体の器種構成は単純で，石鏃・磨石・石斧が主体となる。石鏃では形態的にいくつかのまとまりがあり，機能や時間差などの情報があるものと考えられる。石斧は扁平打製石斧が主体で，晩期的様相が濃い。剥片鏃の出土や剥片などから，縄文時代後期初頭から中葉の時期も念頭に入れて全体の石器を捉える必要がある。

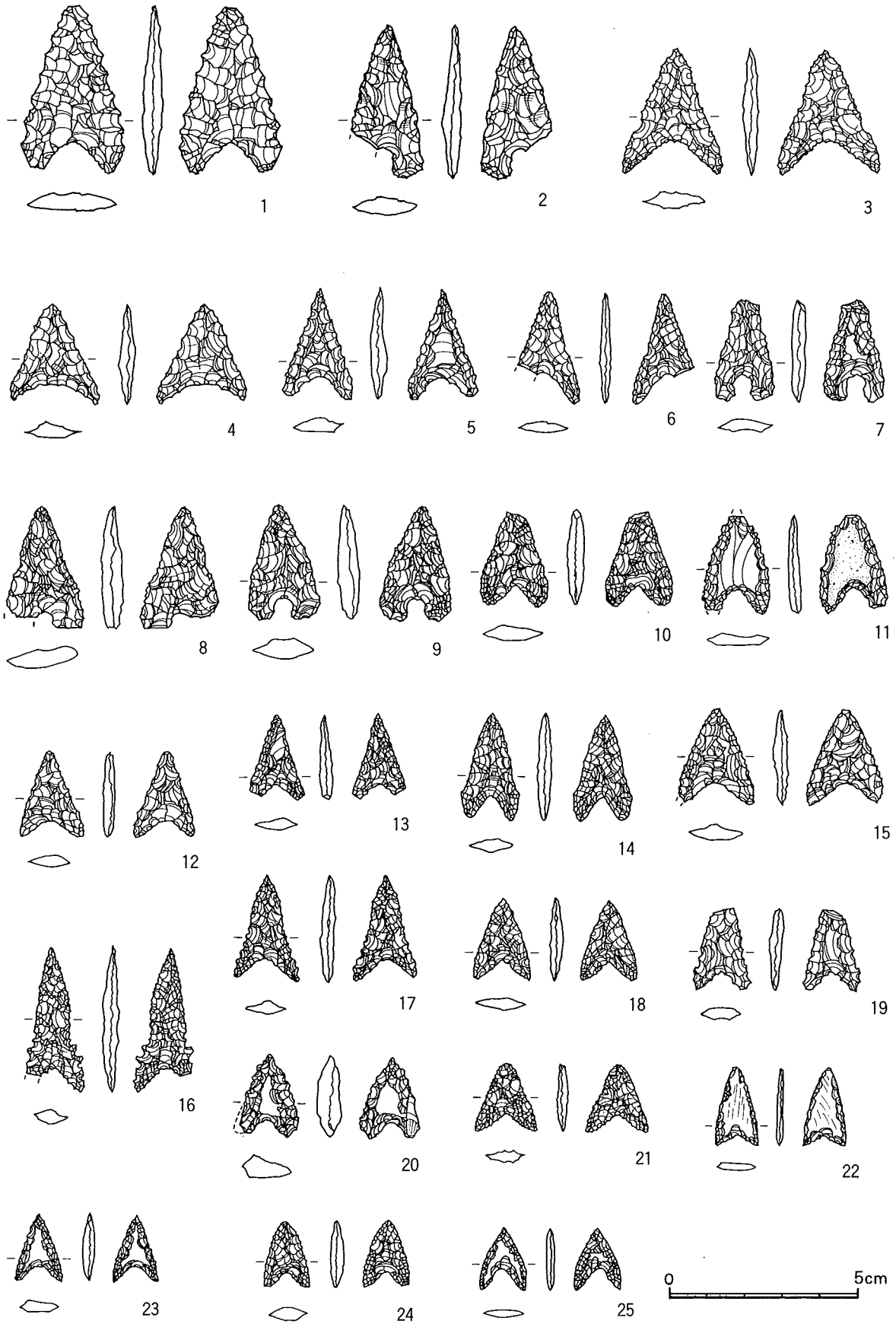
石鏃（第20・21図）

石鏃は38点出土している。やや大型のものから中型のものが主体となるが，小型の緻密な加工を施す先鋭なものまで多種に及ぶ。1は，やや青みがかった黒曜石を素材とするもので，長さ4.4cmとかなり大型のものである。周辺からの大きな剥離によって，側縁がやや鋸歯状になる。長さに対して厚みはなく，均整もとれている。2なども大型の部類に入るが，1は幅を大きくとり重厚さがある。県内でもこれほどの大型の石鏃は少なく，まとまった資料はない。槍先としても遜色ない。2は，長身で幅細の所謂，鍬形鏃のたぐいである。鍬形鏃はこの他，7・8などがそれにあたり，長さに比べ脚が短く脚が並行するよう作り出される。早期の押型文土器などに伴うことが知られるが，本遺跡でも早期の遺物が出土していることから，3・4は，身に対して大きく脚が開くタイプでどちらも玄武岩を素材とするなど共通点を持つ。5・6などもやや脚が左右に開くが，大きさや脚加工などに大きな違いが見られる。他に2・3のような特徴を持つ石鏃はないことから機能差などを考える必要があろう。10・11などは脚の作りや全体の形状はやや寸詰まりであるが，12以下の石鏃については，脚や先端部の作りが先鋭な一群である。特に16は先端部を長く作り出し，腰部以下脚部にかけて鋸歯縁加工を施すなど，大きな特徴を備えている。加工も緻密で，縄文後期の石鏃に技術的に近い。ただし，腰部で外側に開く石鏃の特徴は，早期にも散見されることから，時期の断定は困難である。23～25は，小型の一群であるが，均整がとれており先鋭さがある。22は中央部を研磨する局部磨製石鏃である。縄文時代早期に出土例が多い局部磨製石鏃であるが，本遺跡からはこの2点の出土だけである。23は赤色のチャートを素材とし，25は薄い灰色を呈した黒曜石を素材とし，小型で緻密な剥離により，同じような形態を作り出している。26～30は三角鏃で26のみ玄武岩，他は黒曜石である。31～33は剥片鏃で，脚部に加工を施すのみで，ほぼ素材部分を残すタイプである。26などは，腹面の剥離から考えた場合，鈴桶技法の関与が指摘できる資料である。34～36は石鏃の未製品と考えられる資料で，脚部や先鋭部が作り出されていない。

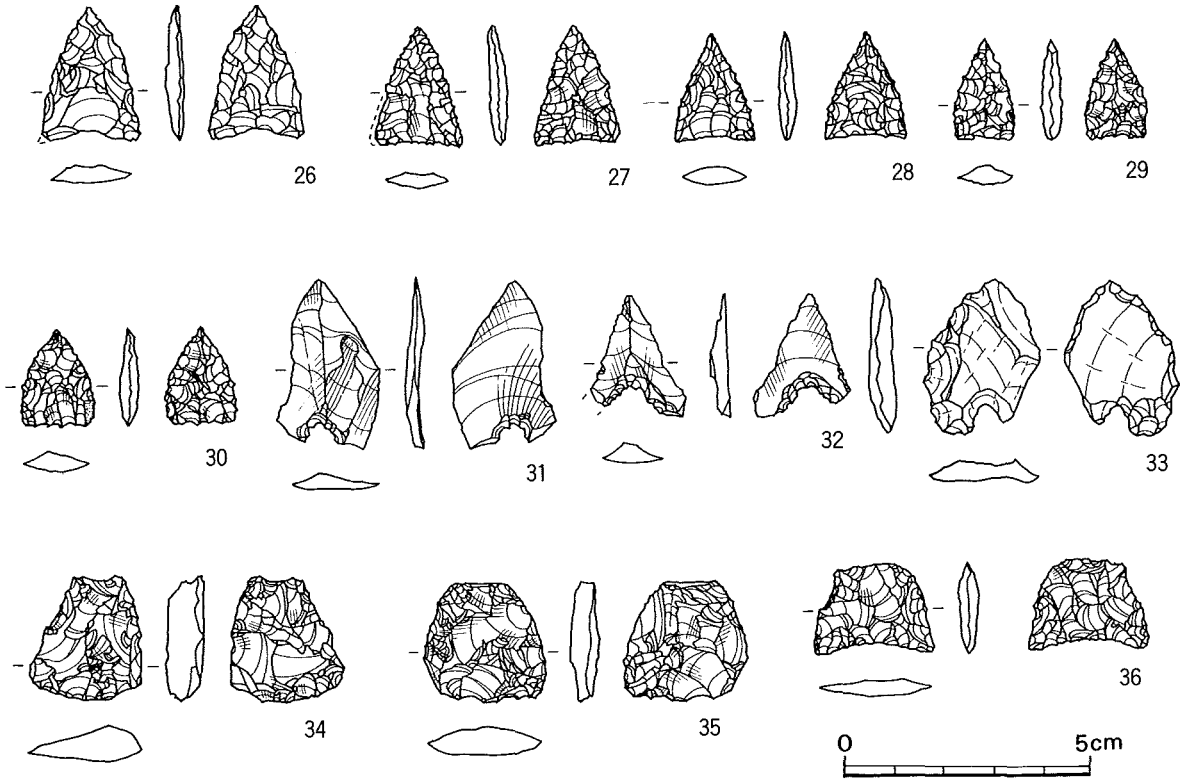
石核・剥片（第21図）

37は，青灰色黒曜石製の細石核である。右側辺に大きな下部からの剥離面を残し，その側辺上に調整を加える。打面は，一度大きな剥離面で構成され，右隅から調整を入れるのみで，細かな打面調整はない。正面は逆三角形を呈し，船底状を呈する。細石器の中でも後出のものと思われる。

38は漆黒色の黒曜石を使用したもので，正面観は細石核に近いが，打面や周囲に細調整がなく，パティナも新しい様相を呈することから，十郎川型の石核と考えられる。これは39についても同じで，打面側からのみ剥離を行うが，剥離面の観察からは，通常の石器製作には不つり合いな剥片しか剥離出来てないものと考えられる。一部自然面を残すことも38・39は共通する。これら，後期終末から晩



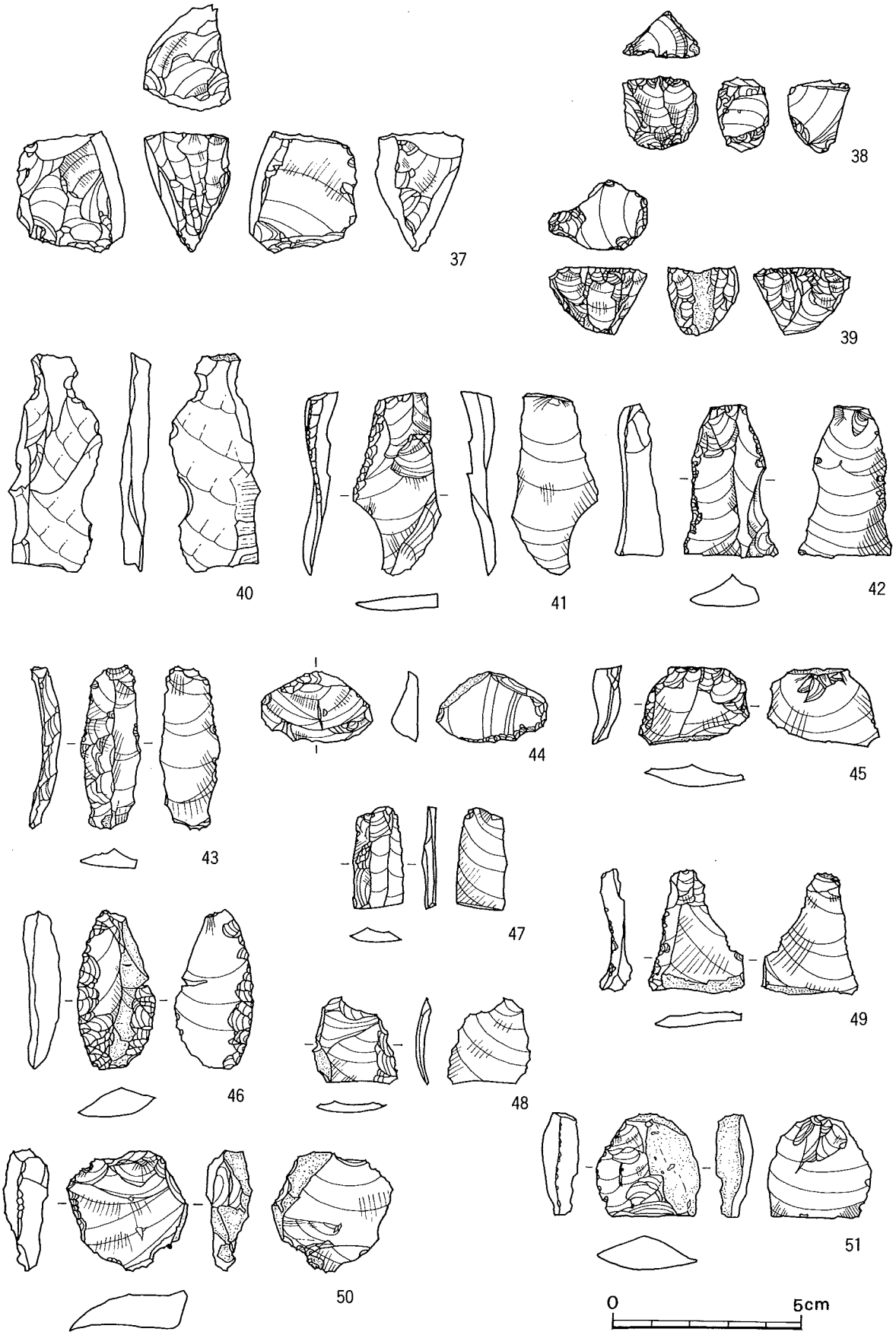
第20図　出土石器①



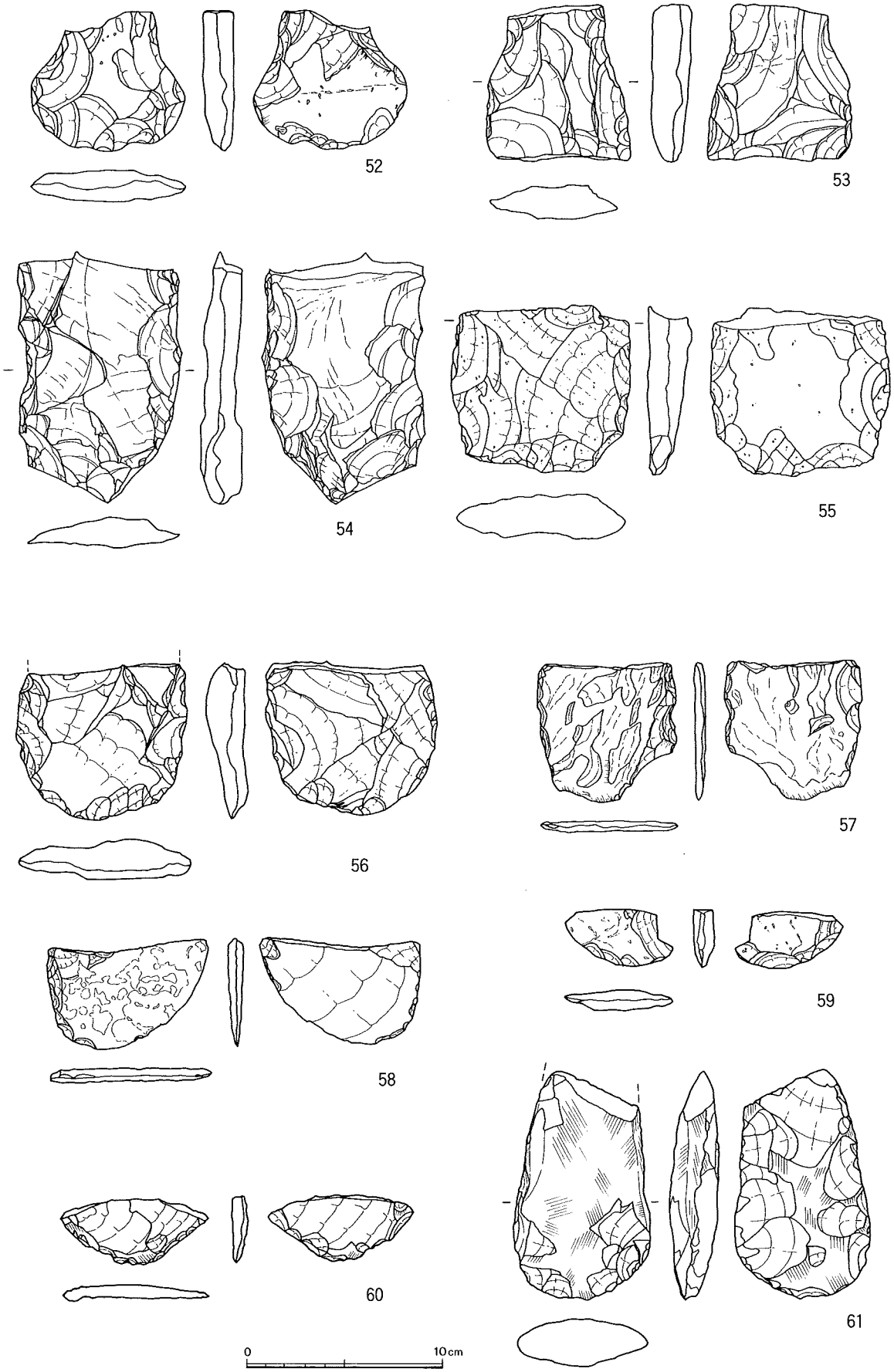
第21図　出土石器②

期に出土する十郎川型石核は，その時期や分布域についてはほぼ研究されているが，その石核が何を目的としていたかについては，明らかにされていない。十郎川型石核の特徴として，小型で，剥離そのものが無作為的であり，石核の剥離面観察から剥片も非常に小型の剥片でが剥離されたことが考えられる。晩期に特徴的なこの石核や，晩期の遺跡から出土する剥片の量的なものを考えると，剥片の量産を行うことを目的としたものと考える。剥片を量産する石器製作システムは，旧石器時代の細石核に見られるように,一素材剥片が単一の道具として機能するものではなく,組み合わせることによって一つの機能が生まれる。組み合わせて使用する石器としては，西北九州の縄文後期に出土する，鈴桶技法はコンポジットツールではないが，鏃などの大量生産に関わっていると見られる。十郎川型石核は，剥片の大量生産のための技術であり，剥片が晩期の他の石器の目的的剥片とはなり得ないことから，細石核と同じように，コンポジットツール作成の技術ではなかったかと考える。想像をたくましくすれば，晩期の時期の農耕に伴うコンポジットツールを想定出来ないかということである。残念ながら，本遺跡では，石核も剥片も少量しか出土していないことから，他の遺跡で検証すべきであろう。

40～51の剥片はその特徴から様々な時期の剥片が混在しているものと思われる。**41・42**は打面や身の薄さ，形態的なものから旧石器時代の剥片と考えられる。あくまでも縦長剥片剥離技術の中から剥離された剥片である。**43**は鈴桶型石核のクレステッドフレイクである。**47**なども後期の縦長剥片として捉えられる。石器として，剥片鏃が出土していることから，これらの剥片も後期に属するものと思われる。他の剥片は，厚みがあり腹面における剥離面の方向や剥離の数などが単調であることや，幅広であるなどの特徴を持ち，後期や旧石器の剥片と特徴を異にする。



第22図　出土石器③



第23図　出土石器④

石斧（第23図）

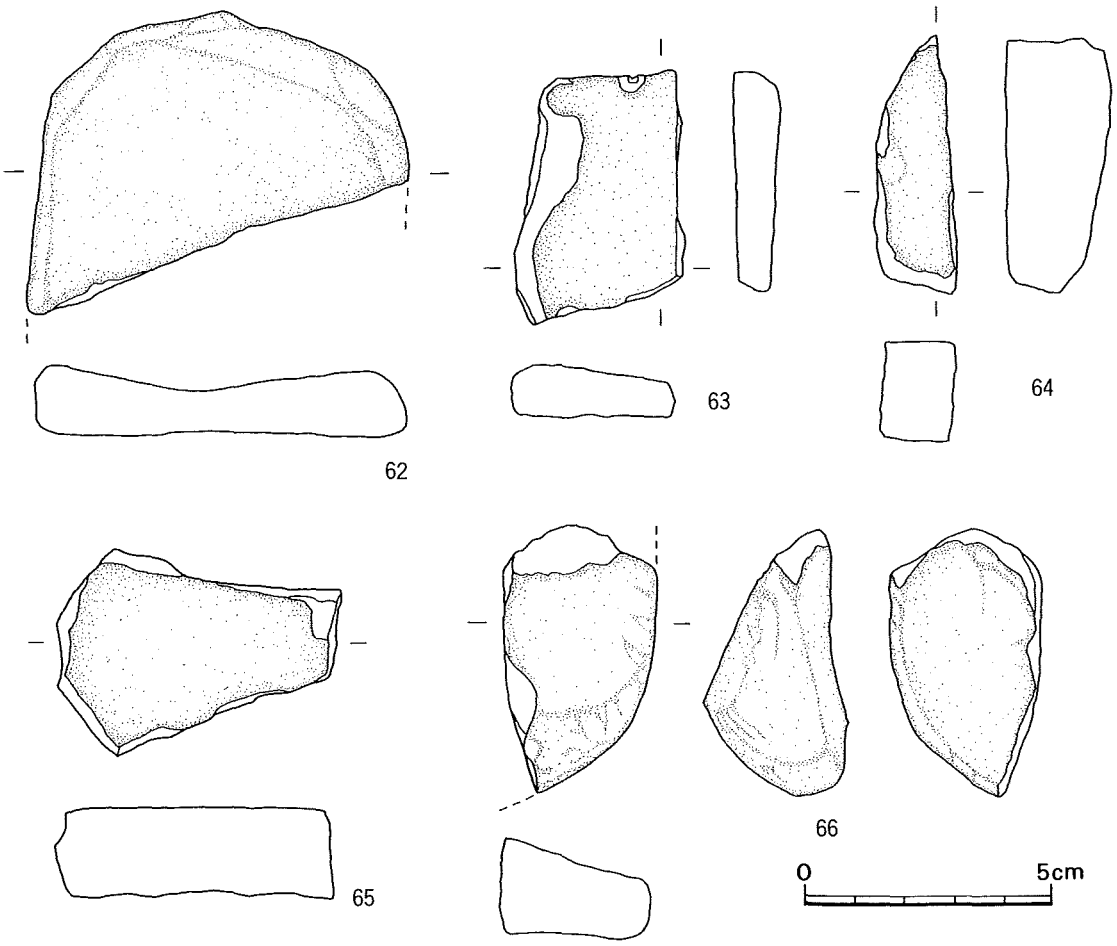
石斧は10点出土している。扁平打製石斧が主体で，周辺でも素材獲得可能な石材である玄武岩を使用している。製作上大きな特徴を持つ扁平打製石斧は，県内の縄文時代後期末から晩期にかけて通常見受けられるが，晩期のなかでの細かな時期設定は行われていないのが実情である。後期終末以降は，縄文時代の中でも次の時代への大きな変動期であり，石器のなかでも組成の単純化や，製作技術の後退などの現象が看取できる。本遺跡から出土している扁平打製石斧は，大型のものを主としているが，完形のものは無く，ほぼ刃部・胴部が出土している。**52**は分銅型の石斧で，抉入部に加工痕が集中する。刃部には使用痕と考えられる剥離が刃部と直行して観察され，かなりの使用頻度が考えられる。**53**も胴部がややすぼまることから，分銅型，あるいは撥状のものであろう。周辺からの大きな剥離のみで構成される。**55**は加工がほぼ図の左側の面に集中しており胴部に向けて厚みを増している大型の扁平打製石斧である。他のものも，刃部を丸く仕上げることのみの加工であり，比較的簡易な加工が主となっている。**61**は磨製石斧で，研磨した後に剥離調整をしている。他が，粒子の粗い素材を使用するのに対して，玄武岩でも緻密な素材を使用することに特徴をもつ。伐採具といえるものはこの一点のみで，他は扁平打製石斧であることから，この遺跡での扁平打製石斧の使用頻度が高かったことを表している。島原半島の標高200m前後の遺跡は晩期の遺跡が多いことで知られており，そこには晩期の遺跡が集中する。石器としても，扁平打製石斧が石器組成のなかに占める割合が高く，晩期農耕論との関連も示唆される石器である。魚洗川Ｂ遺跡も標高約250mを測り，他と同じように，石鏃と扁平打製石斧という単純な石器組成である。

砥石（第24図）

砥石は，砂岩製で占められる。砂岩は粒子がやや粗く，ピンクに近い色を呈する。この周辺では産出しない石材である。出土資料中**62**と**66**は，中央部がくぼみ，ローリングさせるような使用法が考えられる。面全体を使用し，側辺から中央部に力を加えてローリングさせながら，対象物の先端を尖らせるような動作が考えられる。特に**66**の凹みは大きく，かなり使用された形成がある。他の砥石は，研ぎ面が平坦であることから，他の使用法があったものと考えられる。他の遺跡の例からも，これら砥石は，早期の石器群に関連するものと考える。

石器のまとめ

魚洗川Ｂ遺跡の石器は，先述したように，扁平打製石斧・石鏃・砥石という極めて単純な組成となっている。砥石については，早期に属するものと考えれば，魚洗川Ｂ遺跡における縄文時代後期終末の石器組成は，石鏃と扁平打製石斧のみということになる。出土した石鏃については，早期から後期初頭・後期終末まで，やや時期幅があり，この中でも後期終末に属するものは少数と考えられる。石核や剥片の数も数量的に少ないことから，今回調査した範囲は，本体より少し離れた位置にあるものと予想される。これは，今回の調査で自然流路が確認されていることでもわかる。島原半島では，標高の高い地域と平地に後期終末から晩期の遺跡が存在する。平地には，大規模な遺跡が点在し，高地には一部を除き，小規模な遺跡が存在することが特徴で，本拠地とキャンプサイト的な遺跡の在り方を示している。高地部に存在する小規模な遺跡の石器組成は今回と同様な組成を示しており，極めて貧弱である。このことからも，高地部の遺跡が一時的な居住地であったことが推定できる。季節的な居住域であったと考える。とすれば，狩猟か農耕に関連するのであろう。石鏃と扁平打製石斧の出



第24図　出土石器⑤

土はそのことを表している。特にこの時期に出土し始める扁平打製石斧の状況からは，初期農耕との関連性をもって考えねばなるまい。ただ，扁平打製石斧のみが農耕具とは考えにくく，先述した，十郎川型石核から剥離された剥片などの存在を考えていく必要があるものと考える。石鏃などの素材とは成り得ない剥片を剥離する石核の存在は，組み合わせ道具の存在を想定する必要性がある。ここではその可能性のみを記しておく。

第3表　土器観察表①

図	番号	調査区	層位	器種	部位	色調		胎土	調整	
						外面	内面		外面	内面
11	1	E8-4	1	深鉢	胴	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・長石・角閃石	条痕?	ナデ
	2	E8-4	3	深鉢	口	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	石英・角閃石	キザミ目・刺突文・凹線文・爪圧痕	ナデ
	3	E9-3トレンチD	4	深鉢	口	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・角閃石	凹線文・爪圧痕	ナデ
	4	E8-4トレンチA	－	深鉢	口	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・角閃石	凹線文	ナデ
	5	E8-4	3	深鉢	胴	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・角閃石	凹線文・撚糸紋	ナデ
	6	E8-4	3	深鉢	胴	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	石英・角閃石	凹線文・撚糸文	ナデ
	7	E8-4	3	深鉢	胴	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・角閃石	撚糸文	ナデ
	8	E8-4	3	深鉢	胴	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・角閃石	撚糸文	ナデ
	9	E8-3	3	深鉢	胴	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・角閃石	撚糸文	ナデ
	10	E9-3	3	深鉢	胴	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	石英・角閃石	撚糸文	ナデ
	11	F8-2ベルトD	2	深鉢	胴	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄(10YR6/4)	石英・角閃石	撚糸文	ナデ
	12	E8-3	3	深鉢	胴	橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(10YR7/4)	石英・角閃石	凹線・撚糸文	ナデ
	13	E9-3トレンチD	4	深鉢	胴	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	石英・角閃石	撚糸文	ナデ
	14	E10-4	3	深鉢	胴	にぶい褐(7.5YR5/4)	褐灰(7.5YR4/1)	石英	条痕文	条痕文
	15	E10-4	3	深鉢	口	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	滑石・石英	ナデ	ナデ
	16	E10-4 E11-3ベルトC	3	深鉢	胴	橙(2.5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	滑石・石英・片岩	ナデ	ナデ
13	17	E8-4	2	深鉢	口	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	石英・角閃石・片岩	凹線紋・ヘラミガキ	ヘラミガキ
	18	E9-3ベルトA	1	深鉢	口	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	石英・角閃石	凹線紋・ヘラミガキ	ヘラミガキ
	19	E8-4	2	深鉢	口	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/3)	石英・角閃石	凹線紋・ヘラミガキ	ヘラミガキ
	20	E8-4トレンチD	2	深鉢	口	橙(5YR6/6)	にぶい橙(5YR6/4)	石英・角閃石	凹線紋・ヘラミガキ	ヘラミガキ
	21	E8-4ベルトE	2	深鉢	口	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	石英・角閃石	凹線紋・ナデ	ナデ
	22	E9-3トレンチD	1	深鉢	口	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(5YR6/6)	石英・角閃石	凹線紋・ナデ	ヘラミガキ
	23	採集	－	深鉢	口	橙(5YR7/6)	橙(5YR6/6)	石英・角閃石・片岩	凹線紋・ヘラミガキ	ナデ
	24	E10-4トレンチD	1・2	深鉢	口	暗灰黄(2.5YR4/2)	にぶい黄橙(10YR7/3)	石英・角閃石	凹線紋・ナデ	ナデ
	25	採集	－	深鉢	口	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	26	F8-2ベルトD	1b	深鉢	口	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/6)	石英・角閃石・雲母	ヘラミガキ	ナデ
14	27	F9-1ベルトD	3	深鉢	口	褐灰(5YR4/1)	灰褐(5YR4/2)	石英・角閃石	ヘラミガキ	ヘラミガキ
	28	F8-2ベルトD	3	深鉢	口	黒褐(10YR3/2)	にぶい黄橙(10YR6/4)	角閃石・雲母	ヘラミガキ	ヘラミガキ
	29	E9-3	2	深鉢	口	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR6/4)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	30	E9-3	1	深鉢	口	灰褐(7.5YR4/2)	明褐(7.5YR5/6)	石英・角閃石	ヘラミガキ	ヘラミガキ
	31	F9-1ベルトD	2	深鉢	口	褐灰(7.5YR4/1)	にぶい褐(7.5YR5/4)	石英・角閃石	ヘラミガキ	ヘラミガキ
	32	E9-3トレンチD	1	深鉢	口	褐橙(5YR6/8)	橙(7.5YR6/6)	石英・角閃石	ヘラミガキ	ヘラミガキ
	33	E9-3	3	深鉢	口	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	石英・角閃石	ヘラミガキ	ヘラミガキ
	34	F9-1	3	深鉢	口	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	石英・角閃石	ヘラミガキ	ヘラミガキ
	35	E8-4	2	深鉢	口	にぶい赤褐(5YR6/4)	にぶい赤褐(7.5YR6/6)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	36	E8-4トレンチD	2	深鉢	口	黒褐(10YR3/2)	にぶい赤褐(5YR4/3)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	37	採集	－	深鉢	口	黒褐(7.5YR3/2)	黒褐(7.5YR3/1)	石英・角閃石	凹線紋・ナデ	ナデ
	38	F9-1	1	深鉢	口	黄灰(2.5Y4/1)	にぶい橙(7.5YR7/4)	石英・雲母	ナデ	ナデ
	39	E9-3トレンチD	1・2	深鉢	口	灰黄褐(10YR6/2)	灰黄褐(10YR5/2)	石英・雲母	ナデ	ナデ
	40	E9-3トレンチD	2	深鉢	口	灰黄褐(10YR6/2)	にぶい黄橙(10YR7/4)	雲母	ナデ	ナデ
	41	採集	－	深鉢	口	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄褐(10YR5/3)	雲母	ナデ	ナデ
	42	E8-3	3	深鉢	口	黒褐(10YR3/1)	灰黄褐(10YR4/3)	雲母	ナデ	ナデ
	43	E11-3ベルトC	2	深鉢	口	明赤褐(5YR5/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	44	E10-4	－	深鉢	口	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	石英・角閃石・片岩	ナデ	ナデ

第3表　土器観察表②

図	番号	調査区	層位	器種	部位	色調		胎土	調整	
						外面	内面		外面	内面
15	45	F9-1ベルトA	2	深鉢	屈曲部	褐(7.5YR4/4)	明赤褐(5YR5/8)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	46	E8-4トレンチD	1・2	深鉢	屈曲部	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	47	F9-1ベルトD	表土	深鉢	屈曲部	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	48	E8-4 E8-4Eベルト	2	深鉢	口	橙(5YR6/6)	にぶい橙(5YR7/4)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	49	E10-4	1・2	深鉢	胴	明赤褐(5YR5/6)	にぶい黄橙(10YR6/3)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	50	F9-1ベルトD F9-3	3	深鉢	胴	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	50	E9-3	3	深鉢	胴	にぶい赤褐(2.5YR5/3)	にぶい橙(5YR6/3)	石英・角閃石		
	51	E8-3トレンチD	1・2	深鉢	胴	橙(7.5YR6/6)	浅黄(2.5Y7/3)	石英・角閃石		
	52	F9-1ベルトD	2	深鉢	屈曲部	灰褐(10YR4/3)	にぶい橙(10YR7/4)	石英・角閃石		
	53	E8-4トレンチD	1・2	深鉢	胴	橙(5YR6/6)	にぶい赤褐(5YR5/4)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	54	F9-1・2	表土	深鉢	屈曲部	橙(5YR6/6)	にぶい橙(10YR7/4)	石英・角閃石		
	55	E8-4トレンチD E9-3トレンチD	1・2 3	深鉢	胴	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/3)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	56	E8-3トレンチD	1・2	深鉢	胴	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・角閃石	ヘラナデ	ナデ
	57	E8-4	2	深鉢	胴	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	58	F9-1ベルトD	2	深鉢	胴	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	石英・角閃石	ヘラナデ	ナデ
	59	F9-1ベルトD	3	深鉢	胴	橙(5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	石英・角閃石	ヘラナデ	ナデ
	60	E9-1	表土	深鉢	胴	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	61	E9-3	3	深鉢	胴	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・角閃石	ヘラナデ	ナデ
	62	F9-2ベルトD	2	深鉢	胴	橙(7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	石英・角閃石	ヘラミガキ	ナデ
	63	E10-4トレンチC	1・2	深鉢	胴	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(10YR7/4)	石英・角閃石		
	64	E9-3トレンチD	3	深鉢	胴	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	石英・角閃石	ヘラナデ	ナデ
	65	E10-3 E10-4	1 1・2	深鉢	胴	褐(7.5YR4/3)	明褐(7.5YR5/6)	石英・角閃石	ヘラナデ	ナデ
	66	E10-4	1・2	深鉢	胴	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(10YR7/4)	石英・角閃石	ヘラナデ	ナデ
	67	E8-4	2	深鉢	胴	にぶい赤褐(5YR5/3)	橙(7.5YR7/6)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
16	68	E10-4	4	深鉢	底	浅黄橙(10YR8/3)	にぶい黄橙(10YR7/2)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	69	E9-3	2	深鉢	底	橙(5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/3)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	70	E9-4 E9-4トレンチD	1 1・2	深鉢	底	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	71	F9-1ベルトD F9-1	3	深鉢	底	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/3)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	72	E9-3トレンチD	1・2	深鉢	底	橙(5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	73	F9-2トレンチD	2	深鉢	底	橙(5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/3)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	74	E8-3トレンチD E8-4トレンチD E8-4	1・2 1・2 3	深鉢	底	橙(5YR6/6)	にぶい赤褐(5YR5/4)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	75	E9-4トレンチD	1	深鉢	底	明赤褐(5YR5/6)	褐灰(5YR4/1)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	76	F8-2ベルトD	2	深鉢	底	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	石英・片岩	ナデ	ナデ
	77	E8-3トレンチD	1・2	深鉢	底	橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	78	E11-3ベルトC	2	深鉢	底	橙(5YR6/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	79	E10-4トレンチD	1・2	深鉢	底	x	にぶい赤褐(7.5YR5/4)	石英・角閃石		
	80	E8-3	表土	深鉢	底	橙(5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/2)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	81	E9-3ベルトA	2	深鉢	底	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	82	E8-3トレンチD	1・2	深鉢	底	明黄褐(7.5YR6/6)	明黄褐(10YR6/6)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	83	E8-3・4トレンチD	1	深鉢	底	にぶい橙(5YR6/4)	橙(7.5YR6/6)	石英・角閃石	ナデ	ナデ

第3表　土器観察表③

図	番号	調査区	層位	器種	部位	色調		胎土	調整	
						外面	内面		外面	内面
17	84	E11-3	3	浅鉢	口	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	石英・角閃石		
	85	E9-3トレンチD	表土	浅鉢	口	橙(5YR6/6)	明赤褐(5YR5/6)	石英・角閃石		
	86	E10-4	1・2	浅鉢	口	橙(5YR6/6)	褐灰(5YR4/1)	石英・角閃石		
	87	E9-4トレンチD E9-4 E8-4トレンチD	1~3	浅鉢	口	橙(5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	88	E10-4	1・2	浅鉢	口	にぶい橙(10YR7/4)	褐灰(10YR4/1)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	89	E9-4トレンチD	1a	浅鉢	口	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	石英・角閃石		
	90	E10-4	3	浅鉢	屈曲部	灰黄褐(10YR6/2)	にぶい橙(7.5YR7/4)	石英・角閃石		
	91	E8-3トレンチD	1・2	浅鉢	口	明褐(7.5YR5/6)	にぶい褐(7.5YR6/4)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	92	E8-4トレンチD	1・2	浅鉢	口	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(7.5YR7/4)	石英	ナデ	ナデ
	93	F8-2ベルトD	1a	浅鉢	口	にぶい橙(10YR7/4)	にぶい橙(10YR7/4)	石英・角閃石		
	94	F9-2ベルトD	2	浅鉢	口	灰黄褐(10YR6/2)	灰黄褐(10YR6/2)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	95	F9-1ベルトA	2	浅鉢	肩部	浅黄橙(10YR8/4)	灰黄褐(10YR6/2)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	96	E9-3	3	浅鉢	肩部	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	97	E11-3ベルトC	2	浅鉢	肩部	にぶい赤褐(7.5YR6/4)	にぶい赤褐(7.5YR6/4)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	98	採集	—	浅鉢	屈曲部	橙(5YR7/6)	橙(5YR6/8)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	99	F8-2ベルトD	2	浅鉢	肩部	にぶい橙(7.5YR7/4)	褐灰(7.5YR4/2)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	100	F8-2ベルトD	2	浅鉢	屈曲部	橙(5YR6/8)	にぶい橙(7.5YR7/4)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	101	F9-1ベルトA	1b,2	浅鉢	屈曲部	灰褐(7.5YR4/2)	にぶい褐(7.5YR5/3)	角閃石	ミガキ	ミガキ
	102	F9-1ベルトA	1	浅鉢	屈曲部	橙(5YR7/6)	橙(5YR6/8)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	103	F9-1	1	浅鉢	屈曲部	にぶい黄橙(7.5YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	104	F9-1ベルトC	表土	浅鉢	口	にぶい褐(10YR7/4)	にぶい褐(10YR7/4)	角閃石	ミガキ	ミガキ
	105	採集 E9-4トレンチD	3	浅鉢	屈曲部	にぶい橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	106	F9-1 F8-2トレンチA	2	浅鉢	口	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	107	F8-2ベルトD	2	浅鉢	底	にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶい黄褐(10YR7/4)	石英・角閃石	ミガキ	ミガキ
	108	E9-3トレンチD	1・2	浅鉢	底	橙(7.5YR6/6)	褐灰(2.5Y4/1)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
18	109	E8-4 E8-4トレンチD E8-3・4トレンチD E9-3ベルトA	カクラン	壺	胴	にぶい橙(5YR7/4)	浅黄橙(10YR8/4)	石英	ナデ	ナデ
	110	F8-2	表土	碗	底	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	石英	ナデ	ナデ
	111	E10-4	1	碗	底	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	石英・角閃石	ナデ	ナデ
	112	表採	—	碗	口	オリーブ灰(10Y5/2)	オリーブ灰(10Y5/2)			
	113	F9-1	1	碗	口	オリーブ黄(5Y6/4)	オリーブ黄(5Y6/4)			

第４表　石器観察表①

図	番号	調査区	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
20	1	E10-4トレンチC	1・2	石鏃	黒曜石	4.4	2.7	0.5	4.06	青灰色黒曜石
	2	E11-3	3	石鏃	黒曜石	4.0	1.9	0.5	2.19	青灰色黒曜石
	3	F10-1	1	石鏃	玄武岩	3.3	2.7	0.4	1.51	
	4	E9-3トレンチD	1・2	石鏃	玄武岩	2.6	2.3	0.4	1.15	
	5	採取	―	石鏃	黒曜石	2.9	1.8	0.4	1.07	
	6	F9-2	1	石鏃	黒曜石	2.9	1.7	0.3	0.74	
	7	E8-3	表土	石鏃	黒曜石	2.6	1.5	0.4	1.18	
	8	E10-4	3	石鏃	黒曜石	3.2	2.05	0.55	2.34	
	9	E10-3	3	石鏃	黒曜石	3.0	1.85	0.55	2.05	
	10	E9-3トレンチD	4	石鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.4	1.19	
	11	E8-4	3	石鏃	玄武岩	2.56	1.78	0.32	1.15	
	12	E8-4	3	石鏃	黒曜石	2.23	1.62	0.3	0.67	
	13	E8-4	3	石鏃	黒曜石	2.2	1.4	0.32	0.50	
	14	F9-1ベルトD	3	石鏃	黒曜石	2.8	1.55	0.40	1.01	濁白色黒曜石
	15	E10-4	3	石鏃	黒曜石	2.5	2.0	0.4	1.1	
	16	E10-3	3	石鏃	黒曜石	3.8	1.5	0.4	1.08	鋸歯鏃
	17	E10-4	3	石鏃	黒曜石	2.8	1.7	0.45	0.70	
	18	E11-3	4	石鏃	黒曜石	2.1	1.5	0.3	0.6	
	19	E10-4	3	石鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.4	0.81	
	20	採取	―	石鏃	黒曜石	2.2	1.55	0.6	1.45	
	21	E8-4	3	石鏃	黒曜石	1.8	1.6	0.3	0.49	
	22	E9-4トレンチD	4	石鏃	黒曜石	2.05	1.1	0.15	0.35	局部磨製
	23	E9-4トレンチD	3	石鏃	黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.36	局部磨製
	24	E9-4	3	石鏃	チャート	1.7	1.2	0.3	0.53	
	25	E9-4	3	石鏃	黒曜石	1.65	1.2	0.2	0.26	濁白色黒曜石
21	26	E10-4	3	石鏃	玄武岩	2.68	1.95	0.35	1.33	
	27	E10-3	3	石鏃	黒曜石	2.4	1.8	0.35	1.01	
	28	F8-1ベルトD	1b	石鏃	黒曜石	2.15	1.6	0.35	0.82	
	29	F10-1	1	石鏃	黒曜石	2.0	1.2	0.4	0.72	
	30	E11-3C	3	石鏃	黒曜石	1.95	1.45	0.4	0.78	
	31	F8-2ベルトD	2	石鏃	黒曜石	3.3	2.1	0.4	1.75	剥片鏃
	32	E8-4	3	石鏃	黒曜石	2.4	1.9	0.4	0.86	剥片鏃
	33	F9-1ベルトD	表土・1	石鏃	玄武岩	3.1	2.3	0.6	2.86	剥片鏃
	34	E8-4	3	石鏃	黒曜石	2.5	2.3	0.75	3.66	未製品
	35	E11-3	3	石鏃	黒曜石	2.4	2.45	0.55	3.05	未製品
	36	E8-4トレンチD	1	石鏃	黒曜石	1.8	2.4	0.4	1.43	未製品
22	37	E9-4トレンチD	4	石核	黒曜石	3.15	2.3	2.8	18.08	
	38	E8-4	表土	石核	黒曜石	1.9	1.95	1.2	3.61	
	39	排土採取	―	石核	黒曜石	1.8	2.5	1.7	6.6	
	40	F9-1ベルトD	2	剥片	玄武岩	5.7	2.4	0.8	7.98	
	41	E9-4トレンチD	1	Uフレ	黒曜石	4.8	2.3	0.9	4.45	
	42	E8-4	表土	Uフレ	黒曜石	3.9	2.5	1.3	7.22	
	43	E8-1	表土	調整剥片	黒曜石	4.3	1.6	0.8	3.08	
	44	F9-1ベルトD	表土・1	Uフレ	黒曜石	1.8	2.9	0.7	3.44	
	45	F8-2ベルトD	1a	Uフレ	黒曜石	2.1	2.9	0.7	2.91	

第4表　石器観察表②

図	番号	調査区	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
23	46	排土採取	―	掻器	黒曜石	4.2	2.1	1.0	5.92	
	47	E8-4トレンチD	1	剥片	黒曜石	2.7	1.3	0.4	1.41	
	48	E11-3ベルトC	1	剥片	黒曜石	2.3	2.1	0.4	1.23	
	49	E9-3	3	Uフレ	黒曜石	3.2	2.5	0.8	2.76	
	50	F8-1ベルトD	2	Uフレ	黒曜石	3.2	3.2	1.15	8.73	
	51	E11-3ベルトC	1	剥片	黒曜石	2.7	2.7	0.95	5.61	
24	52	採取	―	石斧	玄武岩	7.1	7.8	1.6	111.78	分銅型
	53	E9-3ベルトA	2	石斧	玄武岩	8	7.3	1.7	152.36	
	54	E9-3	3	石斧	玄武岩	12.8	8.3	2.1	241.18	
	55	F9-2ベルトD	表土	石斧	玄武岩	8.6	9.1	2.1	218.3	
	56	採取	―	石斧	玄武岩	7.95	8.7	2.1	142.91	
	57	E9-3トレンチD	2	石斧	玄武岩	7.1	7	0.55	42.44	
	58	E9-3トレンチD	3	石斧	玄武岩	5.5	8.2	0.7	33.09	刃部
	59	F8-2ベルトD	表土	石斧	玄武岩	2.9	5.5	1	15.88	刃部
	60	F9-1ベルトA	2	石斧	玄武岩	3.4	7.5	8.5	17.47	刃部
	61	F8-1	表土	石斧	玄武岩	11.7	7	2.4	245.16	
25	62	E9-4	1・2	砥石	砂岩	6.1	7.4	1.4	65.62	
	63	F9-2	―	砥石	砂岩	5.1	3.4	1.1	26.44	
	64	E8-4ベルトE	1b	砥石	砂岩	5.2	1.5	2.1	23.73	
	65	E8-4	1・2	砥石	粘板岩	5.7	4.1	1.8	58.51	
	66	F9-10ベルト	2	砥石	砂岩	5.6	3.05	2	36.35	

第5章　ま　と　め

今回の調査において遺構は検出されていない。2004（平成16）年度の範囲確認調査においてＥ８区の試掘壙で検出し土壙と考えていたものは，周辺の再調査の結果，風倒木の痕跡である可能性が高い。この風倒木の痕跡はＥ８区周辺で数カ所見られた。出土遺物は縄文時代晩期前半の土器を主体とし，縄文早期，後期の遺物，中世の陶磁器も若干見られる。これらの遺物は，出土状況や摩耗具合から，原位置を保っているものではなく他所から流れ込んだものと考えられる。

(1)　谷地形について

調査区の中央に浅い谷筋が南北方向に通っており，縄文時代の遺物包含層によってこの谷筋が埋まっていることが判明した。谷の形成時期についてであるが，Ｅトレンチの土層断面を見ると百花台Ⅷ層上面が西から東へかなり傾斜していることが判る。したがって，基盤層のⅧ層段階からすでに谷地形を呈していたものと思われる。この谷筋に土石流や火砕流などが流れ込み徐々に谷が埋まっていったものと考えられる。調査区内に留まる径１ｍ以上の巨岩や，礫石原火砕流といわれる百花台Ⅳ層（通称カシノミ層）はその痕跡であろう。ただし，谷の底の部分には，百花台Ⅴ層やⅣ層が残っていない所もあり，いったん埋まったあと，雨水等による浸食を何度も受けたことが考えられる。

(2)　旧石器時代について

今回の調査において旧石器時代の遺物はほとんど出土していない。今回の調査区は谷地形を呈するものの百花台Ⅳ層以下が比較的よく残っていた。そこで，百花台Ⅳ層以下に３箇所のトレンチを設定し調査を実施したが，いずれの試掘壙からも遺物は出土しなかった。範囲確認調査の報告（2006　山下）の際にも指摘したが，本調査区周辺は旧石器の空白地帯であろう。

(3)　縄文時代について

縄文時代の遺物は百花台Ⅲ層より上位の層から出土している。遺物は小破片のものがほとんどで，接合するものは少ない。また，少なからずローリングを受けており原位置を保っていたものとは考えにくい。また，遺構等も検出されないことから，ここで出土した遺物は他所からの流れ込みである可能性が高い。主体となるのは縄文時代晩期前半であり，この時期に小規模ながらも周辺に集落があったものと考えられる。これまでの調査において百花台遺跡群からこの時期の遺物はかなり出土しているので，これらとの関連を検討していくことが今後の課題である。

最後になりましたが，今回の発掘調査及び報告書の作成にあたり，雲仙市教育委員会をはじめ地元の方々，関係者の皆様には多大なる御協力やお力添えをいただき，大変お世話になりました。ここに心よりお礼申し上げます。

放射性炭素年代測定結果報告書
（AMS 測定）

魚洗川Ｂ遺跡

㈱加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

魚洗川Ｂ遺跡は，長崎県雲仙市国見町金山名（北緯32°48′41～44″，東経130°17′43～50″）に所在する。

(2) 測定の意義

層位および土器の年代を明らかにする。

(3) 測定対象試料

測定対象試料は，魚洗川Ｂ遺跡の４層の土壌（No.１：IAAA-71436），魚洗川Ｂ遺跡の315-58区出土の土器付着炭化物（No.９：IAAA-71437），魚洗川Ｂ遺跡の２層の土器付着炭化物（No.７：IAAA-71438），魚洗川Ｂ遺跡の306-11区出土の土器付着炭化物（No.８：IAAA-71439），魚洗川Ｂ遺跡の試掘調査（平成16年度）の６層から出土した土器付着炭化物（No.５：IAAA-71440），合計５点である。

(4) 化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）炭化物の場合，酸処理・アルカリ処理・酸処理（Acid Alkali Acid：AAA 処理）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～0.01Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。土壌の場合，AAA 処理ではなく，酸処理のみを実施する。

３）試料を酸化銅１ｇと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

(5) 測定方法

測定機器は，3 MV タンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HoxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により^{13}C/^{12}C の測定も同時に行う。

(6) 算出方法

1）年代値の算出には，Libby の半減期5568年を使用した。

2）BP 年代値は，過去において大気中の^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る^{14}C 年代である。

3）付記した誤差は，次のように算出した。
複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）δ^{13}C の値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS 測定の場合に同時に測定されるδ^{13}C の値を用いることもある。
δ^{13}C 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$\delta^{14}C=[(^{14}A_S-^{14}A_R)/^{14}A_R]\times1000$ (1)

$\delta^{13}C=[(^{13}A_S-^{13}A_{PDB})/^{13}A_{PDB}]\times1000$ (2)

ここで，$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$ または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C 濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}C は，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}A_S=^{13}C/^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に^{13}C/^{12}C を測定し，標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}C を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，Δ^{14}C は，試料炭素が$\delta^{13}C=-25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C 濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（1）式の^{14}C 濃度を，δ^{13}C の測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N={}^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))^2$（$^{14}A_S$ として^{14}C/^{12}C を使用するとき）

または

$={}^{14}A_S\times(0.975/(1+\delta^{13}C/1000))$（$^{14}A_S$ として^{14}C/^{13}C を使用するとき）

$\Delta^{14}C=[(^{14}A_N-^{14}A_R)/^{14}A_R]\times1000$（‰）

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガ

ス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており，$\Delta^{14}C$との関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C = (pMC/100 - 1) \times 1000$（‰）

$pMC = \Delta^{14}C/10 + 100$（%）

国際的な取り決めにより，この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C/1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln(pMC/100)$

5）^{14}C年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6）較正暦年代の計算では，IntCal 04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey 1995　Bronk Ransey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

(7) 測定結果

^{14}C年代は，魚洗川B遺跡の4層の土壌（No.1：IAAA-71436）が11100±50yrBP，魚洗川B遺跡の315-58区出土の土器付着炭化物（No.9：IAAA-71437）が2960±40yrBP，魚洗川B遺跡の2層の土器付着炭化物（No.7：IAAA-71438）が3100±40yrBPである。魚洗川B遺跡の306-11区出土の土器付着炭化物（No.8：IAAA-71439）が7520±40yrBPである。魚洗川B遺跡の試掘調査（平成16年度）の6層から出土した土器付着炭化物（No.5：IAAA-71440が3100±30yrBPである。

暦年較正年代（1σ=68.2%）は，No.1が11120～11000BC，No.9が1260～1120BC，No.7が1430～1370BC（49.6%）・1350～1310BC（18.6%），No.8が6440～6370BC，No.5が1430～1370BC（46.9%）・1350～1310BC（21.3%）である。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

【参考文献】

Stuiver M. and Polash H.A.1977 Discussion: Reporting of 14 C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C.1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2), 425-430

Bronk Ramsey C.2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B.2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2A), 381-389

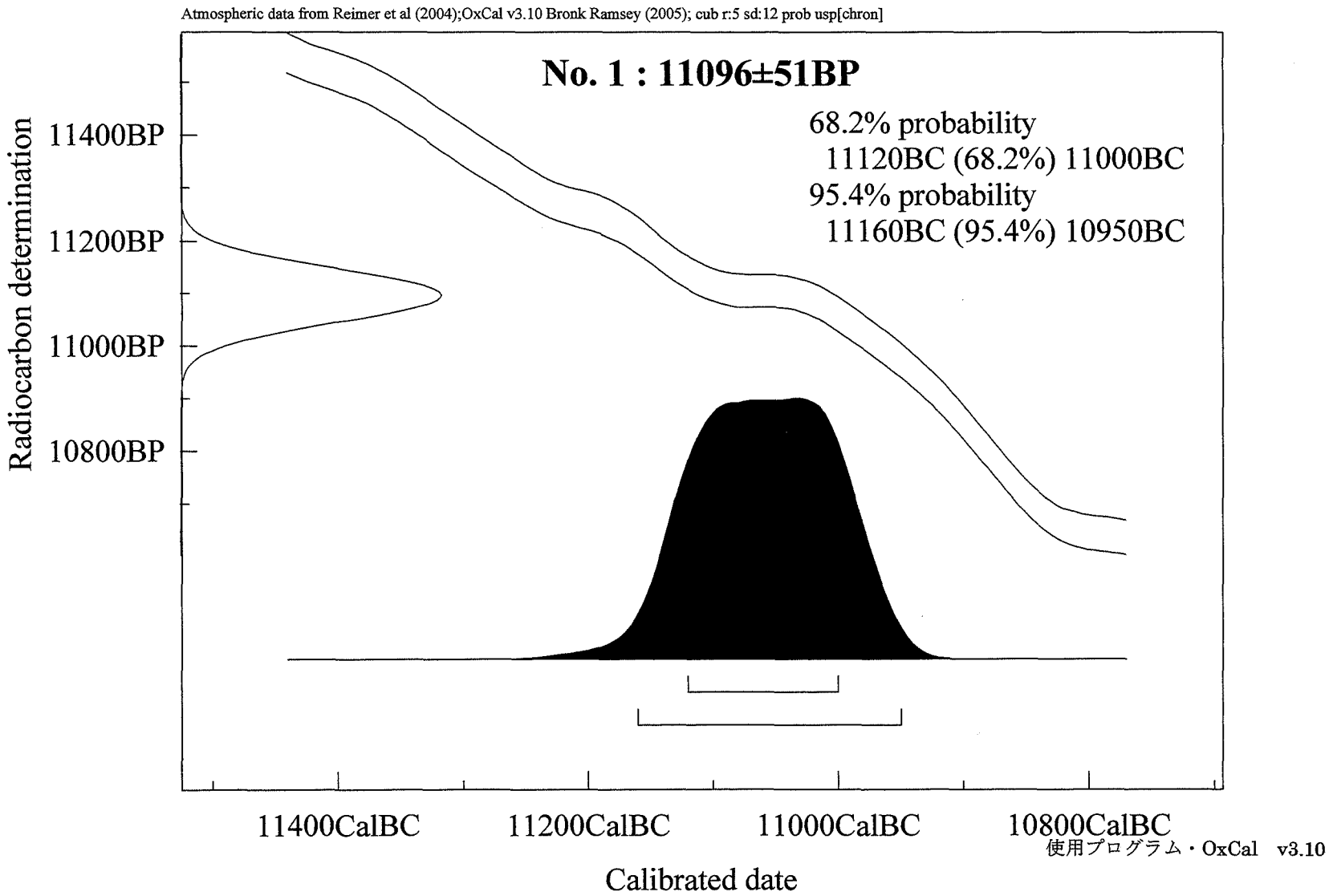
Reimer, P.J. et al.2004 IntCal 04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

IAA Code No.	試料	BP 年代および炭素の同位体比
IAAA-71436	試料採取場所：長崎県雲仙市国見町金山名 魚洗川Ｂ遺跡 試料形態：土壌 試料名（番号）：No.1	Libby Age(yrBP) ： 11,100± 50 δ^{13}C(‰),(加速器) ＝−19.49± 0.92 Δ^{14}C(‰) ＝−748.7± 1.6 pMC(%) ＝ 25.13± 0.16
	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C(‰) ＝−745.9± 1.6 pMC(%) ＝ 25.41± 0.16 Age(yrBP) ： 11,010± 50
IAAA-71437	試料採取場所：長崎県雲仙市国見町金山名 魚洗川Ｂ遺跡 試料形態：土器 試料名（番号）：No.9（第19図）	Libby Age(yrBP) ： 2,960± 40 δ^{13}C(‰),(加速器) ＝−22.85± 0.70 Δ^{14}C(‰) ＝−308.6± 3.0 pMC(%) ＝ 69.14± 0.30
	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C(‰) ＝−305.5± 2.9 pMC(%) ＝ 69.45± 0.29 Age (yrBP) ： 2,930± 30
IAAA-71438	試料採取場所：長崎県雲仙市国見町金山名 魚洗川Ｂ遺跡 試料形態：土器 試料名（番号）：No.7（第14図 40）	Libby Age(yrBP) ： 3,100± 40 δ^{13}C(‰),(加速器) ＝−24.60± 0.74 Δ^{14}C(‰) ＝−320.6± 2.9 pMC(%) ＝ 67.94± 0.29
	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C(‰) ＝−320.0± 2.7 pMC(%) ＝ 68.00± 0.27 Age(yrBP) ： 3,100± 30
IAAA-71439	試料採取場所：長崎県雲仙市国見町金山名 魚洗川Ｂ遺跡 試料形態：土器 試料名（番号）：No.8（第19図）	Libby Age(yrBP) ： 7,520± 40 δ^{13}C(‰),(加速器) ＝−24.42± 0.78 Δ^{14}C(‰) ＝−607.8± 1.9 pMC(%) ＝ 39.22± 0.19
	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C(‰) ＝−607.4± 1.8 pMC(%) ＝ 39.26± 0.18 Age(yrBP) ： 7,510± 40
IAAA-71440	試料採取場所：長崎県雲仙市国見町金山名 魚洗川Ｂ遺跡 試料形態：土器 試料名（番号）：No.5（第19図）	Libby Age(yrBP) ： 3,100± 30 δ^{13}C(‰),(加速器) ＝−24.41± 0.56 Δ^{14}C(‰) ＝−320.2± 2.7 pMC(%) ＝ 67.98± 0.27
	(参考) δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C(‰) ＝−319.4± 2.6 pMC(%) ＝ 68.06± 0.26 δ^{14}C(‰) ＝−319.4± 2.6

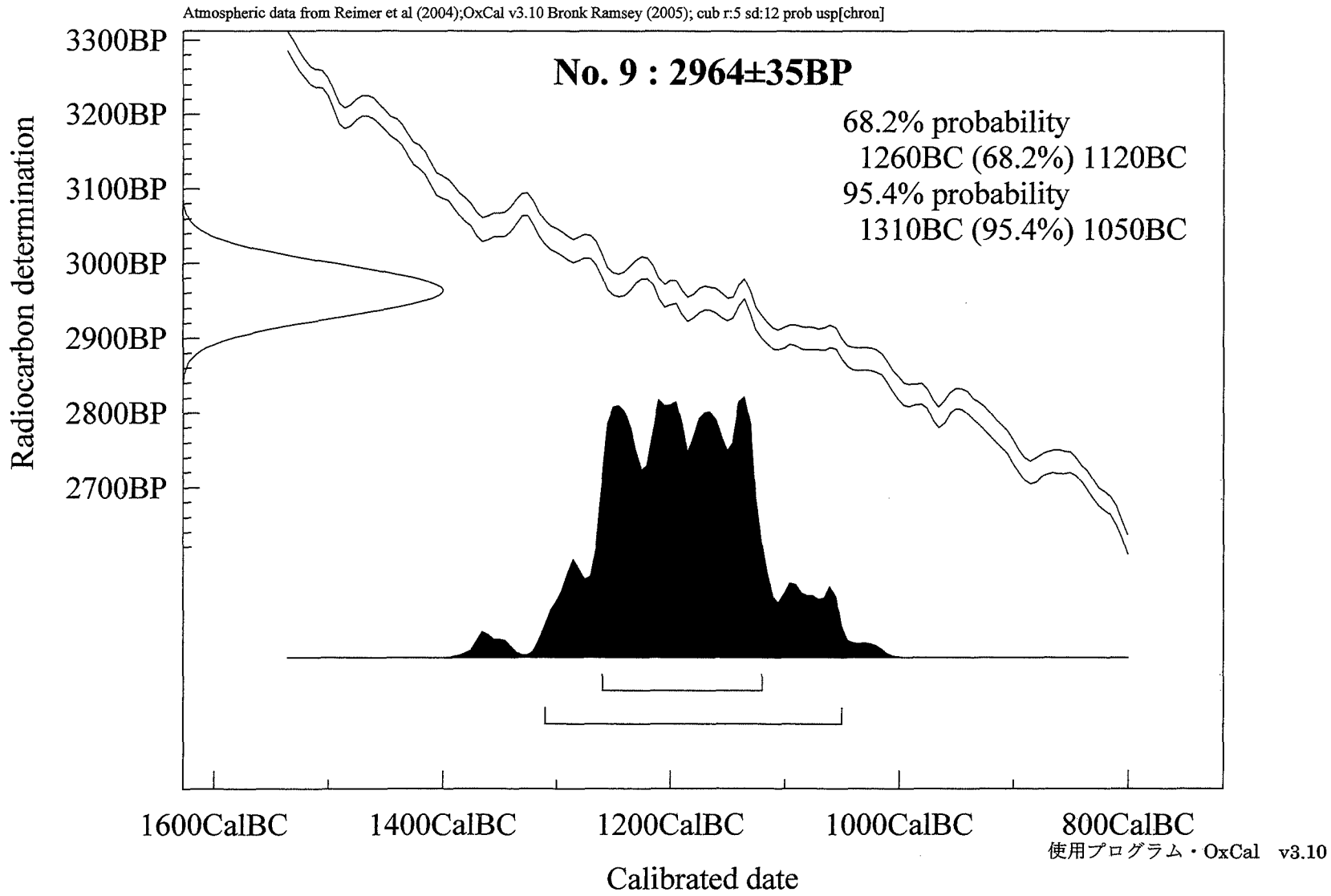
参考資料：暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age(yrBP)
IAAA-71436	No.1	11096±51
IAAA-71437	No.9	2964±35
IAAA-71438	No.7	3104±34
IAAA-71439	No.8	7519±38
IAAA-71440	No.5	3100±32

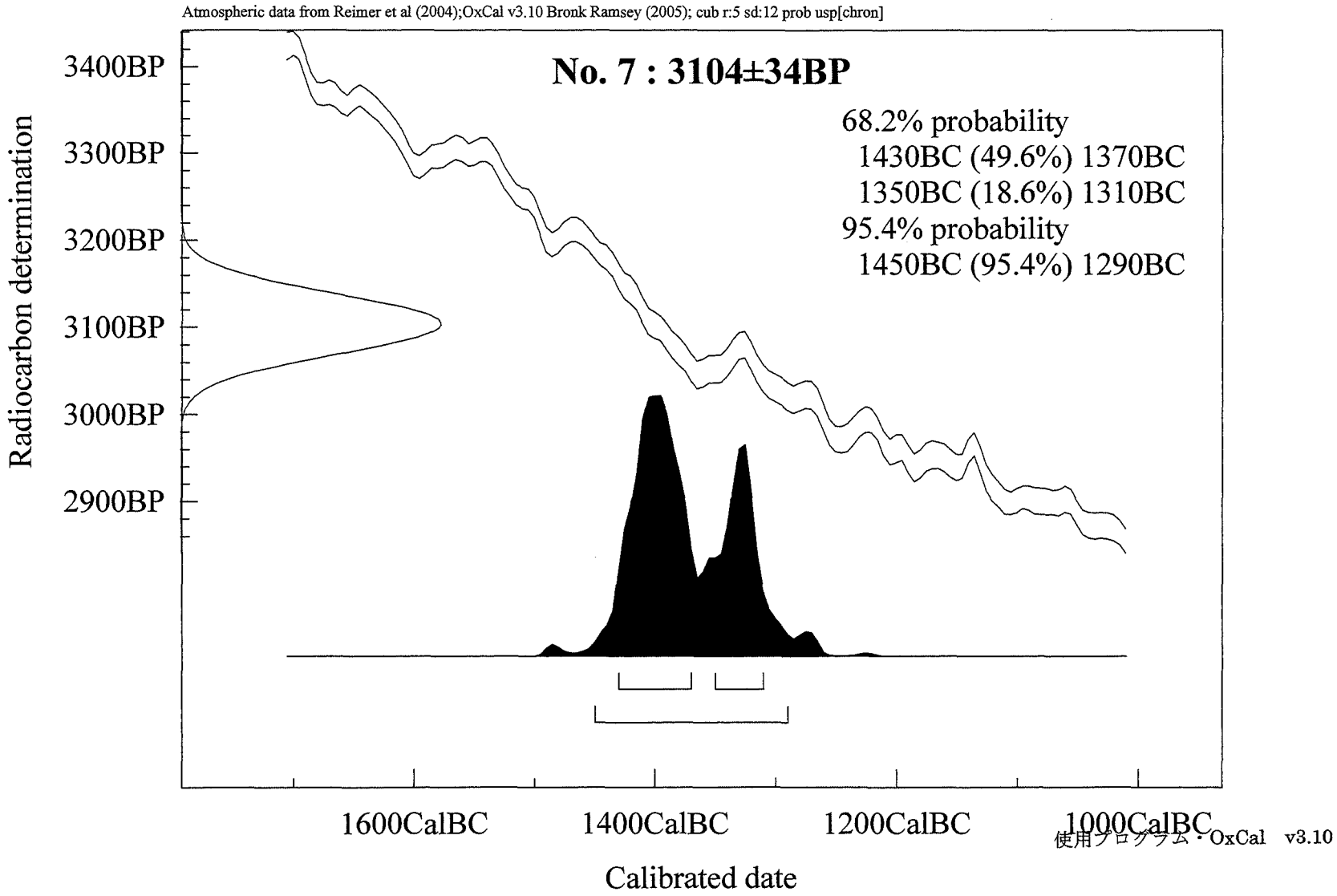
ここに記載する Libby Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。



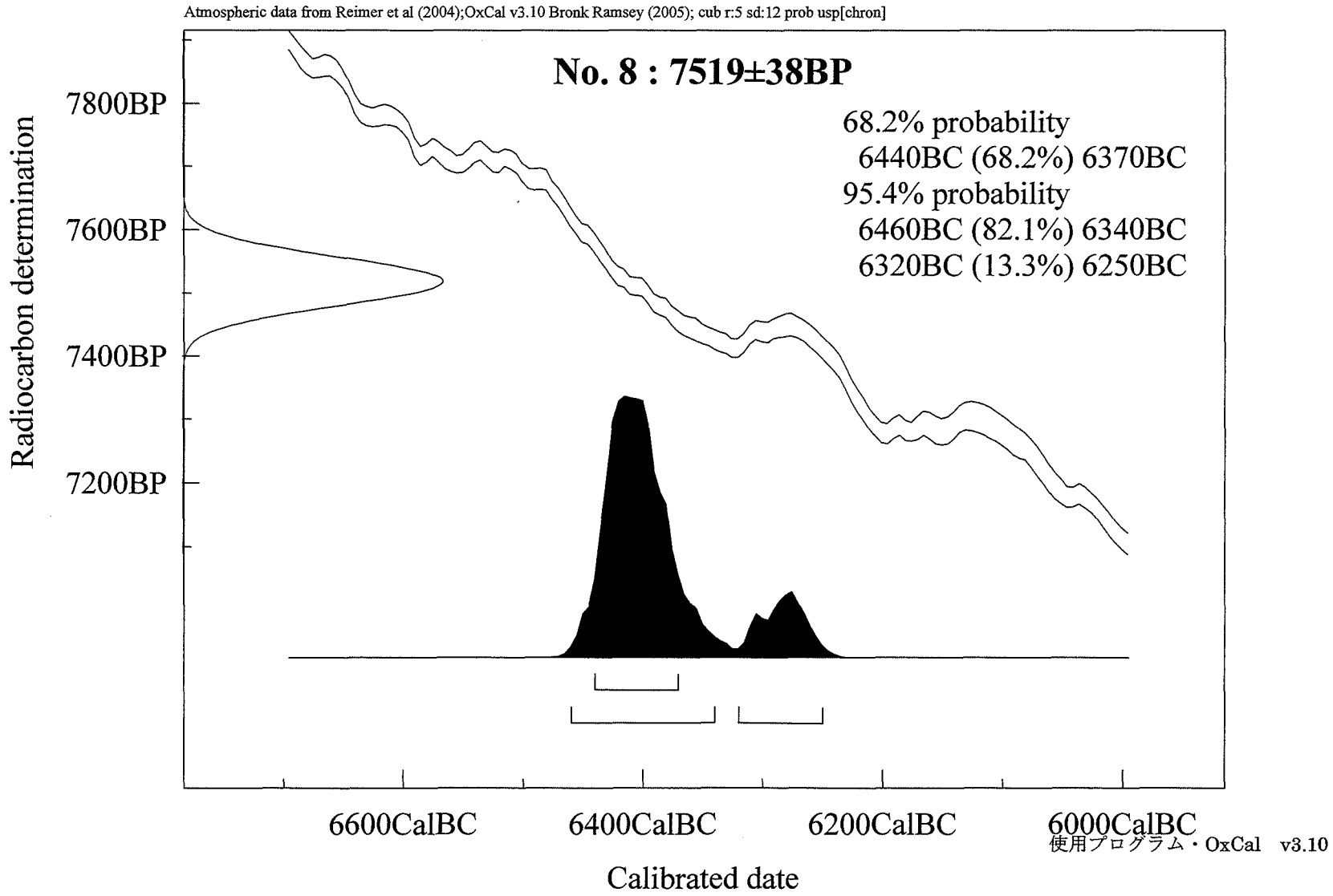
使用プログラム・OxCal　v3.10



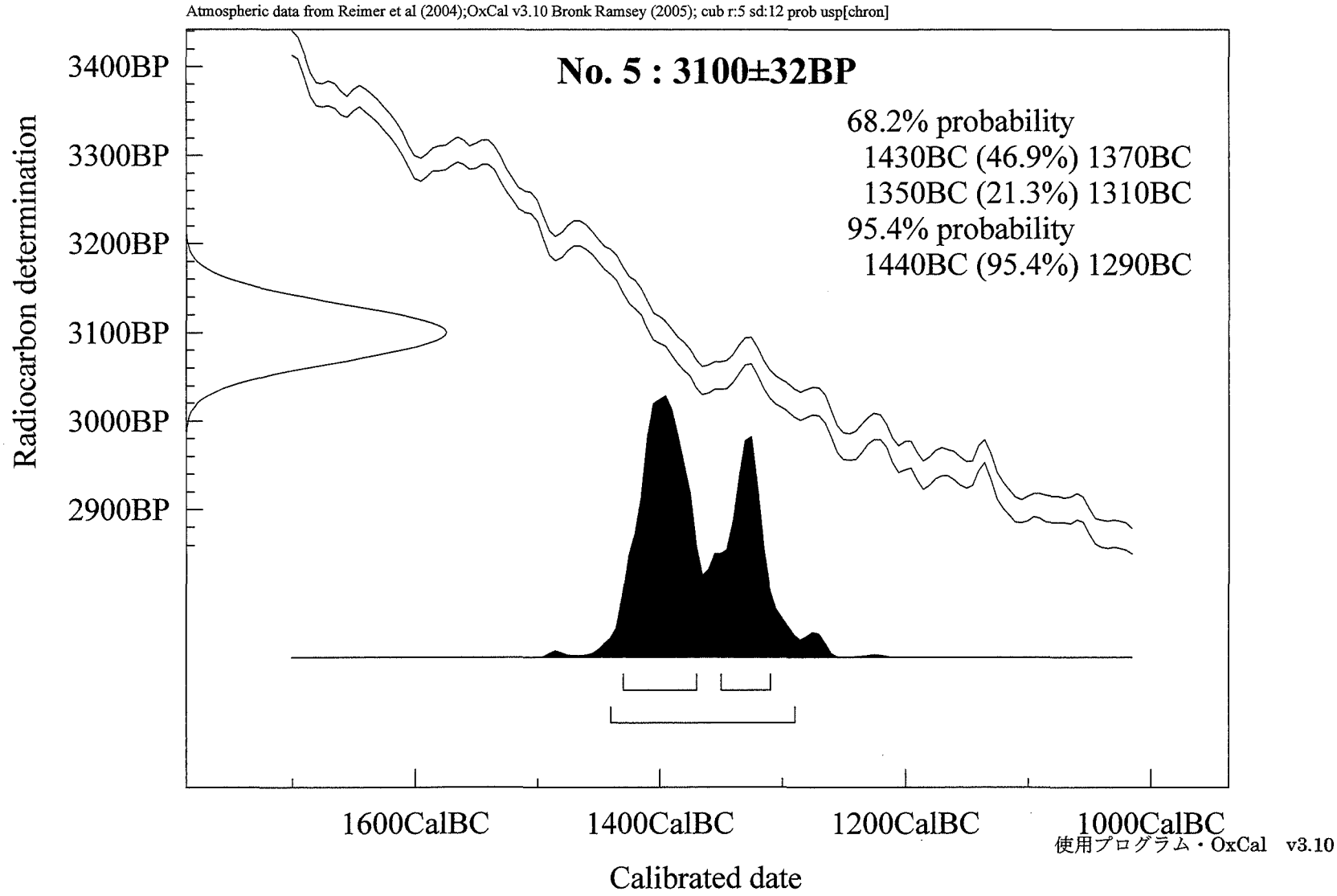
使用プログラム・OxCal　v3.10



使用プログラム：OxCal v3.10



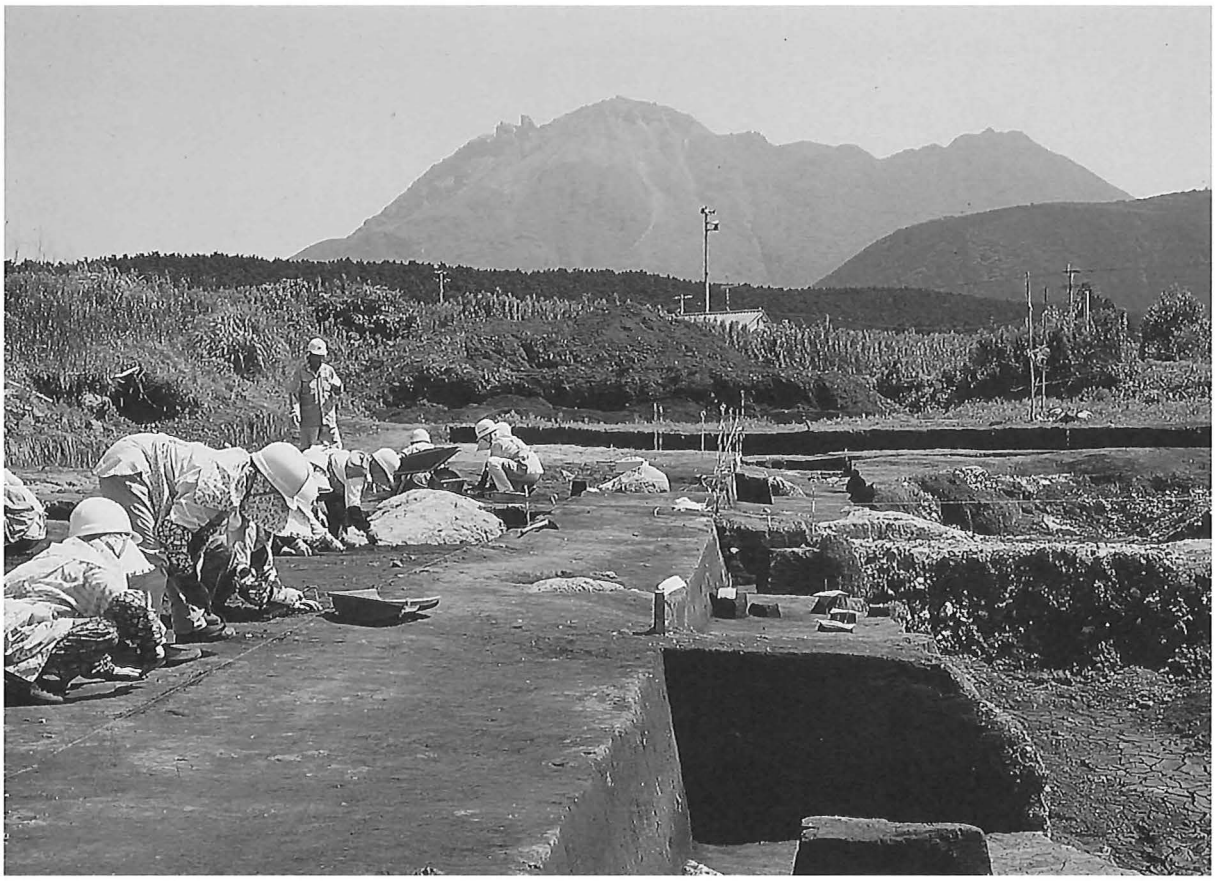
使用プログラム・OxCal v3.10



使用プログラム・OxCal　v3.10

図版１　調査区遠景（西から／有明海をのぞむ）

図版２　調査区全景

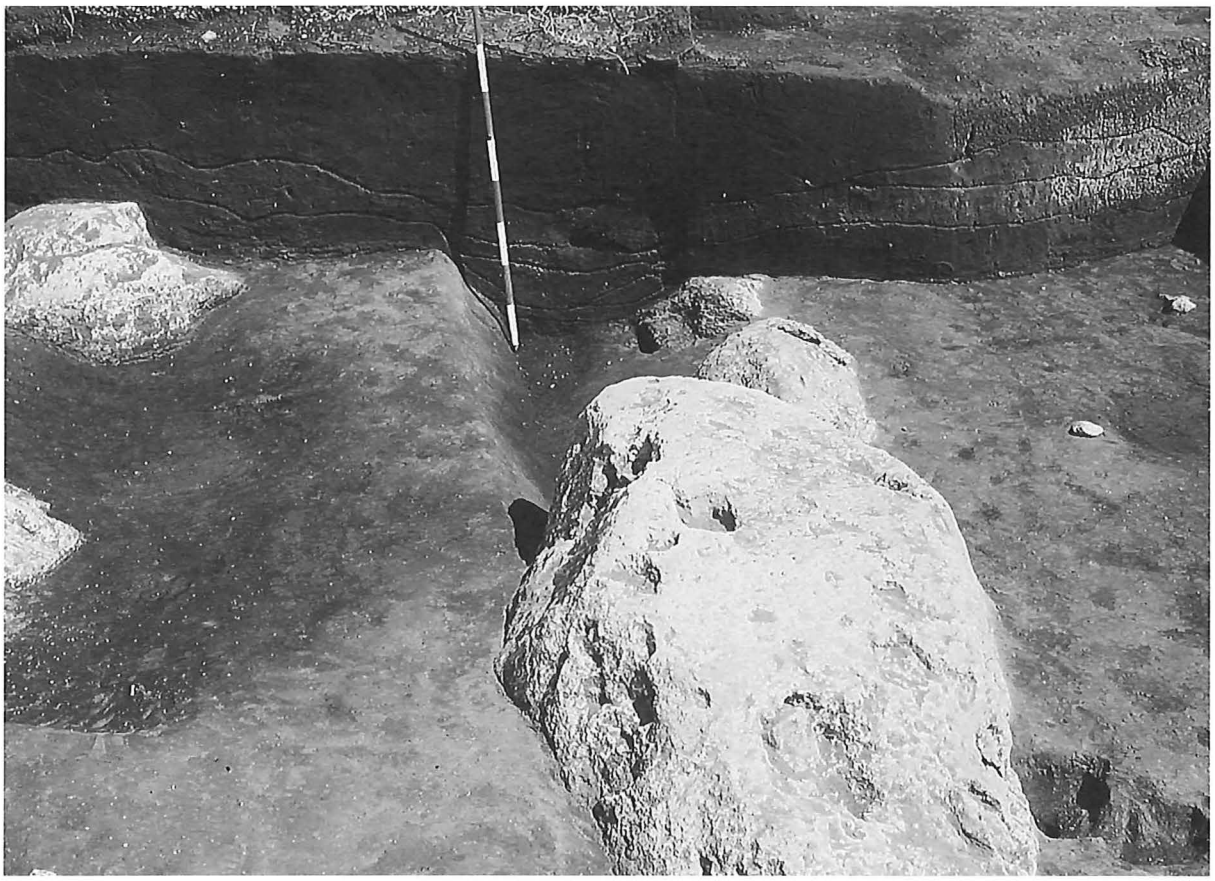


図版３　Ｆ区調査風景

図版４　Ｅ９－４トレンチＤ３層上面検出状況（西から／出土遺物は２層）

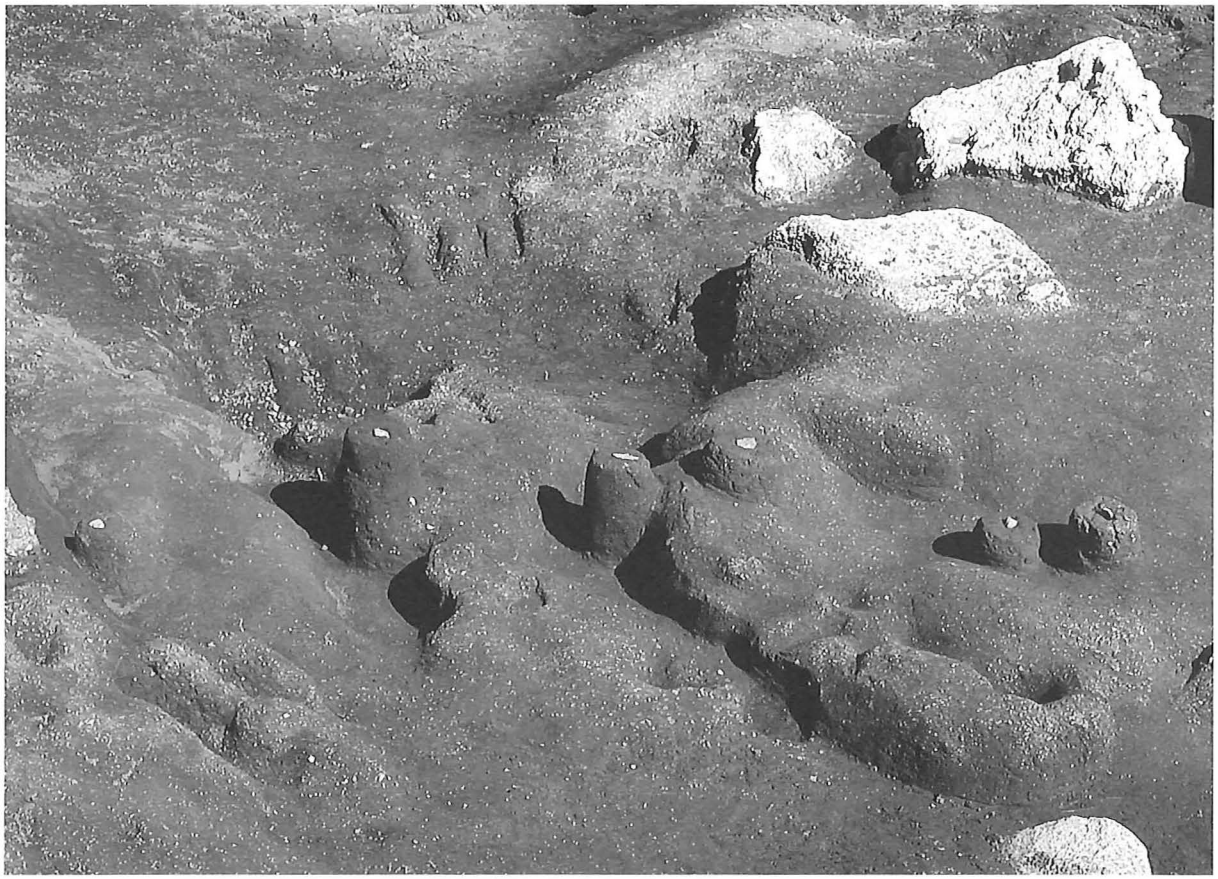
図版５　Ｅ８－４・Ｅ８－３トレンチＤ３層上面検出状況（南から／出土遺物は２層）

図版６　Ｅ８－４トレンチＤ，Ｅ８－４区４層上面検出状況（南から）



図版７　Ｅ８－３区 SR１検出状況（北から／奥壁はベルトＥ）

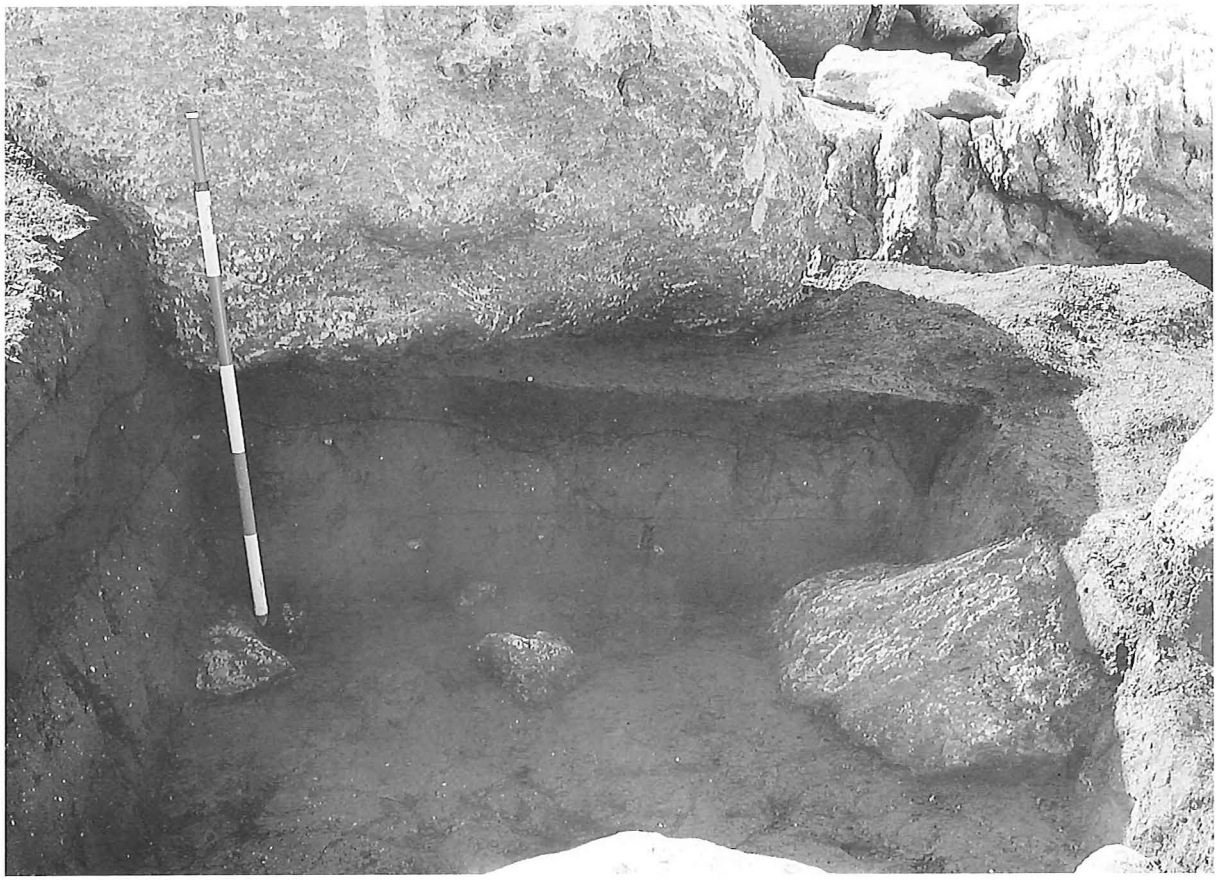
図版８　Ｅ10－３，E10－４区４層検出状況（西から）



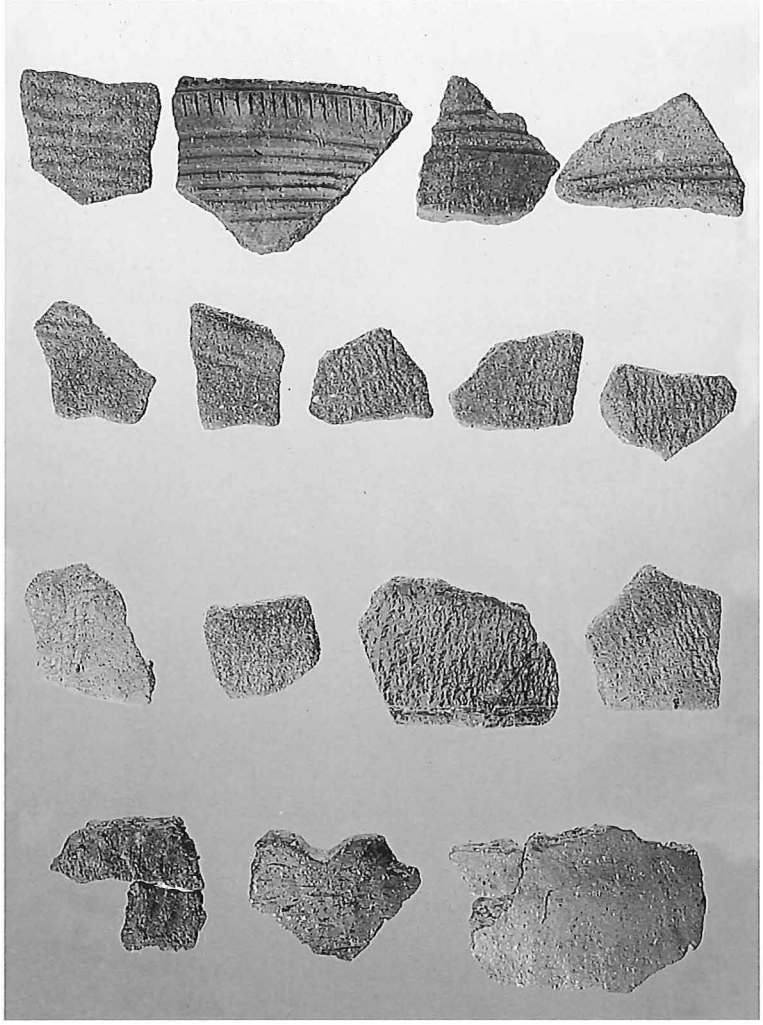
図版９　Ｅ10－４区４層遺物出土状況（南から）

図版10　トレンチＥ５層以下試掘坑（西から南壁を撮影）

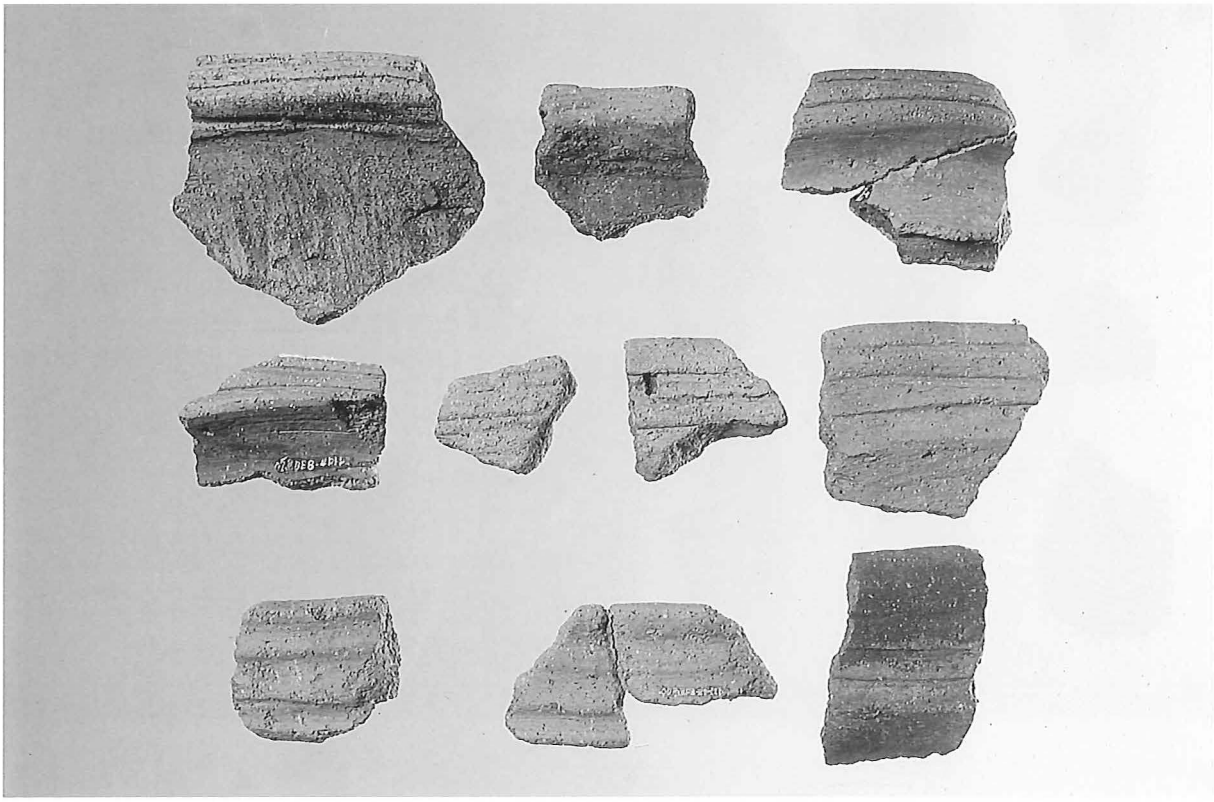
図版11　トレンチF（南から）



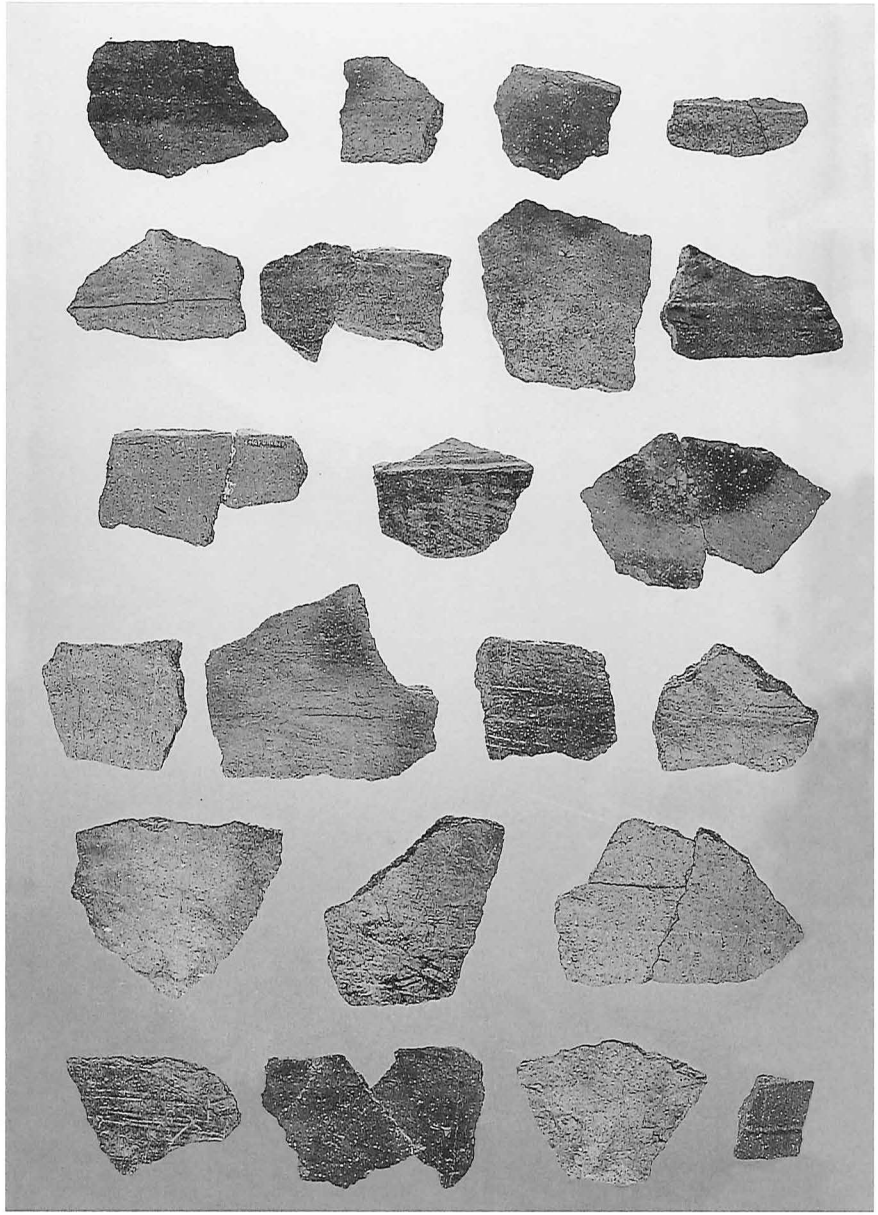
図版12　トレンチG（北から）



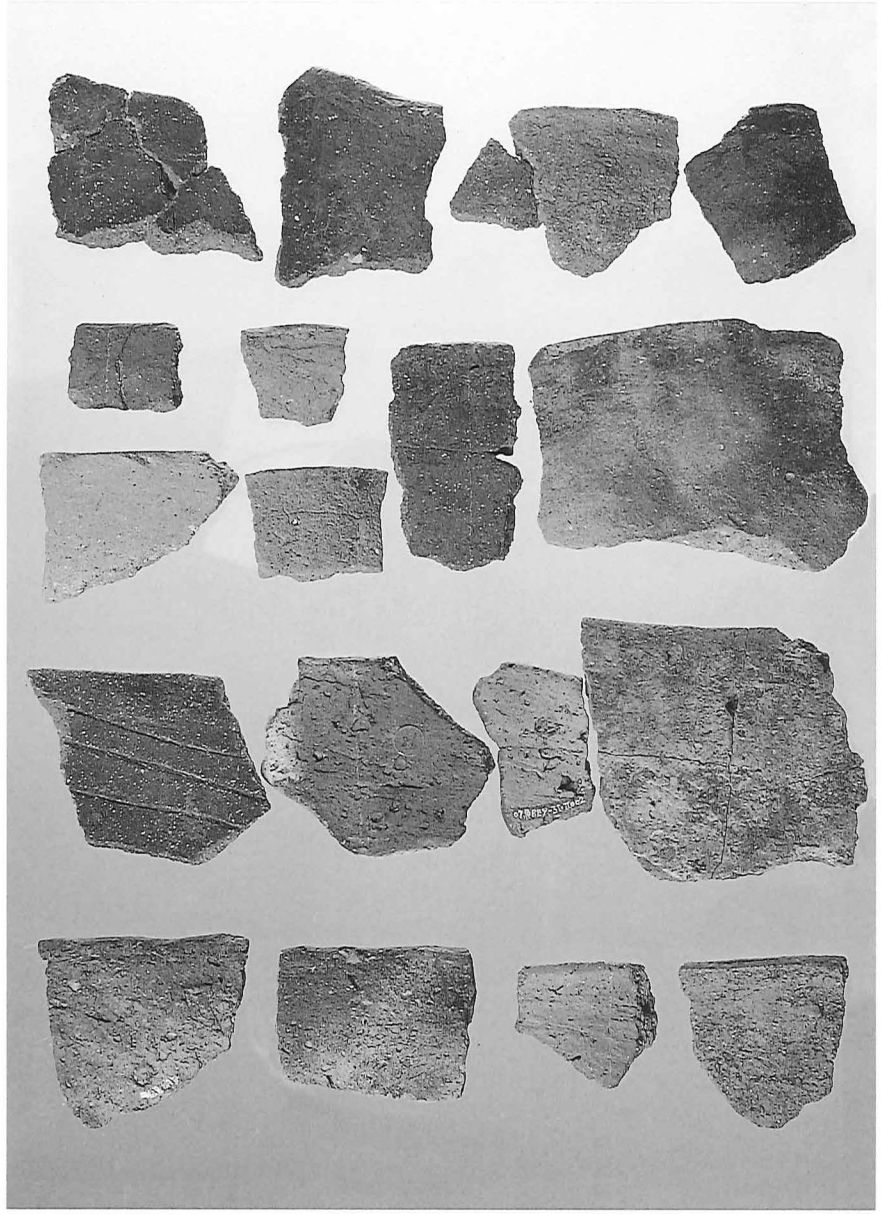
図版13　出土土器①



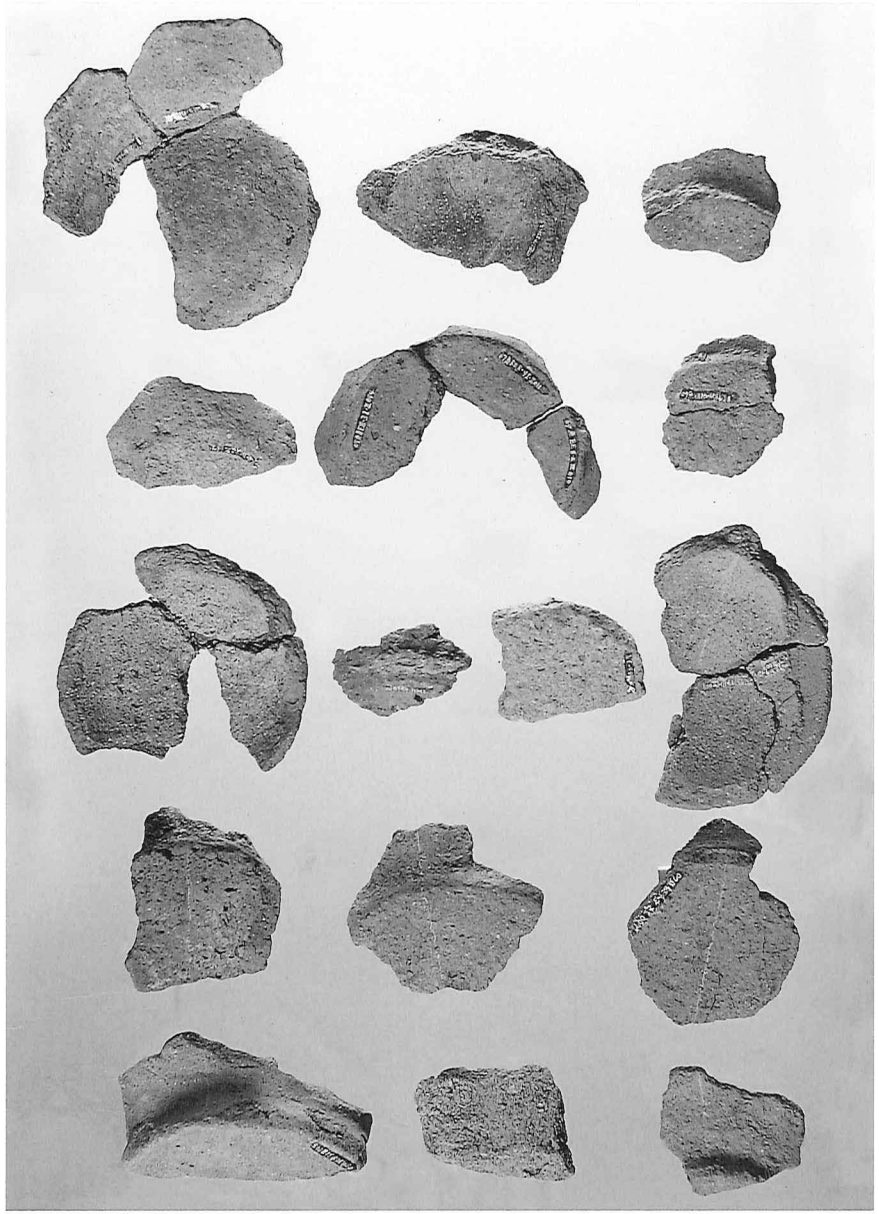
図版14　出土土器②



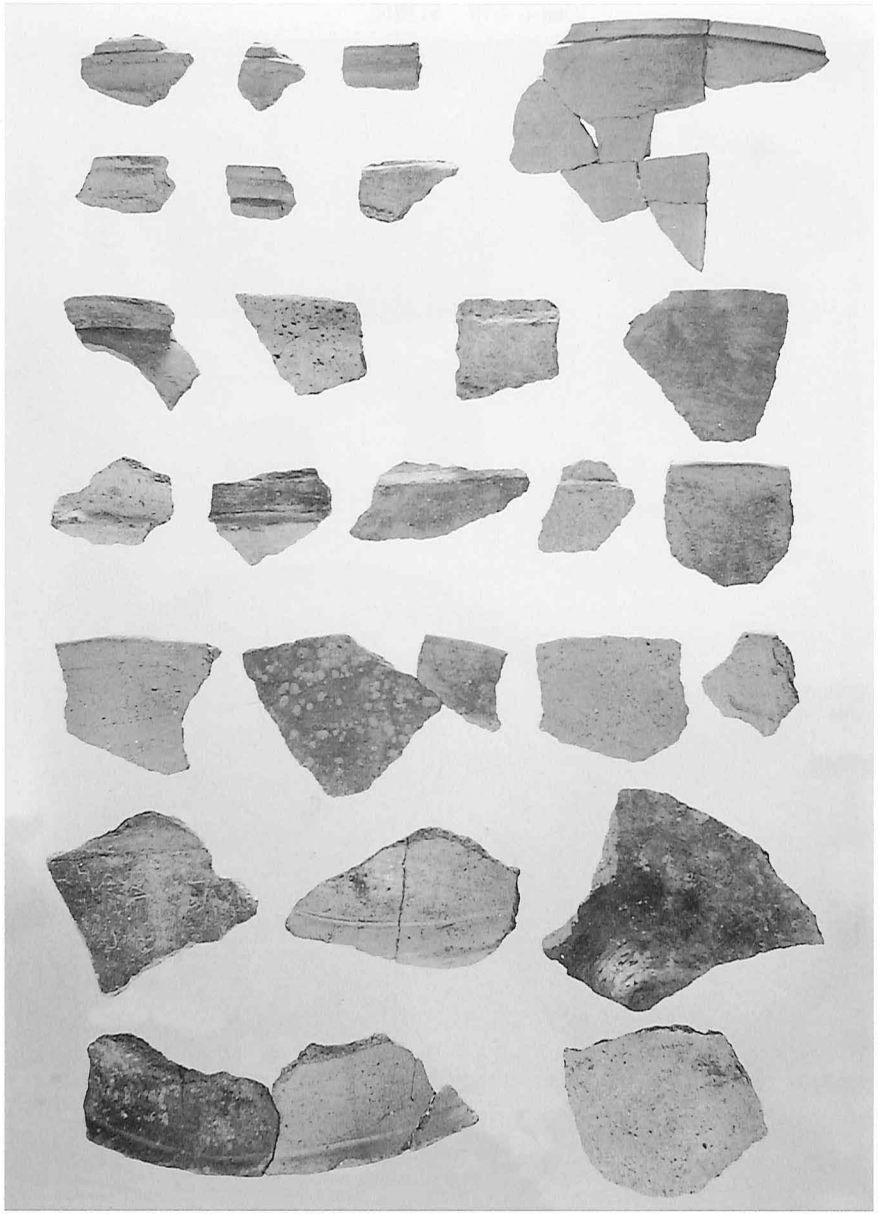
図版16　出土土器④



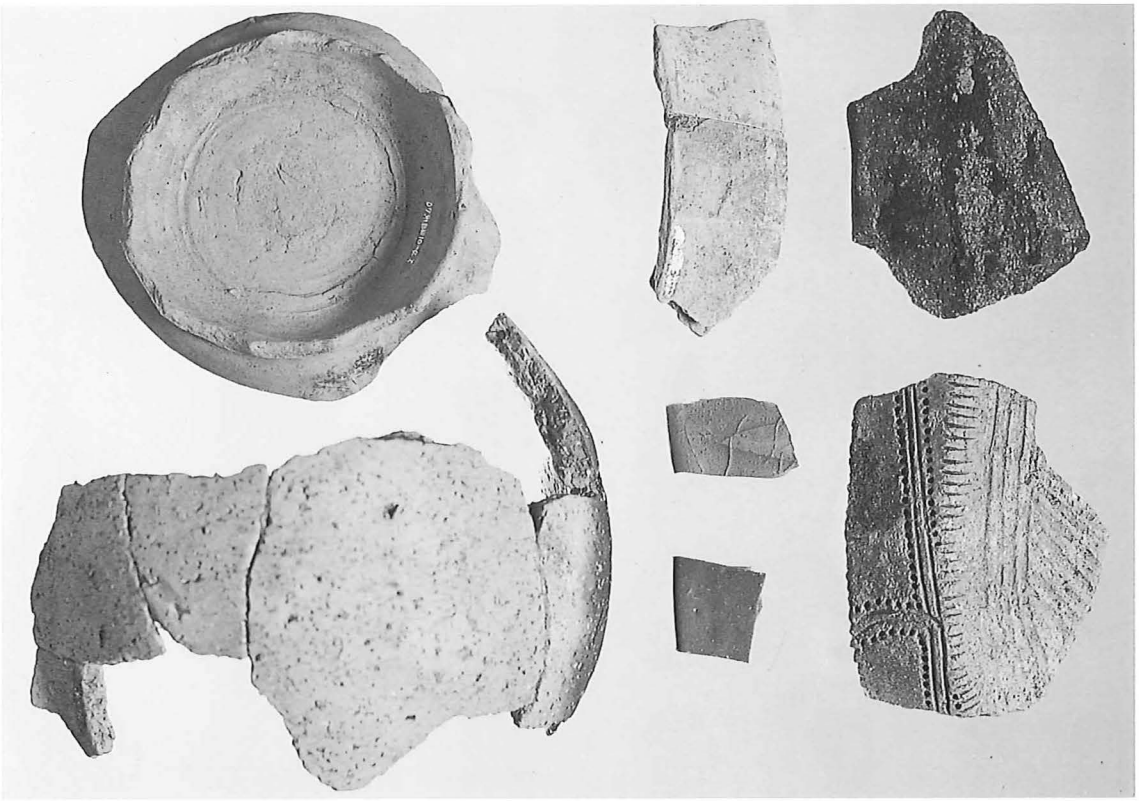
図版15　出土土器③



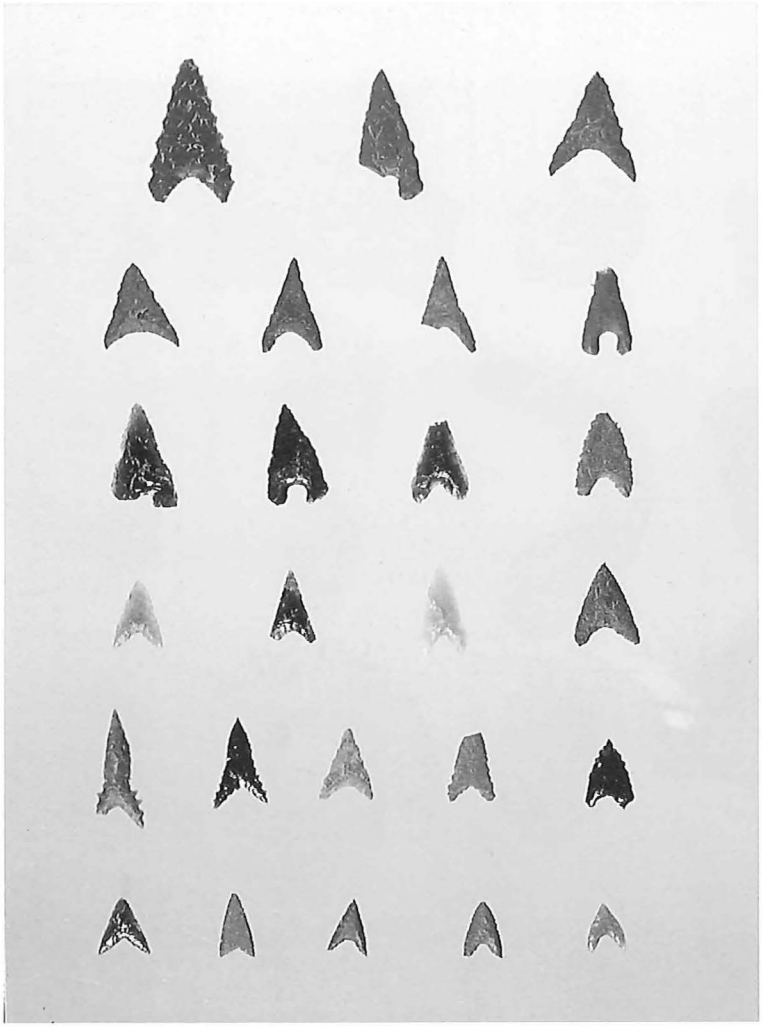
図版18　出土土器⑥



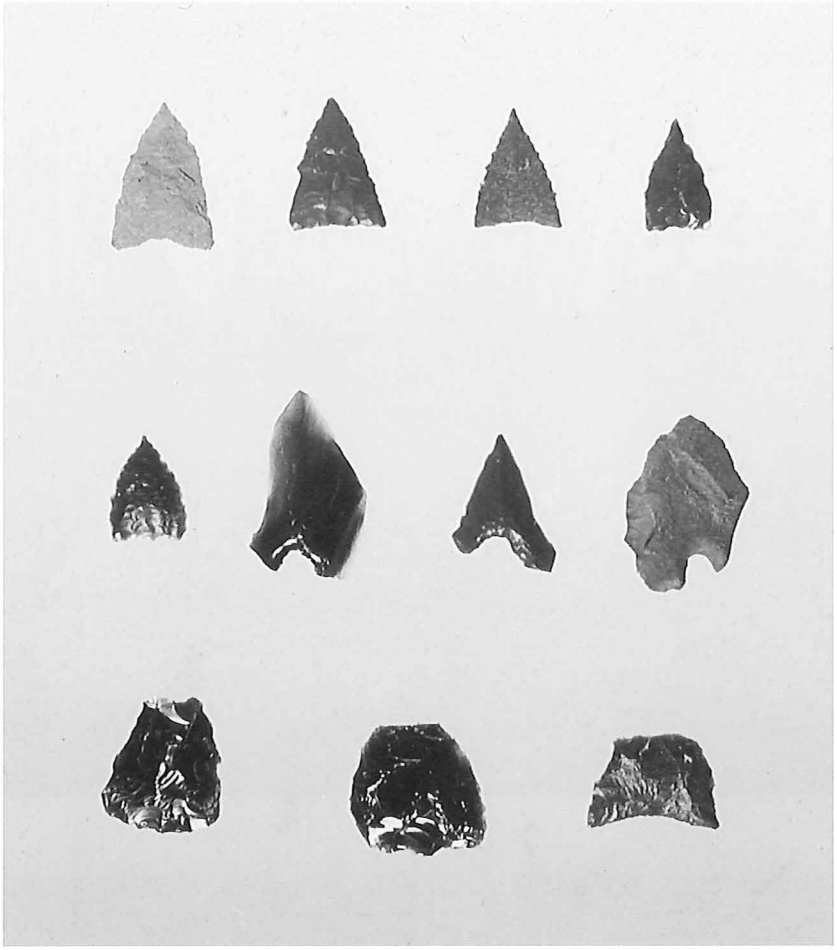
図版17　出土土器⑤



図版19　出土土器⑦

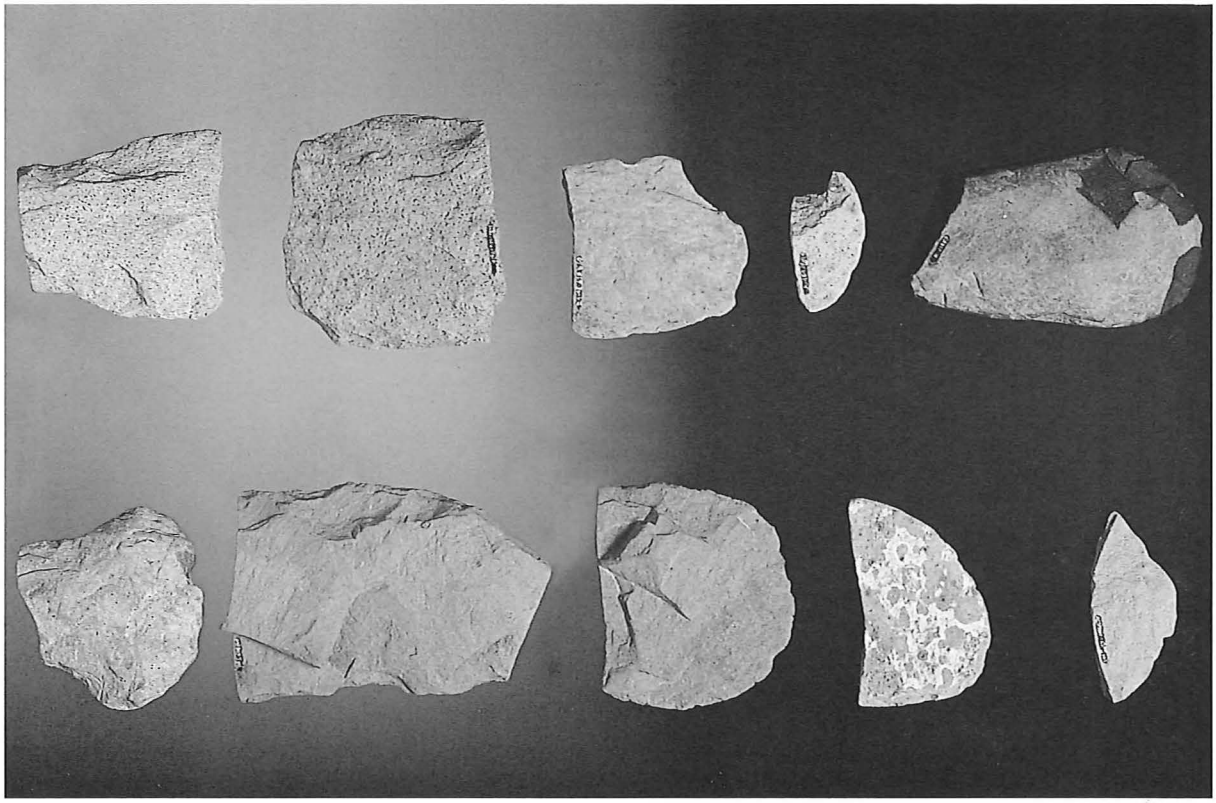


図版20　出土石器①

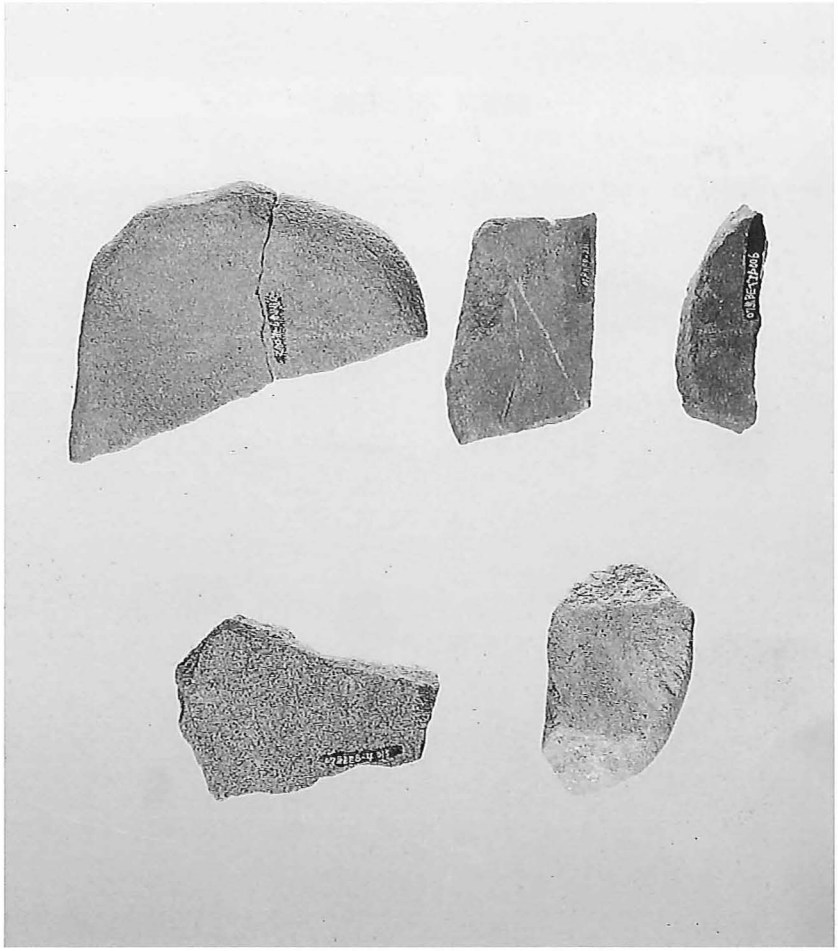


図版21　出土石器②

図版22　出土石器③



図版23　出土石器④



図版24　出土石器⑤

報告書抄録

ふりがな	いわれごびーいせき
書名	魚洗川Ｂ遺跡Ⅱ
副書名	百花台公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第199集
編著者名	山下英明・大谷育恵・福田一志
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850－8570　長崎市江戸町２－13　TEL095－824－1111
発行年月日	西暦2008年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
魚洗川Ｂ遺跡（いわれごびーいせき）	長崎県（ながさきけん） 雲仙市国見（うんぜんしくにみ） 町金山名（ちょうかなやまみょう）	32	44	32° 58′ 49″	130° 17′ 43″	070611 ～ 071012	1500m²	百花台公園 整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
魚洗川Ｂ遺跡	遺物包含地	縄文時代		縄文土器 石器	

要約	魚洗川Ｂ遺跡は，島原半島北部の雲仙市国見町に所在し，標高200～280mを測る火山性山麓扇状地の扇頂にあたる緩傾斜面に立地している。平成16年（2004）の試掘調査の結果にもとづいて今回本調査を実施した。調査区は谷最深部にあたっており，周囲からの土石流と火砕流による堆積が確認された。遺物は縄文土器・石器を中心として約4,500点が出土した。なお，調査区の３箇所で５層（百花台Ⅳ層）以下の試掘を行ったが，いずれの箇所でも遺物は出土しなかった。

長崎県埋蔵文化財調査報告書　第199集

百花台公園整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

魚洗川Ｂ遺跡Ⅱ

平成20年（2008）３月31日発行

発行者　長崎県教育委員会
〒850-8570　長崎市江戸町２番13号
☎095－824－1111

印刷所　株式会社　昭　和　堂
長崎県諫早市長野町1007-２
☎0957－22－6000